川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十八年五月二十五日 印刷
昭和五十八年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六七三号

日川協加盟

No. 673

六月号

高橋操子川柳作品展

日　時　6月15日(水)—19日(日)
平日　正午—午後8時30分
日曜　午前10—午後5時

会　場　自泉会館　市民ギャラリー
岸和田市民会館東50米
電話0724（23）2121

ちっほけな善意でもよし心満つ
お身ぬぐい大仏様のお手に乗る

＊作者の代表作をはじめ約二百七十句、四百五十点が展覧されています。柳友お誘い合せの上、多数ご来場下さい。

連絡場所　岸和田市土生町一九八九—八
高　橋　操　子
電話0724（22）0049

後　援　岸和田文化協会

気どったカッコウはきらいだ、
思いのままに
装うのはいいものだ、
熱い心を満たす
オーエスケージェフ

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社オーエスケー

舌打ちをするしくじりも古稀なりし

大きめの屑篭がある書斎

悠々と髭はやしてる粗大ゴミ

年金の暮しのくせに髭をたて

羊飼いの少年になりたいと思う夕陽

西尾　栞

草　鞋　酒

昭和五十六年五月二十八日は、畏友小西無鬼さんの告別式の日であった。大阪から岳人君と私と参列した。涙のような小糠雨が降っていた。今年がちょうど三回忌となるので、未亡人の冨士子さんより遺句集を出版される相談を受けた。

呑み友達どちらも髭をはやしてる

という拙吟の通り、無鬼さんと私とは、鼻下に髭を蓄えて共に酒を楽しんだ。

句集の題名や題簽について委されたので「草鞋酒」という名を命名したところ、大変よろこばれて、曽て路郎先生が篠山をたずねられた時に、既に「草鞋酒」という題で一文を草しておられて、今度の句集の第一頁にその名文が載せられているので、洵に貴重な句集となった。

遺句集の選を委されて驚いたことは、

幼稚園の列と帰った日の和み

という句に出遭ったことである。

無鬼さんと私との公約数は髭と酒と思っていたが、子供の好きなことがわかって、子供髭、酒と三つの最大公約数を得たことで、大いに感激した。

去る五月七日の本社例会には、無鬼遺句集「わらじざけ」の刊行記念句会が開催された。句集には、

ひと飛びを蛙熟考してのこと

通り雨初夏の睡気をもって去に

糸口を作る煙草の火を借りる

等、秀吟、佳句が満載されている。是非一本を座右において、無鬼さんの「わらじ酒」を御賞味下さらんことを、切に祈る次第である。

酒も句も子供も愛す無鬼菩薩　栞

座右の句

川柳を理不尽を斬る剣とし　（淑子）

私の句

明日もまた無事の日つづけ茜雲　田中正坊

川柳塔　六月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

草鞋酒……西尾栞…(1)
……(2)
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…(4)
自選集……(28)
■川柳太平記(61)《川柳の群像》井上信子……東野大八…(32)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（十丁・十二丁）……(34)
水煙抄……黒川紫香選…(36)
58年度二賞候補作品中間発表……(50)
秀句鑑賞「同人吟……西田柳宏子…(31)
　　「水煙抄……傍島静馬…(53)
河村日満自選百句……(54)
高杉鬼遊自選百句……(56)

夜市川柳

河内天笑

昔堺に男ありけり夏祭り　南北

〝愛染さん〟にはじまる浪速の夏祭りは〝天神祭り〟でクライマックスに達する。そして住吉さんの前夜七月三十一日には堺大浜で大魚夜市が真夏の夜を徹してくりひろげられ将に夏祭りの終曲にふさわしい風物詩であった。

砂浜がコンクリートに埋めつくされた今は一大ロマンのよすがもない。僅かに地名の『堺大浜』という標識が昔をしのばせている。

夜市川柳という遊びを思いついたのもこんなところからである。敢て『遊び』と書いたのは得点を重ねて順位をつけていくゲーム形式にしたからである。蓋をあけた去年の七月から回を追うに従って堺、大阪近辺のみならず中国、四国地方又名古屋方面からもご投句をいただくなど、思いがけない嬉しさを味わせて頂いている。これからも夜市川柳の輪がどんどん広がってゆく事を夢みている次第です。

ところでもうお気付きの方も多い事と思われますが、得点のつけ方や一句ずつ清記して選句の公正を計ることなど大万川柳のよさを

愛染帖……橘高薫風選……(58)
双眼鏡……西尾栞……(49)
虚実皮膜のしずく……橘高薫風……(61)
■随想　ひつじの雑唱〈2〉……竹内紫錆……(62)
川柳批評の衰弱……板尾岳人……(65)
いちご狩吟行……吉岡美房……(66)
田中淑子さんを偲ぶ……白岩文衛……(72)
「『標　的』……遠山可住選……(68)
一路集「化　粧」……森田カズエ選……(68)
「　坂　」……香川酔々選……(69)
初歩教室……本田恵二朗……(70)
柳界展望……(73)
小西無鬼遺句集「わらじ酒」出版記念五月句会……(74)
各地柳壇（佳句地10選／植山武助選）……(78)
編集後記……薫風・酔々・鬼遊・史好……(89)

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ　（路郎）

私の句

埴輪の目この世の風がくぐり抜け　田崎素秋

拝借して居りますが、毎月選者が交代して行くところが夜市川柳の自慢のひとつです。初年度ここまで九回を重ね三百六十句の入選句にはたくさんの佳句が生れていますが、夜市や夏祭りに因んだうれしい句もいくつかあります。

てて噛むいわし堺の浜の夢となる　柳宏子
うろこついた手で冷酒を酌ぎまわり　天笑
砂ほこりまともに受けたたこ焼屋　素灯
酔うたのが巡査に握手求めに来　紫香

などは夜市の夜を再現してくれるし、

江洲も河内も好きで盆踊り　笛生
人情に弱い男の喧嘩好き　武雄

の様に生きのいい句や、

祭り笛女ひとりの夜を酔う　瑞枝
人妻になってしまった遠花火　美代
遠花火まだ夢がある町に住み　宏子

など、味わいのあるお祭りの佳句がたくさん生れた。この七月三十一日にひらく第一回夜市川柳大会は運よく日曜日に当り、多数のご参加をいただきます様お待ちして居ります。大会当日の詳細は七月号の川柳塔誌上で発表されますが、選者の順位などは混沌として最後まで全く予想がつきません。尚、最終西尾栞主幹選『主役』の天地人には、はまちや蛸をを賞品に予定しています。又、大会当日もたくさんの賞品を用意して皆様方にお祭り気分を楽しんで頂こうと考えている次第です。

西尾栞選

ロボットに負けまいポケットベルを持つ
女にはとてもやさしいろくでなし
おもろい夫婦でどちらももの忘れ
愛嬌があって美人で人の妻
湯どうふが好きとはつまり歯が弱い
数え唄ふれてはならぬ傷を持つ
ダルマの目入れると敵に囲まれる

松原市　玉置重人

豆腐屋の角を曲ると初夏の風
わらべ唄故郷はみかんの花の頃
珈琲店の一隅にあるふる里よ
いつも愚かで時計の音に眼を覚す
人を妬んでスリッパは裏返る
背伸びしてひっくり返りそうになる
誰よりも頼りに思うフライパン

大阪市　小出智子

焦点をぼかす満開に喝采す
綿菓子に甘える心春の傷
春がすみ嘘をほんとにしてしまい
すばらしい噂うぐいすもちの粉ちらす
どうしようもない焦りそれが答です
理屈抜き男と女のあみだくじ
蕗　えんど剝くと五月に囲まれる

富田林市　岩田美代

日記帖なにごともなく桜埋める
長電話窓辺のさくら散っている
春愁やひとり言のみ繰り返えし
真実を守ればまもる程独り
葉ざくらや女に増えた数え唄
したたかな女と見えぬ京都弁
許さねばならぬ事あり菜種梅雨

八尾市　高橋夕花

大阪市　西出楓楽

鼻先に妻は人参ぶらさげる
ふところに隠し持ってるネガフィルム
自問自答やさしい答え出している
週刊誌の知識のそれはそれなりに
横書きのこれは私の字ではない
順応性という哀しい性をもつ
お天気が話題親しい人でない

岸和田市　高橋操子

発明が異国と距離を近うする
めぐり逢えば別れる定めの日がせまる
足ふみをしている春の今日の冷え
ニッポンは住いくに山も野もさくら
恍惚と言われる老いの瞳がきれい

孫娘二人共医大進学

入試パスいよいよのれんの先が見え

奈良県　香川酔々

合掌の姿をつつむ花吹雪
腰蓑でアメのうずめは腰飾る
肉と葱持って階段馳けあがる
二階から隣の婚荷見つめてる
奥の院詣では蝶と道連れに
ひょっとこはおかめに甘え花曇り

松原市　谷垣史好

良慶さんも男　妻子がいてはった
地球儀に体温がない応接間
大の字に寝るならいっそ四つ角で
公平に拭いてあげましょ磨り硝子
憎しみがどうにもならぬ一つ屋根
俺の名を気安く呼んで酔うてはる

八尾市　高杉鬼遊

悼　田中淑子さん（二句）

連翹のいろあざやかに小糠雨
締切に釈尼妙真投句なし
モンローの裾をくぐった春の風
倖せのまん中へんで欠伸する
薬屋でうんこのかたさなど申し
年金の一票かるく見なさんな

八尾市　大路美幸

やがて子も嘘の恐さを知るだろう
せめてもの抵抗ステッキ離さない
浴衣着て少し女に戻る妻
父の忌が近づくゆっくり湯につかる
勲章はなかった亡父の道具箱
善人になれず悪人にもなれず

桜井市　岩本雀踊子

お連れにおまかせサービス料とられ
後向きになると本当が話せそう
花菖蒲立っているのは雨女
雑草で終りたくない父の首
季節はずれの味を病人食べたがり
窓ぎわの軽い首がねむくなる

兵庫県　遠山可住

流れ星見込みはずれの荷をまとめ
悪少し呑んで出世の糸つかむ
背信の街を見下ろす忠魂碑
大き目に編んで成長待ちこがれ
ガタガタになって年金もらう齢
押売りが弁当にする天守閣

島根県　堀江正朗

花見酒花の広さを飲み歩き
唯我独尊妻の手のなかにいて
触れてみても分らぬものに触れたくて
自信ないまま握ったり開いたり
この音で妻との距離を確かめる
知らんふり知ったふりして酒の席

米子市　八木千代

水甕があふれて朝を疑わぬ
明るさへ戻ろうとした月の暈
遠めがね覗きすぎてはいけません
晩年の駅は答を問い返す
駅の風誰の味方もしてくれぬ
渦巻を抜けてひとりの風の旅

米子市　林瑞枝

美しい女に鍵は渡さない
ポケットマネーで笑い袋を買いました
ジャズダンス老いの砦としておどり
夢ひとつ郵便馬車は花を播く

目隠しで手の鳴る方へ歩き出す
約束を果す真っ白いレーンシューズ

伊丹市　樫谷寿馬

ダルマ画くときはダルマの顔をする
水道のしずくの話聞いてやる
串だんご刺されるときの痛みかな
顔色の冴えない医者に診てもらう
乳呑児は横目で母とにらみ合う
大正のうた大正琴で聞いている

島根県　小砂白汀

明日もまた生きるつもりの時刻表
骨にしてもらうにさえも酒がいり
きれいごとでは済まされなくなったヤジロベー
つりがね草一本残した草刈機
ままごとの奥から響くオルゴール
芋虫の時代もあった大揚羽

島根県　西村早苗

窓に来てコケシと話す静かな日
声美人夢が破れるから逢わず
齢二つサバで読ませた若い顔
共稼ぎ交叉点から別れ
雪解けて誰かが捨てたゴミの山
旧姓に戻りそれから夜を稼ぐ

島根県　堀江芳子

小走りの足袋の白さに艶をもち
ふるさとの風の言葉が沁みてくる

馴れっこの佗しさ夫の手を引いて
妻の旗耐えぬくときに強く振る
気晴らしに踏む竹歌を口ずさみ
訳聞かず言わず年輪みなさとり

八尾市　宮西弥生

豪華マンションそれから早出と遅帰り
男友達女友達いて老いぬ
関節の痛みに狂う春の譜
駅ビルが生れ戦争ごっこする
通り抜け男と女の夜が更ける
同い齢三人絵になる春霞

和歌山市　西山幸

おたがいの自負が悲劇にしてしまう
歳月やゆるし合うより他はなし
花冷えの休日独り豆を煮る
ライバルが今日も二三歩先を行く
振り向いて欲しくて赤い服を着る
昨日よりすこし上手な今日が昏れ

大阪市　中川滋雀

五風十雨明日の財布は考えぬ
伐られてもどっこい息吹いてくるみどり
鮮やかに欺されました苺の朱
いただきます言わぬ躾が庇えない
待たされてまだ先客の笑い声
代筆の礼が律気に喋り出す

松江市　小林孤呂二

人のぬくみ酒のぬくみの桜かな
階段の数におとこは弱くなる
笑われても唐草模様の好きな母
のんびりもできぬ権兵衛に来る卯月
すぐに起つダルマのような小役人
不沈空母の底は地震帯火山帯

大阪市　津守柳伸

働いてはたらきぬいてビール通
年かしら何もなかった四月馬鹿
野良犬の根性も住む赤い月
とまり木の噂は夜にだけ生きる
舌戦も花の命もみじかすぎ
つがわせて少し妬けてくるインコ

今治市　越智一水

セットした髪に逆らう春の風
別れないだから不幸となる女

大和路にて

薬師寺は足の裏まで拝ませる
娘と旅をして春うらら春うらら
仏像のスタイルを言う娘かな
旅行から帰ればつばめが来ておった

京都市　都倉求芽

満開にしといて春の陽が眠る
満開へ馬鹿な車の砂けむり
心得て花はお寺の外へ散る
さくらさくら酒徒の荒らさぬ朝にこそ

折角の花へいかを焼くにおい
これだけの庭の桜を見ぬ雨戸　藤井寺市　吉岡美房

日が永うなったと思う水枕
満開の桜秘仏と会う縁
セーターを着たり脱いだり花吹雪
満開の桜へピント無限大
公務員花見がてらのデモにつく
ひとりには独りの幸がある桜　豊中市　安藤寿美子

逆らった事を後悔父が病み
泣っ面刺す蜂だからゆるさない
何べんも同じ事私まちごうてへん
沈丁花散り桜散り人は逝く
踏切のタンポポ轢かれる丈で咲き
紅椿ちと咲きすぎてうとまれる　和歌山市　浦野和子

桜さくらさくらで囲む異人館
小波の愛にのんびり浮くかもめ
従容と花は音なく散るものを
ぼんぼりへ花幽玄を舞うて見せ
昼夜帯くらしの垢は見せられぬ
音無しの構えで妻の自尊心　和歌山市　福本英子

行住坐臥浄土に遠いことばかり
合掌の手で囁きへ耳を貸し
南無如来指先あたりむずかゆい
満開に浪人もいる花の雨
のしつけて新紙幣春を飛んでゆく
やわ肌の名残りを捜す仕舞い風呂　岸和田市　古野ひで

勿体ない自由の隅にある孤独
言い過ぎた悔いの余韻を抱いたまま
いい事が重なって来る春が来る
大切な思い出だから秘めておく
福耳をほめて女将が酌ぎに来る
落ち椿かなしからずや紅の色　浜田市　中川幸一

倖せな蛙の眼覚め春うらら
スタートと知らずに喜々とランドセル
遭難死すると値段がつく命
衝撃に白紙が似合う日記帖
碧い眼の動きで決まる防衛費
訳知りの顔に摑ます骨董屋　新宮市　川上渓水

切り詰めるくらしを知らぬ化粧ビン
言い切った自信が男の顔にする
ローンだけは言わぬ女の見栄くらべ
落選のダルマは知らぬ間に消える
廻り道したはずなのが先に着き
税務署に睨まれそうな庭が出来　米子市　野坂なみ

汽車ポッポ子と約束の駅がある
ライオンの満腹餌へ振向かず
壁のきず庇う暦は大き目に
同居しても所詮一人よ花ぐもり
授戒して一歩仏に近く座す
北へ餌求めて船は揺れ始め

和泉市　岡井やすお

クーデターは特種にせぬ週刊誌
南町奉行なにわで腹を切る
警官の後警官に尾行させ
先生へまず護身術講習会
開幕はどれも優勝プロ野球
有事用海外別荘万愚節

大阪市　川口弘生

花嫁の父に軽さと淋しさと
毒ガスを作った島にも陽は昇る
電灯の下では赤いアレキ石
久闊を述べて選挙の話です
酒おんなこの世に毒が多すぎる

大阪市　西森花村

アンコール上映という三流館
宝船降りる気のない七福神
小川より知らぬが目高春楽し
耕耘機無かった頃のたにしあえ
真直ぐに葦も電柱も立っている

大阪市　江城修史

夢ひとつ子に賭け夫婦にある山河
古き夢繕ろう老いに春の風
春愁の女に贈ろう花言葉
振り向かぬ帰省子の背をしかと受け
まあまあと言うて病いのはかどらず

大阪市　河井庸佑

三浪へ同情するようなたね梅雨
景気よく立ったがあとが続かない
これぐらいわからんかいな誰に似た
肩の凝る話のあとのうまい酒
末席の意見が話の流れ変え

大阪市　天正千梢

フリージア重い空気を救うてくれ
かみそり型の人カタカナで世を渡り
人の痛み分かる心が邪魔をする
お山はいたずら落石注意と書いてあり
あっけなく逝ったその日は梅も散り（金井みさをさん逝く）

大阪市　神夏磯道子

忘れてたやさしさに会う柳の芽
自販機へ愛想話はせずにすみ
保護色の虫でも裏は知っている
坂登る掛声がいる齢となり
ロボットに手の温もりを盗られるな

大阪市　本間満津子

友へ

戴いた拍手貴女と半分ずつ

ほんとうは花束受けるのは貴女
お供えは母子で摘んだ草の餅
坂道でやさしい花を見落として
孫が弾くピアノでないからやかましい

大阪市　黒田真砂

小さな嘘抱いて女の出番です
漁火の向うに闇の淡路島
小石蹴って失意の朝のふところ手
頂上の風は知ってた少女A
想いやり母の背筋がしゃんとのび

大阪市　那須鎮彦

流されることも一つの知恵である
会いたくてつぶてを一つ投げ入れる
子育てが上手な母の子守り唄
よく笑う女が帰る寒い部屋
哀しみは人の裏側わかり過ぎ

大阪市　藤田頂留子

両手なら素直ににぎれるのに米ソ
車農工商歩道も二輪がでかい顔
道路駐車横領罪で起訴しよか
曲り角ほしいと思うエリートで
神様に一寸あいさつして句座へ

大阪市　杉本智慧子

ふと触れた手から明るい春の声
新入社員研修ロッジの青い風
狂い死にしたくも思う落花舞い
新学期カスタが響く四拍子
ちょうちょうの変奏曲は日もすがら

大阪市　横地雅風

入学式馬の字読める木も読める
入学式終われば教わる車事故
道草はさせぬ車とアスファルト
ぼんぼりに傘と私が花の下
見飽きせぬ桜よ今日もああ余生

大阪市　北勝美

来る時は手ぶらでこいと花便り
日曜迄散らずに待てよ花吹雪
パッと咲きパッと散るのも欠点か
面白半分そこから悪の芽が育ち
今日からはてんやわんやの孫同居

大阪市　村山光輪

遠足の列孫に似た顔に逢い
はってくる孫は笑顔で抱けという
幼稚園花を持つ子は手を引かれ
好日と悟ったつもりが泣き笑い
破損仏人生観を勇気づけ

大阪市　山根いつを

生れ来てかけるお世話の数知らず
渡る世に二三がゼロの九九もあり
早起きの湯気の中から母の顔
あのときにああしておればこうならず
石橋を叩かぬ振りでまだ叩き

大阪市　橋元美恵

和え物がおいしい子等のいない膳
あじさいが天下やさしい雨が降る
片想い何度も何度も砂掴む
考古学世間嫌いの隠れ場所
大空に祈る小さなことばかり

大阪市　岡田ふみ

待っていた春は野球に悩まされ
若い日の自分を賞める古写真
母の選った柄は後から好きになる
さて床に入れば眠気飛んで行き
みえすいた断わり電話花の雨

岸和田市　植山武助

一行だけの職歴で済んだ幸
三食のメモを残して妻の旅
年の功に町内会の役が来る
姑になった二人の待合室
嫁がせた淋しさ孫で取り戻し

岸和田市　福浦勝晴

〝暁に祈る〟を茶の間で聴く平和
鼻唄が出るほどパチンコ勝ち進み
摘むことが楽しい摘み草摘んで捨て
新刊書買うのが趣味で買えば積み
雑草に寝転び謀反考える

岸和田市　清野こう

聞かぬふりして聞いている妻の愚痴
間の悪い事は酔うてた事にする
大空へ羽ばたく夢の新任地
又雨か雨かと思う菜種梅雨
花束を受けて今日から嫁姑

岸和田市　福島せつ子

すり寄って猫が背中でものを言う
応募したクイズに夢のパスポート
病む身にはすぐ日が昏れて夜が明けず
散る事を忘れ造花の色あせる
ワンパターン黄門の視聴率

岸和田市　原さよ子

つまらぬことみんな忘れる今日の空
思い出によく似たドラマで出る涙
あれこれと利殖考え踏み切れず
洗濯機フル回転の五月晴れ
れんげ草活けるコップの色を選る

岸和田市　島崎冨志子

今日もまた殺されてます孫の銃
ぼけぬよう趣味の歩幅を考える
お年玉はたいて免許とる娘
親ばなれする子へ子ばなれ出来ぬ母
エリートの鼻が尖ってしゃべり出す

岸和田市　吉水照江

白い髪チョッピリ赤も着て見たい
ひなを待つ祈りを浴びてこうの鳥
入園児黄色の傘に赤い靴

心配がまた増えました孫バイク
同居して黙秘の日々の老いとなり

岡山県　嘉数　兆代賀

皿まわしの皿が回らぬ日のショック
自画像を描けば亡母のかおになる
節くれた指に馴染んだ温い土
鼻欠けた石の仏で頼みよい
満足な歩幅へ沈む陽がきれい

岡山県　白岩　文衛

定年のぼく雀とも仲が良し
熟年を銀行様におだてられ
バックミラーに心のひとを確かめる
干した布団ぐらいで生きる歓び
定年の眼に水仙が美しい

岡山県　直原　七面山

吹けば飛ぶ平で無事
定退の日も老妻に見送られ
若菜摘む妻幸せの中に解け
変る世に変らぬ妻と居て楽し
あなただけ我慢すればと妻の言

岡山県　岩道　博友

退職金目当の手土産派手に置き
ロボットが愛を知らずにただ動き
言い訳をしてから言葉を待っており
近江路の旅に大津絵買うて来る
嗜好品妻に合わせておく老後

倉敷市　野田　素身郎

研究室今年も桜見損ない
二年ぶりの落花が嬉しい松葉杖
買物の供待たされたうえ持たされる
試着重ね結局最初の服にする
栄転へ無理な背伸びをまた続け

倉敷市　稲田　豊作

生きている歓び友と輪を広げ
声若しゲートボールの老婆たち
お灸礼讃ガタの来ている老い仲間
年金日孫がこんなにはしゃいでる
晩年の一と花綺麗に咲かせたし

倉敷市　小幡　里風

躓づいた僕へ夕陽が燃えてくれ
美粧院出るとき気どった顔をする
ハネムーン只今帰ってきた二人
いい事が二つ重なり軽い足
交番が隣で鍵をしめ忘れ

倉敷市　藤井　春日

親としてほほ笑み無くした娘を案じ
みちのくの春は白鳥の別れから
小姑が来て姑と嫁とにひびを入れ
創業百年止むなく店を閉めました
物言えばその一と言で実家が知れ

倉吉市　奥谷　弘朗

神祈るその掌の中に余る欲

飛び回る男の抱いた不発弾
成り切れぬバカへ自嘲の雨が降る
口にせぬ愛を男の胸で決め
新米の課長に机が大きすぎ

倉吉市　渡辺菩句

格子戸のどこから見てもいる仏
エレキギター鳴らす私の星がいる
何か忘れて来たままに下り坂
春雨も柩が出るとどっと泣き
骨壺の母とふたりという家族

倉吉市　渡辺独歩

沈思黙考辞書は埃を帯びていた
鐘一つ鳴らして一つの罪洗う
コラム読む消化不良のやせ蛙
くちづけを受けるまなこは軽く閉ず
約束を包むベールは秋に買う

松江市　恒松叮紅

子宝が来て年金を覗かれる
別居して柱時計が狂い出し
几帳面な電話律義な人がかけ
躓いた女が背負う後遺症
血統書だろうと仔犬やかましい

松江市　柳楽鶴丸

ザ・ファッション職業に生きる妻
組合運動で包丁のリズムも変る
一度踊って見たいフラメンコ
木に登った豚は自殺する
ブリッ娘の足に噛みつく宿の下駄

松江市　舟木与根一

どじょっ子も鮒っ子も居る入園児
抜擢の辞令を貰う四月馬鹿
ドラマとは違う先生舐められる
美しい花は他人の距離でおこう
遠まわりしたのが長寿の途を行き

松江市　梅本登美也

寄せ墓のことにしんみり妻が触れ
月一つ残し波止場の灯が消える
先生がやっとくつろぐ我が家の灯
霊園にしとど慕情の雨が降る
何一つ誇るでもなし父の海

松江市　竹内寿美子

走るだけ決勝点の無い母よ
針穴を外れた糸の独り言
すぐそこに別れが来てる躾糸
走るのを止めた日からの父の背な
母の糸切れて千羽の鶴が飛ぶ

和歌山市　若宮武雄

ははの骨埋める深さを考える
有情無情春の柩へ花吹雪
春日は遅々もう見当らぬ花の影
どの国の民も拍手は同じ音
それを言うならばあんたも似た者サ

和歌山市　松原寿子

確率はなくてもいいの好きな人
一途なる想いへ遮断機下りたまま
逢えぬ日もひたすら回る花時計
さりげなく痛みを抱いて梅雨の貨車
咲いてなお花芯に掟だいて逝く

和歌山市　内芝登志代

少し派手着ても似合うを嬉しがり
カタカナの花の名覚えぬままに植え
一坪へ春のこころが咲き初め
祝杯の手がふるえてる娘の華燭
ハンサムに惚れた因果の火の車

和歌山市　坂部紀久子

桜咲く頃物事が始まれり
カラオケの騒音桜散り急ぐ
三坪でもよし我庭の花吹雪
紙人形帯もとけずに人を恋う
生真面目が七三の髪崩されず

和歌山市　細川稚代

快報を待ちくたびれた落椿
素顔からもらう心のあたたかさ
細い指からませ絆太くなり
音もなくふる春雨に置ごたつ
嫁の座が長くて本音まだ言えず

出雲市　原独仙

春眠を老いも暁覚めやらず
春本番桜と選挙花盛り
猫膝で欠伸している独り言
公約の嘘へひらひら散るさくら
禁煙へ要らぬライターここかしこ

出雲市　園山多賀子

人間が枯れて備前の壺を賞で
因習の母娘をつなぐ痩せた虹
旧態依然故里にしきたりがある
雑学に長けて話題が豊かです
いにしえの恋のかけ橋結び文

出雲市　板垣夢酔

判ろうとしない子にチョーク泣けてくる
浮気の言い訳を考えている夜道
年金では食えぬ食えぬが生きている
肩書が失せると背骨曲りだす
アデランスつけると赤が着たくなる

出雲市　石倉芙佐子

紋黄蝶朝の反旗を翻す
遠い日をかぼそく想う松の芯
一片の情に逢わず散る花よ
子を為してなおさら円いお月様
薄紅色の帯にしようか花の下

出雲市　吉岡きみえ

日本の女に和服という宝
セットして町の風にふれたがり
ふた親をのせた新車もすねかじり

わら屋根の下で文化の釜を炊く
他人酒心ゆるせぬとげがある　米子市　小西雄々

一つだけ夢をかなえたフルムーン
ライバルを蹴落せ桃は熟れてゆく
山門で仕切る世界が一つある

妻　定年退職（二句）

いたわりの言葉をさがす辞書を繰る
虹を追い三十五年を登り切り　米子市　石垣花子

人肌の豆へ抱かれる種糀
肩書も内助をあてにして増やし
見通しへ泊らせもせぬ里の母
公害を見通すパワーに誘致負け
頃合いの杭へ余生をつながれる　米子市　増田竹馬

札束を蹴った日晩酌よく回り
雛さまコーナー2DKを意識する
ひとり旅独身貴族謳歌する
不整脈川柳リズムに似ておかし
視力戻り孫と将棋をして負ける　米子市　田中亜弥

箸折れて今日のリズムを狂わせる
這いながら再起の壁を越えて来た
性格が同じでウマが合いかねる
編棒で気長に愛を織りあげる

手鏡を覗くと亡母の顔だった　米子市　桑原伊都

青春の残照夫の軍歌きく
タクト振る老妻のリズムもまろくなり
同居してコーヒー党へ仲間入り
種風船飛び友情の輪も広げ
忘れかけた温みを駅の裏で知り　米子市　雑賀美世

傷痕を隠して回る夫婦ゴマ
制服を脱いで肌刺す風に会う
終列車通り灯を消す山の駅
結論をコーヒーいつまで待たされる
一票を狙う葉書が今日も来る　米子市　菅井とも子

あの頃の涙知ってる郷の駅
遠い恋守る指輪の嫁きおくれ
姑となる日におもわくが先走り
偽りを繕う針は捨てました
下宿では素直に返事している子　米子市　政岡日枝子

健やかな胎動愛する母を蹴る
石を蹴る下駄よ失意が癒せるか
雛まつり母系の中の父の位置
世も末の乱れ先生に矢をつがえ
底までは覗かせまいと母の壺　米子市　寺沢みど里

約束の通りに生えた糸切り歯
子が発てば夕日が沈むだけの駅
帰省子が突然恋を打ちあける
襖さらりと開けてこだわりない会話
手習いの膝が耐えてる外は春

竹原市　小島蘭幸

病室でおぼえた流行歌ひとつ
春はゆううつ妻も私も花粉症
ロケ隊が来た故郷にある昔
先生が好き幼稚園休まない
長女入園次女にも鞄買うてやる

竹原市　森井菁居

玉串料はずんで見ても貧しかり
快活な二女が主役の茶の間の灯
牡丹寺諸行無常の風が吹き
善人と見たり惑いがあからさま
棒グラフ背負う男に暇が無し

東大阪市　桑原喜風

修繕の高く惜しくも使い捨て
年寄りの戸惑い物価零の数
もと他人一家バランスとる平和
お役所の国旗納税思い出し
車庫つきローンの重いマイホーム

東大阪市　斉藤三十四

海峡の流れを下に鯛を釣る
佐度に来て老いもおけさの輪にはいり
免許など笑う棟梁の腕たしか
塵芥を捨てる免許は汚職めく
自動車も花も免許をつけて嫁き

東大阪市　竹中綾珠

四捨五入いつも四捨になる不幸
雨ついて投票に行く老い律儀
猫柳銀色の芽が自己主張
とろとろと居睡りをして乗り過ごし
指痩せて指輪落して気が付かず

東大阪市　崎山美子

所詮人事神に救いをただ求め
しのび逢う女心を知る鼓動
母となる喜びしめす体重表
体重ひとつ調整できぬ弱い意志
人事まで奥の意見が左右する

堺市　高橋千万子

異動期へ夢ふくらます四月バカ
合格の笑顔へ贈る腕時計
実社会とまどうている模範生
倖せのふたりで月賦忘れてる
門構え一役買ってる犬の面

堺市　大道美乙女

子のリズムにあわせてまわる二十四時
追憶をきれいに見せる万華鏡
捨てられた姿で雑草根をおろし
三猿になって世間を疎く住み

善人のうそは本人からばれる　兵庫県　河原みのる

ピンポンで結ばれテニスで仲違い
蛇の道はよう知っていたグロムイコ
メークイン植えれば土に春の音
二十四孝どうしよもないシュン外れ
負けん気の仕事を齢に叱られる　兵庫県　辻文平

鞭あてる馬が木馬になっている
訣れたくないサヨナラをポケットに
演技でもよろしい嫁の持つ笑顔
中三の旗が眠れぬ夜を責める
定年のここできっぱり名を捨てる　兵庫県　大江秋月

鎌倉・箱根に旅して

団体が富士の雄姿へカメラ向け
大仏の背丈バックに写される
土牢を見せ物みたいにのぞき込み
ガイド指す彼方に富士の雪景色
芦の湖の深さへ春の観光船　兵庫県　藤後実男

世渡りが下手上向いて唾をはき
わからないけれどカルテを覗いてみ
焚火の輪イヤリングした娘が一人
左遷地へ行くのに仮面一つ買い
日曜も一軒開けているお店

笹舟に少女は恋を知りそめぬ
陽の中の十七歳よ金仙花
倖せをさがし疲れた月見草
すばらしき彩よわれるなシャボン玉
ふるさとの駅から温い風になる　吹田市　藤村〆女

白もくれん見つめていると消える過去
暗記する手紙むらさき匂うなり
アドリブをジョークだと言うずるい人
物忘れ笑い合うてるおぼろ月
よく笑う女と並ぶ春の池　島根県　西川景子

母としてゆるぎなき日を子に残す
面影をおいさくら吹雪の中走る
花ぐもり花見ショールの似合う女
ささやかな畑で春の芽に出逢う
思い出が悲しい片手の人形抱く　島根県　栂みどり

今年こそこそへ月日が早やすぎる
悪友という味方あり縄のれん
割箸を割って日本の膳につき
夫婦して昔を語る風に逢う
あの人へ賭けて見る気の足袋をはく　島根県　木村はじめ

疑心暗鬼の小鉢に落とす生卵　松本文子

女のぐち何処へ捨てよう花ぐもり
皿に盛る竹の子亡父も好きだった
仕送りが終ると急に老けてくる
栄転も左遷も花は振りむかず

寝屋川市　宮尾　あいき

舞踊柳梗会をみて

藤娘これで二人の娘がござる
恋を舞う唄の文句はわからねど（幼女）
差す手引く手糠みその香はどこへやら
美しきままで逝きたし落椿

友逝く

永久の旅最後を匂ううす化粧

寝屋川市　江口　度

一人息子の甘えに弱い細い脛
賞め育て息子はすぐに走り出す
お隣としてはならない背くらべ
紙コップ肩の凝らない話など
煙草吸いつくし立ち去る花時計

寝屋川市　柴田　英壬子

ここ丈けの噂本人まで届き
共通の批判受話器が重くなり
春ですね玉子料理が主役です
癇性にぞうきん掛けや京の路地
春がすみ煎じ薬が煮えている

寝屋川市　稲葉　冬葉

豆の木を登って見たい昼下り
給料日妻を呼び出す赤電話
鶯はもう鳴かぬなり寡婦の酒
煩悩に徹しておんなよくねむり
忠実に生きた男に墓がない

鳥取市　小林　由多香

履歴書を飾る短大卒業す
計の電話それから苦い酒となり
年金で足りる約束孫と組む
逆探知しらぬ電話にすごまれる
宿題を覗く母にも自信ない

鳥取市　両川　洋々

喪の明けたおんな再起のバラを買う
制服の処女へ熟年けつまずく
臨終を囲みひそかな雨を聞く
花時計愛に背いた午後に枯れ
ほどほどに締める手綱へ稼がされ

鳥取市　森田　熊生

うんそうかそうかと父の眼に戻る
考えて歩く足元石があり
靴が鳴る鳴る青春の門を出る
割り切って履く朝々の靴がある
早逝へ馬鹿というしかない涙

鳥取県　川崎　秋女

海猫の飛来孤独から脱す
血圧の二〇〇すこうしうろたえる
プラトニックラブそんな言葉をまだ愛す

散り敷いて花は最後をまだ飾る
明かしてはならぬ語がある花の雨　鳥取県　鈴木村諷子

掌を当てて八十年の鼓動きく
病衣ただ一枚手術台に乗る
蟹の瞳が濡れて今宵は満月だ
保育園出て母ちゃんも一年生
一生は槿花一朝の夢でしか　（前月分）　鳥取県　清水一保

一票の重み問うてる乳母車
大宇宙にたった一人の愛を選る
止まり木に他所の雀が来て止まり
中流という城外堀まで埋まる
胸に咲く桜で嵐吹かば吹け　鳥取県　清水一保

蛍の光親の光をじっと見る
政争も物価も知らすな哺乳ビン
曇りガラス拭いて私も明日を視る
花曇りひばり確かに空で鳴く
揺れる日も有って夫の坐に自信　鳥取県　森田布堂

春風駘蕩花見の山の無礼講
公園の猿も浮かれて春や春
つむじ風受けてとまどう風見鶏
高峰のおっぱいで釣るフルムーン
ピストルが火を吹く夜の城下町

雲雀来て鶺鴒もきて春耕す
憂いある眼には桜花のよそよそし
割り切れぬことのあれこれ花の雨
悔やまれる一言夜の花の冷え
愛されているらし笑顔が素晴らしい　鳥取県　林露杖

水浴びに順番がある篭の鳥
京に田舎ありれんげ咲く
夕食を済ますと眠くなる余生
行く当は無けれど髭は剃っておく
まばたきはみんな同んなじ漫画の眼　京都市　松川杜的

愛された女は一つ山を知る
振り返る毎に許さねばならぬ事
鏡騙して逢えば冷たい風が吹く
青春の娘の反抗の黙否権
春の旅愛の絵巻は捨てて来る　京都市　山本規不風

妻今日も不沈空母の化粧する
教会の屋根に煩悩溜めている　守口市　羽原静歩

宇治風景

花曇り対鳳庵のおうすかな
骨董屋寒い顔をして客を待ち
人間を裁く人間の咳ばらい　守口市　野呂右近

書信読む旧仮名遣いなつかしく
妹が姉かばい出す六十路坂
爽やかに筍飯に旬を嚙む
つなぐ愛こわれる愛も赤電話
買わないと当らぬ理に負け又もくじ

岡山市　時末一灯

男坂妻子のためという鎖
知名度があがり鎖が太くなる
諦めた日から老後が始まった
春待って何のことない待った春
鏡にもなかなか自身見つけかね

岡山市　行吉照路

人生のページが薄いコピーされ
末っ娘のブレーキ父によく効いて
妻肥えて男はいらぬ音たてる
民謡は抜てきになる左遷の地
使い捨てそれで満足雑魚の詩

岡山市　井上柳五郎

いいことの予感した日も無為に過ぎ
男にも駈込寺が欲しい世に
ビタミン剤AよEだと夫婦もめ
子の命日思い出させる桜咲く
千金の春宵ゆれる雨と風

唐津市　仁部四郎

本棚のへそくり妻へ犠打とする
自販機の酒も同じ化学式
長男の決断母の周遊券
本心に鎧を着せて標準語
人情を押し売る標語の好きな人

唐津市　浜本義美

投函の後で気付いた誤字一字
松浦潟に写るお城も春のもの
褒められて中華料理は夫の役
跡継ぎの子にまだ嫁がこぬ不安
今更にカメラの前じゃない夫婦

唐津市　浜本久仁於

海峡封鎖鮭の帰りが気にかかり
春燕ロードレースの首位が着き
ポカポカと水銀柱の腰がのび
気を揉ます首相の南京玉簾
傷心の涙は月が拭いてくれ

唐津市　久保正敏

慶弔の袋に包む会者定離
警官の汚職刑事と仲間割れ
十年後医者が媚売るまで死ねぬ
調印が終って皺の手を重ね
裁判に勝っても世間が許さない

西宮市　野呂鵜汀

春の野辺つくしを避けて尻を置く
角座出てふくみ笑いをして歩く
同席は美人で話し難きかな
鬼子母神恐さの中に暖かさ

建て売りの酔うて我が家はどれかいな　西宮市　杉浦婦美子

おみくじの吉からすこし欲がでる
誰にでもそっと置きたい海がある
倦怠期ノラにもなれずふて寝だけ
気の弱い鬼でときどき歯が痛む
喪の女の化粧気になる茶房の灯　西宮市　妹尾春江

結び目がゆるくなってる七年目
コロッケにストレスが溜る共稼ぎ
新しい生命の絆抱きしめる
亡母の知恵欲しい迷いの日が続く
籠の鳥今日は悲しい唄ばかり　西宮市　林はつ絵

小心ですぐ疑問詞を使う鳩
好きなことして死に水を考えず
背信のひとも許して花が散る
リラ咲いて心さいなむ遠い嘘
長らえて孫の手を借りふとん干す　高知県　松岡三吉

二日酔あさの茶碗の重いこと
回覧板いくさの果ての生き残り
カバほどでないがキャベツを喰わされる
ほんとうの弱虫核の保有国
人が笑いますと普段着ぬがされる　高知県　赤川菊野

フィクション入れねば書けぬ自叙伝で
中国展筆一本を買うてくる
あのきっぷそうかやっぱり土佐育ち
倖せに暮して居ます荒れた手で
中流の意識で巡る美術館　藤井寺市　児島与呂志

日々好日妻だけ達者になれば良い
表では善意裏では知らんぷり
人は皆不幸の本質など知らぬ
平々凡々にも逆いたい時がフト出合う
戦争が近いと知らぬ花だより　美祢市　安平次弘道

退職金儲かる話聞きあきる
保護色を信じています平和主義
妥協して弱者に生きる知恵があり
そろばんを弾くと勇気消えてゆく
地獄への矢印ばかり目に入る　綾瀬市　大山と金

どの道を行っても人間界の枠
新嫁は福茶も知らず屠蘇知らず
学歴が退職金にも幅利かす
鍋物は翌一日の菜にのび
蒲公英のような女菫のような女　宝塚市　傍島静馬

十人並ではないが健康なのが取柄
宵寝朝寝気ままにくらす老夫婦

折込みで今夜のお菜ほぼ決まり
お人好しのおやじに家中同化する
昇給どころか希望退職あてにされ

松山市　谷　真風

巣造りの雀の藁へ春の風
中くらいと自称の腕に自信あり
痩せたのでかゆいところへ手がとどき
自販機より無愛想なが売ってくれ
雑草の元気が欲しい名はいらぬ

柳井市　弘津柳慶

棄権するもしゃくで共産党へ入れ
三尺さがるどころかバットで追いかける
孫しゅしょう武者人形へかしこまり
ホラホラと仏壇から不精にらまれる
庭パッと明るくなって桜咲き

笠岡市　松本忠三

騙された馬鹿さ加減をふりむかず
腕前は中途半端で趣味の幅
只だから良かっただけの評価です
辞めるのに勇退なんて馬鹿にすな
しんがりの鉢巻余所見して歩き

奈良市　森田カズエ

幸せな雨名園の苔へ降り
人間の酷さを雀かたり継ぐ
即席の愛を温くめて凡夫婦
脚本にない一日が楽しくて

ストレスをいっぱいつめて胃の下垂

八尾市　飯田悦郎

目に見えぬ苦労に燃えて片想い
財産はないが職場は持ちつづけ
返済の出来た男をくさすなり
解決が出来ず煙草を吸うて見る
人事課に決めてもろうた自分の値

諫早市　原田明春

妓冷たし金の切れ目を知った時
スローガン当選までの代名詞
土産にはもう欺されん世帯じみ
鉄骨になって母校の他人めき
親友も他人となる貸しと借り

下関市　国弘半休門

戦友を思えば不況も苦にされず
五つ児の入学五人の友選ぶ
へそくりを孫にとられた新学期
生活がママのパートで変化した
後手後手と「白」の守りにそつがない

大田市　藤田軒太朗

許すことに慣れて善人火の車
補助椅子で俺の人生終りそう
花曇り春闘の旗赤く垂れ
脱皮して己のが容姿に見惚れてる
気分屋の気分そろそろ腰砕け

宇部市　平田実男

パパママが一番はしゃぐ鯉のぼり
善人の嘘つく時は嘘の顔
賞状の半分以上は妻のもの
肩の荷が下りるところげるように老け
好きな子と並び腕白おとなしい

仙台市　川村映輝

選挙では頑張り議会で居ねむりし
停年を待って居たのは孫の守り
遠い耳聞こえて聞こえぬふりもする
勲四等佩用もせず箱の中
平和乱す平和運動の渦の中

平田市　久家代仕男

思い出は語らず朝の沈丁花
若布刈り此処から海は春となる
染まぬ日の失意に自我は許されよ
柿の芽が日増しに伸びて老母無口
蓬摘む柳の土手に詩がある

呉市　林野甦光

慰める言葉身近にいる打算
方角は風に任せたアプローチ
菜っ葉服の腕学歴差を縮め
奥の部屋に行くまで女考える
一輪の花ふるえてる或誤解

桜井市　河合茂雄

織りなせば糸は強いなと思う
よく噛んで聞いた話に騙される
勢いをつけると主流から外れ
ロボットよどうせお前も使い捨て
ひとりでは出せぬ力を出す集い

姫路市　大原葉香

洗濯機今日も過負荷の朝となり
何もかも許して今朝の海はなぐ
自転する地球に人間しがみつき
見当もつかぬ市があり日本地図
生真面目な過去一直線のまま残り

大東市　土岐トク子

ゆたかさが溢れ孫弾くセレナーデ
只今とパパもやっぱりママを聞き
産むよろこび得んか苦しみ耐える日々
スピーチはお手のものよと娘の気っぷ
散ることも知らで造花をいとおしみ

奈良県　村上春巳

散髪屋どうしようもない顔がくる
ライバルが急に黙った恐ろしさ
やりとりものどかな春の植木市
ウイークデー今を盛りと咲きほこり
通勤の桜へプラン組みかえる

羽咋市　三宅ろ亭

深入りをしない選挙で軽い肩
転落の一歩手前の記事あわれ
褒め詞たまに出すから効めあり
雲版に色紙を変えた日の気分

春の雨少しは濡れてみようかい　海南市　牛尾緑良

こんなにも虹がきれいな過去のこと
夫のもつ倫理へすこし馴染んで来
王将へ飛車は打ち死にしてみせる
虚栄心に心の隙を狙われる
副作用騒ぐほどでもない命　和泉市　西岡洛酔

カラオケに妻の本音を見つけたり
改札口待ったを掛けた機械の目
春駈ける足に新茶の息吹き聞く
夫婦坂引返すには険し過ぎ
山びこに託そか嬉しい嬉しい日　橿原市　岩井本蔭棒

北陸路雨の思い出ばかりなり
ワンバウンド捕手泳がせる始球式
暴力を見て見ぬ振りで来た自室
殺された側に恩赦はありません
輪回とやこんどは肩を叩かれる　貝塚市　行天千代

花の種あれもこれもと庭せまし
夢でした聞ける筈ない亡夫の声
誘われて散って行くのか夕ざくら
入園児母をはなれて列につく
ガス止めて聞けば投票たのみます　富田林市　中村優

目くばせで本音を嘘にすり替える
還暦がまだ青くさい長寿国
爆笑がさめてジーンとくるピエロ
激論が悲哀にかわる酒の罪
ハンガーのスーツが明日の戦抱く　松原市　北野久子

さんざめく中で私に音が無い
幼稚園帰ってからのよう喋り
伯母さんと逢うのは葬式ばかりなり
泣きながら古い母とはショックです
花吹雪丸い心にしてくれる　枚方市　栗林光夫

今日も減るわが人生の持時間
ネクタイに春を知らせてベスト脱ぐ
橘と桜床しく右左
アメリカの背中を見てる時でない
自衛隊大きくなったら何になる　河内長野市　井上喜酔

釣り宿の大きなホラを笑う海
ワンマンが急に優しい仏の眼
道草を止めて我が家の土産買う
星影のワルツへ女中も貰い泣き
何もかも途中左遷の置きみやげ　橋本市　森脇善太

第一に子供の顔が浮かんでる
続けたらよい日もあると雨蛙

長い日になったと肩がいってくる
決意した胸から鳩が舞いあがり
気持ちです気持ちで済まぬこともある

豊中市　田中正坊

妻淑子逝く

おむつした娘におむつされる妻
妻重態日が経ってほしほしくなし
病床で誕生日迎える妻あわれ
妻危篤十日目の朝白みゆく
時きざむ時計妻の生命刻む

浜田市　佐々木裕

長男に次男にからむ通夜の酒
念力わゆるみはかないデスマスク
固い字で戸籍係の十五年
メーデー歌耳に暮しの立ち話
妻の耳作り話も聞いて呉れ

尼崎市　奥山美智子

紫陽花のこころ変りに負けました
亡父の手を引いてやりたい通り抜け
夫留守の静かな朝がものたりず
人生は半ば苦労がまだ足らず
こいのぼり大きな夢を吸うている

大阪市　欄蘭

ひたむきな恋でつぼみのまま居よう
戻り寒お水取りのせいにする
年金の生活へ税金容赦なし
血圧計買って神経過敏なり

大阪市　中西兼治郎

幼な子の事故踏切りに建つ地ぞう
ホームラン川に飛込む河川敷
我が家には明治生まれがまだ二人
信心の老い石段を助け合い

島根県　大森孝華

跳ね返る言葉がほしい舌たらず
知恵借りに来たのが先にラッパ吹き
消え残る噂も日々の風が消し
いつしかに盆栽好む日が続き

町田市　竹内紫錆

青春のつづき六十路の文法書
タイムカード古希まで技を残す人
一芸が成って老妻名刺刷る
火葬場博覧強記を消すところ

香川県　岡田拳法

解放の国から亡命出る不思議
居眠りの方が許せる審議拒否
資質より地盤は遺産遺児候補
再就職みたいに労組から出馬

岡山市　川端柳子

たよりない男で妻を派手に見せ
ごくらくへの途もさこそと霧の中
知り合いの知り合いという絆です
月の使者しあわせうすい人を選る

悔ゆ勿れ草木育くむ雨なれば　唐津市　田口虹汀
四六時中男は標的の中にいる
お父さんご飯で起きる春の雨
花道がも一度欲しい化粧する　唐津市　木塚素石

球一つ十万の眼玉引いて飛ぶ
春うらら電話で遊ぶ四月馬鹿
病床に辞世もがなと老いの夜
待ち疲れ床の間の石相手にす　奈良県　宮川古都路

一しずく旅路の波は海の果て
同床異夢宇宙は広い星の数
団地妻鬼面の裏で訛り出る
夫婦坂淋しく一女嫁がせる　和歌山県　天満三千代

愛薄き老いに施設のある救い
姑の忌を告げる香りの蕗の薹
六十路ゆく翔びたいような角に来る
啖呵きる一人をおとす多数決　八尾市　山下みつる

投げ売りが激しく成って年度末
遊廓の話題をもった灸の跡
地すべりが起る土地でも売りに出す
太り過ぎお医者に腹をつままれる　神戸市　仲どんたく

生き残る造花の恥か春の塵
泣き声の海へ小児科溺れない
気にかかる夢を残して春に覚め
補聴器で昔の恋を語り合い　神戸市　山口美穂

三面記事今日も悲しいこと多く
花言葉花は語らぬままがよい
珈琲がとてもおいしい語らいよ
夕焼けも近づく闇もみな真実　高槻市　田崎素秋

故郷には瞼に生きる海がある
この土地を故郷と決めて墓地を買う
過去のこと話せば通じ合う夫婦
共に沈黙苺の赤を匙でつく　枚方市　稲葉星斗

春の陽にゲートボールの仲間入り
入学式たった一人のテレビジョン
送り出し迎えて嬉し花吹雪
夜ざくらの茶店情緒を知る素足　大阪市　鍛原千里

花便り心の隅をチクリ刺す
拝啓を書いたり消したり遠い人
ひとり寝の夜の恐さが分るまい
見栄でない夢だと言ったかすみ草　羽曳野市　佐野白水

同い年の訃報身近に死を感じ

ＯＢ会同期の一人の姿なし
妻の留守庖丁使わず三度食べ
北上の桜待てずに旅に出る

倉吉市　野中御前

病室をぐるぐる回る週刊誌
棒パンを抱いてよちよち母の先
約束の釘を女が深く打つ
宿の下駄男は仮面つけて出る

鳥取県　金川満春

意気投合訊けば彼女も一人旅
つながりが此所にもあった県議選
世の流れ二宮精神疎まれる
世の流れ老人クラブジャズダンス

和歌山市　堀端三男

昇っても星にはなれぬ煙です
味噌醤油貸し借りをして袋路地
裏表ないロボットに負けられぬ
勢いを止める一矢は俺が射る

岸和田市　狭間希久志

青天だ一駅歩く老夫婦
開城にゴキブリ一緒につけてやり
しぼむ花子供夫婦の愛に生き
きれいごと言ってる人が愚痴ってる

岡山県　荻野鮫虎狼

緊張へ柱時計の音確か
花だより老妻孫に教えられ
駐車料拝観料は京の顔
僕よりも口下手が居た祝賀会

東大阪市　奥山弥山人

思いやりいたわり合って夫婦坂
波音に流転輪廻の響きあり
電線の風が奏でる春の詩
わだかまり解けて互いの趣味にふれ

兵庫県　中田白李

貧しさを恥じてはいない金釦
通院へ息子の嫁に付き添われ
絆断つ鋏は持たぬ夫婦仲
肩書をはずせばやさしい父となる

交野市　山本テルミ

娘を訪ねてもエプロンの母であり
欲捨てた顔で出てくる寺参り
水取りの行事テレビでぬくう見る
日だまりで孫と童話をよむ平和

岸和田市　芳地狸村

とれとれの声が大きい魚市場
栄光と哀しみ秘める大手門
惚け役も真面目な顔で稽古する
枯れ枝を巧みに生かす老師匠

（前月分）　岡山県　直原七面山

愛情の深さを女身で計り
恋の娘が心を焦がす春の風
水を注しゃ注す程燃えて行く二人

自選集

見解の相違　法さえねじ曲げる
豊漁の鰯ただでも子が食わぬ
判決もくるくる変る風の中
流行をけなし侮蔑にはじかれる
サクラサクラ選挙が走るいらいらも

尼　緑之助

人はみな人ごとなりし齢に遇う
父と娘で迂濶に見てたメロドラマ
産声を待つ父安産祈る母
親子断絶ああ此の家も票は別
世界一の美男太子も首になる
沢庵になりたや禅に入りたや

大矢十郎

セレモニー乱す女の私語止まぬ
それでもおんな帰れば教育ママらしい
小賢しい正論ケジメが抜けている
企みの阿呆が黒衣を脱げという

山内静水

ローソクの明りで拝す如来様
会者定離火葬場の桜かな
桜の木が一本呑んでる唄ってる
ぼけなさったとか奥様がくれた笑
三つ指はつかせずつけず嫁った娘よ

野村太茂津

よーいどんのくりかえし人生夢がある
荷を軽く寄り道もする喜寿の坂
酒が入ると男はくせを見抜かれる

藤井明朗

人間の葛藤ひとの幸せ踏んでいく
流行のミニへ景気も動きだす

水粉千翁

春愁や人恋う刻を梅匂う
一と刻のずれ笑い合う桃さくら
孤に耐えるここよりほかに花の下
辞を低うして大きさを見飽かない
一日の背伸びへ星は降りそそぎ

金井文秋

妻逝く

妻が逝く解放感と空しさと
旅好きの妻よ今度は遠すぎる
金婚まで四年を待てず先に逝き
機嫌のよい遺影死んだが嘘のよう
願いは空し煙草まで断ったのに

市場没食子

九紫火星カニ座で易をみてもらい
死に急ぐことなし年金ある限り
好奇心を性教育が煽りたて
ダイヤ婚めざしボケたが歩を合せ
外商にチョコチョコベルで呼び出され
息切れるか医師も危ぶむ命あり
救急車三途の川へは行きかねる
絶句言うのを忘れ又生きかえし
意識さめて見舞の客の多いこと
死んだと信じて選者をかえるに猛運動

新岡回天子

満開の桜をくぐるお骨あげ
伊予柑をむいて昔の話する
ささやかなスリル年金株を買い
割烹着丸めて非常宣言
披露宴の余韻が残る足袋を干し

月原宵明

ほじくると出るからほじくる箱の隅
毛を毟り取られ裸にされた鶏
老害を与えてるかも知れぬぼく
蛍光灯の下で衝動買いをしたネクタイ
老妻のお礼参りについて行く

大坂形水

もの好きな鶴がはきだめに住みつき

本田恵二朗

長いから巻けると思ったのが誤算
指紋とるための乾杯だってある
不況風招いてしもたまねき猫
臍曲り同士奇妙にうまが合い

黒川紫香

箸紙におんなの唄が書いてある
下心あって夫の靴磨く
イミテーションの指輪をもろて情死する
地下街で寝てビフテキの夢を見る
窓際で新聞切り抜くだけの用

正本水客

桃かいな桜かいなと北の旅
木版画春に逆らう太い線
裾ふんで女おんなを隠さない
喪の席にセンスの悪い人といる
それとない言葉で妻に言うておく

若柳潮花

口喧嘩さえ疎ましいものになり
想い出をそっと畳んで寡婦で居る
鳥辺野の夜明けをゆする鐘を聞く
夕桜女少うし酔うている
おふくろの味から嫁の味になり

工藤甲吉

文明に疲れ裸足を恋しがり
臍の穴のぞけば亡母が笑み給う
女には勝っても乳と蜜に負け
妊婦服イザナギだけのせいにする
白い指ぐらいに男うっとりし

河村日満

評判はも一つ新大阪の貌
駅の名がなければただののっぽビル
いい句なら抜ける悟りをいまにして
早寝早起きの日課はホテルでも
壁を背に落着く僕の句座がある

橘高薫風

麻雀戯作

鞭声粛々国士無双のテンパイへ
リーチリーチの十字砲火をかいくぐり
トイメンへ煙草吹きかくリーチして
信長秀吉家康が今日の敵

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

西田　柳宏子

一合をとぐ掌に春が昨日今日
八木　千代

雑草が一番先に息吹く春
平田　実男

手に触れるものみな春の温みもち
堀江　正朗

いずれも早春の感触を実感として肌に感じとっている佳句と思います。そして春も盛りになってくると。

春ですね間違い電話多くなり
西川　景子

心もうきうきというところでしょうか。

戦友を歌い出したら止まらない
栗林　光夫

各地で戦友会なる集いがもたれ往時を偲び語り合っているが、だんだんメンバーも欠けてゆき、軍歌のもつ哀愁メロディーに万感をつのらせる気持がよく出ている。やがては

戦友会最後に俺だけ生き残り
傍島　静馬

ということになることでしょう。やがて

いわし雲忠霊塔が風化する
恒松　叮紅

国民の心の中に風化させてはならないと思います。

さて心打つ句の数々が目につきました。

想像の中にあなたを盗みます
稲葉　冬葉

盗まれる倖せな「あなた」を羨しいとも思います。

新たなる旅路と思う朝のお茶
堀江　芳子

日々新たなる心構え、幾多の苦難の道を切り拓いて来た作者にして始めて詠めた句と、身辺句の中にもこうした深みのある句が生れることを痛感しました。

仕事一筋を笑わぬ陽が昇る
那須　鎮彦

世間がどう言おうとも仕事一筋に打込めることは素晴しいことであり、太陽も明るく見守ってくれることでしょう。

磨き甲斐あるのは鍋の尻ですね
西森　花村

思わずウフッと笑いたくなる一句ですが、すごく風刺の効いた句と思います。

続いてもう一つ痛烈な一句

怒らせた猿に先祖の顔があり
岩本　雀踊子

今月の川柳塔欄の句の中で私の胸を強く打った句の一つ

スタントマン一歩無駄足踏んでおく
林野　甦光

危険な役に取組んで画面を盛上げる、或いはショーを盛り上げるスタントマン……一歩無駄足踏んでおくと詠んでいるが、その一歩は決して無駄足ではなく、その無駄足を踏むことが次のスリリングな場面に取組み、盛り上げる大事なものであることを強く訴えている。スタントマンの動に対して静の一句

千羽目の鶴折る指が疼き出す
西山　幸

に私は川柳がもつ魅力を今更のように思い知らされました。人間を詠み、人間を謳う川柳の素晴しさを誇らしいと思います。

千羽目の鶴を折り終える指の疼きには、悲喜交々の祈りと、希いが伺えます。

以上の他に次のような句が目を引きました。

和解出来そう土筆首を出す
岩田　美代

妻の喪があければ桜散っていた
吉岡　美房

父と子が入ると風呂が長くなる
西出　楓楽

建国祭うちだけ国旗出してあり
佐野　白水

埋れ火を燃やしてドラマを織る女
直原　七面山

信じ易く騙され易い仏棲む
神夏磯　道子

川柳太平記 (61)

川柳の群像

井上信子

東野大八

「川柳の為には一生を賭けても悔ゆるところを知らなかった剣花坊が、あのように卒然として死んでいった。それを思うと今でもわたしは自ずと胸迫って涙が落ちるのである。剣花坊がああして小さいながらも亦未完成ながらも川柳革新という一つの事業に精神を打ち込みそして闘った。血みどろになって闘い抜いた。（その蔭に私が一臂の力付けをしていたと考える人あらば、剣花坊に対して全然認識のない方と思う）

剣花坊は決して自分の妻や自分の息子達の力などに傍目も呉れる人ではなかった。自分の仕度い儘に振舞い、自分の行きたい所へ突き進んで行った。もっと激しい言葉でいえば自分の持つ思想感情を強く主張する為には、一種の暴君でさえあった。時に依っては私など、いっそ厄介な存在でさえあったかもしれない。

斯うして茲に整理を終えて改めて一句一句を見直すと生前にはさのみ感銘を与えなかったものにさえ、あらゆる角度から人生と社会をジッと見詰めていたであろう事が、今こそはっきりと私の胸に映じてきたのである」（井上信子編「井上剣花坊句集」〝序に代えて〟井上信子＝昭和10年5月29日記）

畏敬する夫剣花坊へのこれは信子の真摯そのものともいえる弔文である。この「井上剣花坊句集」は、昭和十年八月に発刊されたのであるが、昭和二年「大正川柳」を「川柳人」と改題し、剣花坊がその晩年期の川柳生活を燃焼した「川柳人」は、昭和十年七月号を以って剣花坊の死によって廃刊された。しかし柳樽寺を支えた同志の人々の要望によって、信子は自ら主宰する「蒼空」を発刊した。時に昭和十年十二月だったが、二年後終刊し、昭和十二年三月柳樽寺幹部同人大谷五花村等の要請により「川柳人」を復刊する。

しかし昭和十二年という年は、北京郊外の蘆溝橋事件をきっかけに、日中戦争は中国全土に拡大し、日中双方の民衆動員が熾烈に展開される時期に当っていた。すなわち軍部ファシズムは、銃後の民衆を「非常時」の名によって駆りたて、その国家総動員法に反意を示すものは峻厳な「非国民」の烙印を付し徹底的に弾劾した。

この最中に復刊したばかりの「川柳人」は鶴彬の有名な丸太の句などを掲載した。これを眼にした「三味線草」の森鶏牛子は、その柳誌の十一月号で〝叛逆詩を掲げた川柳人を排撃せよ〟と檄を飛ばした。この誌上告発を機に「川柳人」十二月号は発禁廃刊処分をうけ、鶴彬は特高の手によって獄死し、このあと京大俳句事件と称する俳壇への一大弾圧事件へと飛火する。（鶴彬については後述する）

信子は昭和十二年暮「川柳人」発刊の責任

者として拘留四日の憂き目に遭っているが、ともあれ「川柳人」は昭和23年8月復刊第一号(第二八三号)まで十年の冬眠期に入るのである。

井上信子は明治二年山口県萩市の生れ。

「信子が山口県赤十字看護婦を志願したのは明治二十七年日清戦争が始ったためで、女でも何かお国のためにお手伝いしたいという気持を抑えかねて家族の反対を押し切って志願したと「婦人朝日」(昭和26年3月号) の記者との対談で述べています。勤務した年限は確実にはきいておりませんが、剣花坊と結婚したのが明治32年はじめ頃で、剣花坊が信子の勤務先の病院長に求婚の応援を頼んだというエピソードも耳にしていますので、同三十一年頃まで勤めていたと推定できます。信子は後妻であり、剣花坊は最初の妻との間に男子三人をもうけ、第三子の出生の際、産褥熱で先妻を亡くしております。もともと剣花坊と信子は姻戚関係にあり、見るにみかねてという信子の同情もあったように推察できます。」(大石鶴子=剣花坊次女)

念の為に記録しておくと剣花坊夫妻には三男二女がある。長男麟次(明治26年生れ=麟二または葉吉の名で新興川柳派で活躍した)次男鳳吉(明治28年生れ)三男亀三(明治31年生れ)長女竜子(明治34年生れ)次女鶴子(明治40年生れ)

「私からみた剣花坊夫妻は、既によく知られているように一人は天衣無縫、感情を抑える術を知らず、怒りまたすぐ呵々大笑する人です。信子はその正反対で冷静、緻密、剣花坊の綻びを縫いつづけ、よくバランスをとっていました」(大石鶴子)

「忘れ難いのは、初めてお訪ねしたときの事だ。ぼくは鼻緒の切れかかった汚い下駄をはいていた。奥さんの信子女史が鰹節の釜飯をたいて御馳走してくれた。その味を忘れていない。又、帰ろうと思って下駄をはきかけたらペシャンコの泥下駄がきれいに拭かれて切れかけていた鼻緒までちゃんとすげかえられてあった。

その井上信子女史は今も健在らしい。らしいといっては御無沙汰の罪申しわけない。だが終戦後、高田保が〝ぶらりひょうたん〟の一文の中に、信子女史の近作一句を挙げて、これがなんと八十にちかい老女性の感覚であらうかと、賞めていたことがある。その句は

国境を知らぬ草の実こぼれ合い　信　子

というのであった」(吉川英治〝忘れ残りの記〟)

吉川英治が若き日の柳人雉子郎の頃、柳樽寺に出入りし、その際の肉親愛に飢えた彼の信子礼賛の記は、恩師剣花坊の思い出の記とともに数多い。

右にある高田保の〝ぶらりひょうたん〟は昭和26年頃東日に連載された評判読物で、彼は井上信子を、国境の句と

—何う坐り直してみてもわが姿　信　子

の句をとりあげ信子を烈婦と評している。

ともあれ信子は、愛と平和を祈念してやまない人間愛に徹した明治女の帯びたシンの強い、情感溢れた人間探求の実践者とみることができよう。鶴彬を守る会を作ったり、若く貧しく放埒な柳樽寺社中の若い連中を母親のように慈しんだ反面、時の権力にもひくとも動じなかった意志の強さは、剣花坊をして〝うちの女房は勲八等だからな〟とよく慨嘆させていた。(信子は日清・日露戦争に従軍勲八等宝冠章を受く) 川柳面でも三笠しづ子、吉田茂子らと柳樽寺婦人の会を作っている。

剣師追悼句

—一人去り二人去り仏と二人　信　子

は不朽の名作といわれている。

★次回は「**近藤飴ン坊**」

誹風柳多留廿六篇研究（十丁・十二丁）

★十一丁は欠丁

鈴木　黄・石田晋一・南　得二
小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・多田　光
故岡田　甫

176　**三年の古疵屏風かさぬ也**

鈴木＝山王祭・神田祭などで神輿が通過する道筋の店では、紫のまん幕を張り金屏風を立てる習慣になっていた。川柳の世界ではこの金屏風は多くは借物ということになっている。

そこで句意は、三年前に好意で高価な屏風を貸してやったが、何かのはずみでその屏風にきずをつけて了った。そんな事があるので借りに来てもその人には絶対に貸さない。

夏と秋利足のつかぬ金をかし　二六・30
とこのだへとハ失礼な金屏風　二六・13

南＝「三年の古疵」は、山王・神田祭は隔年交替であり、金屏風を借りた一昨年、そして昨年、そして今年が祭り年で足掛け三年となり、一昨年の借りた時に疵をつけたので、今年は貸して呉れなかったのである。

おととしの疵で断る金屏風　第一・22
屏風をつくろひさらい年ンハ貸サぬ　第二・17

多田＝賛。毎年では費用がかかりすぎるので一年置きにした。

岡田＝同。

177　**いひられに行が女のさかり也**

鈴木＝「いびる」は、いじめる、しいたげる。「嫁姑の中よきは勿怪の不思議」（毛吹草）。「嫁姑の中のよいと傾城の誠はないもの」（待婢気質）。「嫁と姑も七十五日」（俚言集覧）に表わされているように嫁と姑とは仲が悪く、常に嫁はいじめられる。そんな人間関係をよんだ句。

しうとばばいひりすごして孫をしょい　明六・天2
気に入れバ気に入ッたとて気ニいらず　四八・25

南＝「いびられに行く」は嫁入りの川柳的表現。嫁入りの前後が女の盛りということか。

八木＝賛。

末ながくいびる孟姑さし　拾一・35

多田＝南説賛。

岡田＝同。

十二丁

178　**ふみつけにした看板を足袋や出し**

石田晋＝足袋屋の看板は、木で足袋の形にしたもので、店先にぶらさげてある。本句、『川柳風俗志』に短注があり、「天窓の上にぶら下げられた足形の看板」と記す。足袋型の看板だから、不断踏んでいるものを看板にしているという意と、ないがしろにしている看板の意を掛けている。

南＝賛。看板の足袋が実際に人間の頭を踏みつける形になる。

本多＝賛。

足袋屋の看板手を下ヶて足を上ヶ　一一三・2

足袋屋の看板山の芋むいたやう　一五六・17

鈴木＝賛。

大そうな足をかた〳〵たびや出し　安五義2

多田＝賛。

岡田＝同。

179　**二十四にたってくんなとかのへ申**

石田晋＝丸十府氏『江戸の迷信と川柳』に、「男女交合を禁じるしるしとして、女は結んだ髪の元結いを上へあげておく。また洗い髪にして丈長（丈長奉書を二十四に切ったもの）で結ぶという風習もあったようである。また女はこの日、お歯黒をつけることを避ける習わしがあったようである」と記す。この説明で句解はたりると思うが、「二十四に截つ」が少々わかりにくい。

南＝『当世風俗通』に、「髪結紙截（タケナガタツテ）二十四片ン、安母折不（シラトリモ）レ為レ度シ嫁婦揚（ヨメモアゲテ）不レ為（セシト）レ狭云々」。二十四に截つのが姑は折って、嫁は揚げて丁度寸法がよく、

丈ヶ長をたつ時九九が用に立　桜18

おめへのハ二十四かへとかのへ申　傍二・32

二十四にたってくんなとあらひかみ　安四桜4

例句から見ても、二十四に截つのが普通のようです。

多田＝賛。

岡田＝同名の和紙の寸法の相違は、産地の差違によるのです。（越前屋の奉書は特に上質として有名でした）。日本古語大辞典のヨコ二尺四寸七分を二十四に截つのでしたら、七分を捨てれば一寸の細長い紙となり、截ちいいわけ。日本髪では、一寸ぐらいの丈長を根元に巻くのは、今でも桃割れなどで見られます。もちろん巻いた一寸の白紙は目立つ。これは交会禁忌の清浄の日をハッキリと示し、効果的だったと想像されます。

180　**月を仕廻て天道に見放され**

石田晋＝「月を仕廻う」は、『柳花通誌』に「九月十三日は後の月見とて、十五夜におなじけれど片月見をいみて、八月を仕舞し客は後の月も約束して仕廻して云へり」とある通り。

月を仕廻ィついでに出見せをしまい　二二・11

句意は、後の月の紋日までして大金を使い、まったく世間から見捨てられてしまった、というもの。

身ン上のかたむく迄の月を見る　一二・11

家やしきかたふく迄の月を見る　三四・27

また、月と天道（太陽）は縁語関係にある。

南＝「天道人を殺さず」の諺を踏まえた句ではありませんか。天の神は人を見捨てないというのに、見捨てられたとの意と思います。従って訓も「てんとう」となります。

本多＝賛。「天道」は南氏説と思う。

大屋＝賛。

二度目に八月も親仁もすごく成　二四・9

コリャだまれ月見ハ内てなせ出来ぬ　七九・12

南氏説妥当と思います。

多田＝南説賛。

岡田＝同。

黒川紫香選

浮かれ独楽回り終ると芸がない　岐阜市　市川鱗魚

自画像の自讃まずしくとも恥じず

耳かきで届く不埒な悪企み

薬包紙日にち薬の鶴を折る

つまずいた石をふり向く花の路　八尾市　高杉千歩

来る来ない遠く汽笛が闇に消え

神様にお礼を申すことばかり

することが五指に溢れて筆涸く

龍宮に馴れて泳げない私

パチンコ開店ジョギング組の顔揃う　西宮市　紀市郁栄

世間知らずが甘いはなしを持ってくる

少年の悩みを理解してあげる

逢いたくて風のたよりも見逃がさぬ

驚いたことに亡父の感謝状がある

花にも飽きて春を昂ぶるものがない　尼崎市　春城年代

グループのおしゃべりに遇うひとり旅

よくもまあしゃべった旅の余情ため

エンピツが好きで素直な句が生れ

三月の「お祝」ラッシュに音をあげる

喪の家の白木蓮が真っ盛り　長崎県　岩崎和子

ロボットがこなすハードなスケジュール

末っ子も巣立ち待ってた歯科眼科

定年の舞台名残りの雪が舞う

舞扇女ひとりの影法師

何時の間に握手していたホームラン　鳥取県　林荒介

鳶まうあしたの靴をみがいとこ

笹舟を流せばめぐる兄の河

棒もてば広場はみんな僕の陣

指切りを千万遍のブランコよ
約束をひきずる影も風の中　尼崎市　田中晴子

さりげなく影を落として道しるべ
毛抜きではとれない少女の青い棘
盛り場に忘れた訛りが落ちている
父の忌に昔の女の噂きく
なめくじに片手拝みで塩をふる　名古屋市　越村枯梢

逃げ足の早い男で子沢山
上弦の月は泣き虫かも知れず
俺と一緒に生きていたのか冬の蠅
絵馬三つあげて三つの願いごと
一つ二つ三つ目の嘘見抜かれる　尼崎市　西村かすみ

陶芸にこっていびつな物ばかり
砂時計だけが知ってるラブコール
札の束愛をみにくいものにする
飽食の今日もゆがんだ月と寝る
主義主張持たず女を愛し抜く　尼崎市　角野かず子

いつまでも割れぬ風船憎くなる
レインシューズ履けば寄りたい庭がある
救急箱錆びた毛抜きがひとつある
貸した方だけが忘れて揉めている
クエッションマークゆっくり書いて日記閉ず　松原市　本多洋子

一生の願いが何時もある娘
話好きに呼びとめられた日暮時
ガイドには無い道を行く一人旅
ぬかるみのそこここにある花の彩
母の川の流れに添うて行く私　西条市　片上明水

制服を着ると漫画の父になる
抽出しの上から順に好きなもの
弱い者ばかりへ鬼の手がのびる
花時計別れた筈のひとを待つ
干し物に当って止まる路地の風　熊本市　高野宵草

連れて来た六分の嫁に折れとこう
ちいさいが満開桜ここにあり
本物でないのに掛軸ほめちぎり
割箸になじむ単身赴任の地
頼みこむときの笑顔にだまされる　尼崎市　伊藤春子

今日は帰る足音を待つ夜の風
親指と小指で無言の会話する
出世した友の視線が外れていた
少しピンボケかけがえのない古写真　尼崎市　丹下玉子

池涸れてぬしの河童の皿かわく
目玉の松ちゃん知ってるファンの数わずか

透析をすませた嫁と紅茶飲む
強い強い嫁との絆今更に
寝屋川市　平松かすみ

咲く頃に貴方と来たい通り抜け
本当の齢が書いてる死亡欄
娘から気安く貰う流行風邪
一直線みごとに画いた飛行雲
西宮市　奥田みつ子

藍から紫ガスの炎にある美学
胃の検査夫に付合い朝餉抜く
婿殿の大学だけを聞くお客
乗客のひとり視野からはなれない
尼崎市　関口幸子

うっかりと今度の火曜何曜日
サザエさん地でやってますあわて者
手相見が人の足元ばかり見る
下手くそな唄に桜も草臥れる
高槻市　竹内花代子

男手をうっかり借りて噂され
夢を見た日のある日記くって見る
夕桜天守閣まで灯がはいる
煙草吸う女の顔に負けました
西宮市　藤村宏子

スープ皿のすくえぬ底にある念い
宿題へ親父の根気試される
部屋の空気くんで下座へ小さくなり
コンサートの余韻夜桜かなでてる
今治市　矢野佳雲

脇役のせりふのほうに味があり
爪立ちで探す古本屋のポルノ
真中に寝させこの子は誰似だろ
捨てて来た郷里を詩人は巧くよみ
富山市　舟渡杏花

逆立ちで覗くこの世が好きになり
刀自と呼ばれる名門の艶失せず
地球儀で一日一回世界たび
補聴器のキャッチ遅れる世迷いごと
西宮市　材木光子

軽口も出て退院も近くなり
退職をしてから妻にさからわず
エリートの我が子が遠い人になり
あの人も定年らしい夫婦連れ
和歌山市　中尾まゆみ

高校入学

花いちもんめ道それぞれに高校生
宿題へルンルン気分になりきれず
持ち物がひとつ増えたの定期券
花言葉のひとつに望みかけてみる
鳥取県　中原諷人

障害の壁を十指で和ませる
振り向けば壁画も鍬を高く振り
花いちもんめ塾を忘れる花の下

ウェディングマーチ鳴って貴女も父を持つ
東予市　小山悠泉

生きて行く糧騒音と勝負する
逢いに行く靴とは知らず妻磨く
着飾って心に飾るものがない
幸せへとかく他人の色眼鏡
大阪市　萩谷まさ

春疾風乙女の裾を撫でていく
陽炎の中に踊るよ人と花
若者に揉まれて歩く春の宵
青春を二重に写す甲子園
島根県　松本はるみ

この頃の綿菓子にノスタルジアはない
籐椅子をぎしぎしならし棘を抜く
海の雨地球も消えてゆくごとし
素っ裸さらしたような布団干す
京都市　松川芳子

意地張ったまんまで朝のぎこちなさ
衣食住足りた暮しに欠伸する
猫に小判賽銭箱の上に猫
カレンダー無印の日は雨も好し
藤井寺市　赤木和子

絵心がその一角で立ち止まる
営業上のスマイルでしたとグッドバイ
意地悪ができず未完の女なり
追いつめられれば私にもある殺意
寝屋川市　岸野あやめ

枯れ溝のこれが古城の趾とかや
郷愁を大福餅で埋める夜
甜めまわす様に育てた子が背き
泣く用意して弔問の客となる
名古屋市　藤井高子

白い足袋ことさら白く履くいくさ
むれ雀一羽が翔べばその噂
ティースプーンまわして恋の序奏聴く
再雇用独楽は必死に舞っている
富田林市　藤田泰子

大根の花がお好きな紋白蝶
毛虫さえ笑いの種の花見酒
飼主と同じ訛の九官鳥
背伸びして摘まれてしまう土筆ン坊
宝塚市　丸山よし津

首都圏へ向う列車の初背広
武者人形選び贈って祖母となる
お互いに見て見ぬふりの同じ服
肩ゆすり若者足の長いこと
枚方市　二宮山久

投票の重みを知って見る新聞
ふる里がこんなに近い日本地図
表紙から抜け出しそうな美人です
酔いました妻もほんのり桜色
大阪市　藤森小雅子

すれ違う風が五月の彩にする
ポストまで軽い口笛ふいて行く
コンパクト仄かに淡いひとを待つ
老いらくの恋奇抜な彩をきる

鳥取県　森山盛桜

執念は輪ゴムを武器にする男
迷いまだ今朝の一輪活け切れず
背の壁を信じて痩せた身を寄せる
舌先が愛に報いる語を知らず

豊中市　満仲きく子

春らんまんわたし言うことありまへん
嫁いびりもうなくなったと娘の笑顔
沈丁花のかげにしましたかくれんぼ
墓参り亡母さんさくら咲きました

米子市　沢田千春

首かしげそれぞれ語る藪椿
無人駅手まりが一つ誰を待つ
鼻唄は何かいいことあったかな
海老で鯛つって良心落着かず

熊本県　大川幸子

ターゲットはずせばゆるむ自己規制
心にもない事舌がしゃべり出す
かっこよく生きねばならぬ時もある
震度三ぐらいは揺れる路工事

竹原市　岩本笑子

真横から見ればこの子にも長所
詫び入ればケルンがくずれゆくのなり
ミニ流行るそうな足を撫でながら
妻として心のスキを化粧する

弘前市　田中叶

春の異動縁なく風邪の薬飲む
肩書きがことあれば言う苦労話
ようやくに寝た子夫婦のお茶うまし
共稼ぎ男が起きて湯をわかし

鳥取県　羽津川公乃

父と子の回転木馬詩がある
制服に個性を消した顔がのり
ダイレクトメールに商魂つめこまれ
終着駅に今日も郵便届かない

伊丹市　樫谷郁子

妍競う隅にひっそり己が作
航跡もかもめも白い連絡船
あきらめと愚痴で日向の老夫婦

今治市　渡辺南奉

日曜の桜を待って春の雨
出張の宿で気づいた誕生日
花は嘘つかぬ春には春の花

尼崎市　矢萩貞子

木次川柳大会に参加して

まだ蕾陽はサンサンと土手桜（木次）
立久恵の五百羅漢は川を見る（立久恵峡）
そばの味舌にきかせて大社前（出雲大社）

ベッドから今日のメニューを聞く笑顔　熊本市　北川一進

鉢植の指導は妻の得意な日

良い話だから通知は皆に出し　兵庫県　奥野テル

羽衣の様な金魚を見てあかず

切り札を抱いて疑い深くいる

桜餅ナイロンの葉の味気なさ　藤井寺市　前山とみえ

雨上がり手がとどきそに迫る山

河馬のようなお尻で席にわり込まれ

連休に雨のプランは立ててない　水戸市　上鈴木春枝

はがきの字少し大きくなった老母

医学書に並ぶ病名知らぬ幸

里帰り父母にゆったり茶をいれる　岡山県　土居耕花

帽子掛け父のは土が付いている

長男の嫁が何処かに春の旅

母の忌の母の匂いに豆煮える　松原市　佐藤藤子

合格の電話身内を駆け抜ける

子を叱りそれからのどが渇いてき

地下街でだんだんロボットめいてくる　尼崎市　佐藤美代子

男子アナ毎日服が変ってる

キャンピングカーかたつむりは何んという

巨大な廃きょに王者のロマンをたずね　羽曳野市　麻野幽玄

病院の廊下病人らしく歩き

鳩ポッポ近づくだけを逃げるなり

軒に来る雀へパンの焼くこおい　尼崎市　吉永伊三郎

七人の敵より怖い一歩先き

独り者が目刺しを二匹焼いている

妻のいう通りに傘を持って出る　尼崎市　山田保歳

犯人にしては涙が多すぎる

炬燵から首だけ出してボク留守番

唇のうすい老婆はよく喋る　鳥取市　若林一止

蟻なりのプライド外見しない列

独身寮高砂ヤーで追い出され

消防車帰途間の抜けた鐘鳴らし　大阪市　津山刀水

ぜいたくな汗を覚えているタオル

東大より母は素直な子が欲しい

くやしさに雑魚はいっぱいはねてみせ　寝屋川市　堀江光子

結局は子供の話だけになり

売上げをきっちり合わせ箸をとる

断ればセールス表締めずゆく

無人駅朱印の顔にまた出会い　西宮市　津山冬子

指きりの約束赤くカレンダーに
また余生夢をぬくめて花の種　熊本市　有働芳仙

姑が嫁と付合う本を読み
断崖に立つと手招きしてる海
補聴器へ聞いてはならぬ声が入り　八尾市　宮崎シマ子

引っ越して行って病気という噂
掃除半ばで電話の客が来てしまい
裏口からそっと持ってく小さい義理　鳥取市　野沢大漁

後妻まだ決めず釦は落ちたまま
天候を気にして登る山がない
適マーク信じ斛が高くなる　鳥取県　石谷忠良

六法の裏から小物あやつられ
空罐をけると空しさだけで鳴り
銃眼で覗けばきれいな核の色　芦屋市　上田佳秋

鮨喰いに行こう二人のうちあなた
大三元老いの俺にもまだつきが
保育園外車で送る芦屋ママ　和歌山県　寺田裕美

約束がちがう奥歯がかみ合わぬ
独りでは帯の長さをもてあます
筍の匂い転る朝の土間　高知市　北川竹萌

旬の味思い出させる独活の彩
逢う度に同じ話を聞かされる
台本を書いて明日の夢を追う　和歌山市　福井桂子

少しだけ地味なセーターペアで撰り
陸続きの恐さ知らない島の春
風に靡く葦には所詮なりきれず　山口県　高崎雀声

温室で無理に咲かさる四季の花
風呂かげん聞き合っている老夫婦
耕耘機仕事をしてきて庭の隅　守口市　結城君子

書く事が好きでと女史は高ぶらず
招かざる客が一番よくしゃべり
靴音の聞こえる迄の長電話　守口市　森川まさお

宴会に馴染めず汁の実は底に
旅に出てもやはり時間にせかされる
フルーツに小石がまじるおかしさよ　富田林市　田形美緒

場違いな客と鏡が教えてる
磯の香が駆け上ってくる島の宿
雑草を抜く一片の良心が

ふとん袋下宿の匂い持ち帰る　兵庫県　森脇和子

亡き夫の影だぶらせて一人旅

毒舌が素直に聞ける春の風　大阪市　北山悟郎

軍拡に俺の肩書消えて居る

赤字にする娘の貌が又現れる

本論は決まって居るのに時間かけ　泉南市　坂根流水

桜より派手な花見の人の群れ

病室のなかより今朝も観音経

投票日知人の喪をきく公民館　高石市　浅野房子

芝居見る心のゆとり髪を結う

追憶が渚をかける早春譜

傷つけた言葉こちらも傷がつき　青森県　荒田つる

風采のあがらぬ平で夫婦無事

団体を吐き出しバスもひと休み

居眠りをしながら法話も聞いてくる　鳥取県　和井観洋

宿の下駄はいて戦は考えぬ

回り道していた靴を叱らない

節穴を覗いて心晴れますか　唐津市　浜本ちよ

麦踏みの列にはずれた甘えっ子

妹が帰り片付け苦にならず

姑ありし頃は手作りよもぎ餅　寝屋川市　立床晴風

理解なき心は赤にもう染まり

鏡から小言を貰う化粧ずれ

正直を自負して揺れるヤジロベー　益田市　里本たかし

薬だけ貰って寄付へ駈け回る

化粧終えて坐った妻が喋り出す

フルムーンで柳誌を一緒に開く夢　大阪市　権安達一郎

菜の花を目印に道教えられ

山門の坂見上ぐれば花ざかり

パミールを越えて来たらし秘宝石　大阪市　塩田新一郎

病弱の妻の手白き花明り

蘗(ひこばえ)をさけて山路の腰おろし

春風はそよそよブランコぶーらぶら　藤井寺市　前山美恵子

連休をどこで過ごそか伝書鳩

鯉のぼり泳ぎ疲れて立ち泳ぎ

六月の花嫁紫陽花みたいです　出雲市　河原恵美子

もつれ糸いまだ解けぬに春になり

誰一人ゆずらぬままに夜もしらみ

表から裏からチラチラ下心

大阪に坂は残れど橋は減り　大阪市　山本炉斉

上町の転んだ坂に青春譜

雨上り蘇生の勢い沈丁花　竹原市　佐藤令子

子を抱いて小川の小石見詰めてる

弁当にたっぷり詰めた母の私語

天国へゆくミミズが地にころげ　大阪市　小野風童

惜しい枝手折って恋の花にする

恋をする為に生れたさくら貝

惜しまれて別れの花に包まれる（友が逝く）　大阪市　稲本凡子

自転車が好きで乗ってる訳でなし

嫌な事聞いた日は電話かけまくる

孫入院中

秒針がすりへる如く刻む音　守口市　岸野キミ

狭い庭朝から雀がしゃべり出し

母のひざぬくめてやわいおふとんだ（小三孫）

風船が風にとばされにげて行く（小二孫）　西宮市　朝山千世子

桜前線余生に虹をかけにくる

花だより良縁運ぶ春の風

ジョギングの目標通りは無理と知る　鳴門市　八木芳水

貧乏は馴れていますと妻凄み

貧しさに嘘と知ってもついて行く

愛し合う二人で仲人世話やけず　吹田市　西岡豊

卒論も採用もGO春うらら

紅一点千代という名が人気呼ぶ

酌ぎにきた女に酌いで独り占め　諫早市　江副二牛

カタカナの便りに老母の無事な顔

祖父三代血は争えぬ祭り好き

どんじりで出ても母校の寄付頭　米子市　大田みさと

マヒの子と約束交わす頬と頬

おあずけの餌で愛犬特訓中

手の跡に亡児の想い出を残す壁　新潟県　高野不二

サラ金へ抵抗心中しかなきか

ヌードならも一度みたいコマーシャル

親馬鹿というのは他人の時に言う　吹田市　井上照子

荒む世へ曲らず巣立て鳥の雛

思い出の人に似ていた後肩

ゼロの数たしかめて買うネックレス　八尾市　葛幸子

はねっこは思いもよらずはじらいて

一杯をついでもらった冷やの味

坂の上下で見るとは大違い　島根県　藤原鈴江

裏切りに馴れて淋しい薄笑い
あきらめという手もあり急ぐまい
口ずさむ軍歌悲しきもののうち　岡山市　原田凡太郎

聴かぬふりしてまで女聴きたがり
折れるすべ知らぬ女が砂漠行く
あのひとのどこがよいのとつねられる　兵庫県　円増貞子

はきなれぬ靴に試練の日がつづく
入れてある切手に済まぬ筆不精
守りぬく老舗に強い風当り　大和高田市　岸本豊平次

のぼる蔓棹の長さを信じてる
お隣はまめな主人の日曜日
ペンだこは金釘流の手にも出来　島根県　東原福子

辻に座し久遠の光り大師さま（弘法祭）
日曜を家で閑かに花の雨
さかずきに散る花うけて春惜しむ　高知県　山下登舟

軍備論まさかの時も考える
きざまれて何時もわき役茗荷の子
行きずりの遍路目礼して通る　高知県　山崎広風

投票日までの笑顔に握手され
財布には少し余裕の旅鞄
現職の弱気励ます会が要り　米子市　宮本佳女男

百歳に照準当てている余生
孫の守り重労働と知った古稀
敗戦に襤褸着て帰るパイオニア　鳥取県　福田あや子

短冊に恋の悩みで散る桜
糸桜地蔵が縋る雨宿り　大阪市　板東倫子

幸せは孫と見付けたつくしんぼ
責任を転嫁するのが処世術　和歌山県　福井正一

退職の年金ねらう銀行屋
卍浮く女人高野へバスのぼる　高槻市　芦田静江

知事公舎桜見る目が慣れている
カラタチが平和讃えた石の垣（元工兵隊の生垣）　姫路市　人見翠記

見送りの園児の親はよくしゃべり
うつむいて落ちた椿の水たまり（前月分）　今治市　新居田胡頽子

山頭火こころに点しひとり旅
春闘へ春一番が活を入れ　今治市　新居田胡頽子

けつまずく石が猪突を戒める
耐え抜いた彩が眩しい麦の青　八尾市　椎尾公子

名優と一字違いの幟立ち
ゆで卵はずむ心でうまくむけ　大阪市　野田君枝

花だより暗い話の中で咲く
山門の眺めも春の南禅寺　羽曳野市　田中隆二

縄のれん出て来る時は友を連れ
肩書がとれて胃薬ひまになり　大阪市　堀口欣一

途中下車春が来ている湖西線
春の夜の火事を眺める２ＤＫ　大阪市　朝倉利義

妻病んでいるのに酒の量が増し
ここからの坂に夫婦の歩が揃い　鳥取県　灘尾民子

ひとり旅亡夫の追憶たどる宿
沢庵の短冊も出る花見酒　高知県　小沢幸泉

終列車こくりこくりの待合所
踊おどって飲んで満開の下　鳥取市　武田帆雀

新人事机が一つ寄っただけ
今月の敵を見上げる棒グラフ　青森県　波　ただお

栄転を寿司屋の夫婦に祝いされ（息子の転任）
何ヵ月ぶり家の囲りの草むしる　愛知県　国分甲子郎

霧のぼる宿の手摺りに湯の疲れ
船盛りに箸も迷わす活づくり　兵庫県　脇田米朝

輪の中にとぼけもあって座が和み
片隅で千両万両の花が咲き　八尾市　松下蕉露

野心家が街で手相を見て貰う
葬式は生きてる人のためにゆく　大阪市　山田松太朗

何もかも言えば許すはその場だけ
坂道の店で一輪挿しを買う　島根県　堀江百代

だしぬけに聞かれ本音で返事する
四月馬鹿あっさり孫にだまされる　岡山県　石黒若恵

母の帯母の本心知って居る
山よし海よし音痴も歌う春日射し　大阪市　山脇正之

久し振り保険ですます歯の治療
植えるとこ無いと知りつつ花の苗　指宿市　渡辺伊津志

偽善者は断食をした顔になり

良く似合う着物はキュッキュッキュッと鳴る
吹田市　栗谷春子

筍は文句も言わず土も買い
ストと雨の隙間を駈ける春の旅
島根県　北川民子

ぼたん雪に脅されながら蕗のとう
癒えた身へ紅さす喜び水ぬるむ
熊本市　宇野昭代

下宿屋によろしく頼んで母帰り
人が皆言うから過ぎた夫だろ
境港市　細木歳栄

信頼と信頼言葉などいらぬ
便箋の白さが怖いペンである
弘前市　真喜内實

ぽかぽかと暖かくなる君と居る
土筆より愛を摘んでる二人です
河内長野市　糸谷春草

ベランダで季節の花が咲く暮し
ハネムーン予定を変える春嵐
和歌山県　山田久子

相づちのうてぬ話に距離をおく
戦いを終えて反省しきりなる
守口市　長谷川司

チョコレートパフェを飾る桜んぼ
本四架橋遍路の足が近くなる
大和郡山市　岡田すみれ

春の野を歩けば何時か歌が出る
石仏は苦を忘れさす面影で
豊中市　小林一夫

達筆のどこか余裕のある手紙
冗談も言えぬ男でママと言う
豊中市　森田俊昭

カンバスに未練を残す筆不精
別離生むお酒の少し熱いこと
東京都　堀川恵美子

ジャガイモの白い畑に我れひとり
コンクリートにつめたく響くさようなら
泉佐野市　真崎浪速子

同窓会へ師弟の顔を使い分け
白球が春を運んだ甲子園
大阪市　大塚節子

春一番さっと空気を連れてのき
それぞれの石碑(いしぶみ)歴史しょっている
大阪市　吐田公一

憧れの的も射止めばただの妻
標的を捨て左遷地になじむ日々
大東市　田中ヒデ子

アドバルーンとなりの店より高く揚げ
陽炎はビルの屋根にも燃えていた
泉佐野市　大工静子

門潜るだけで誇りと受験の子（孫の受験）
春日和老いの手提も口ずさむ

入学式横顔チョッピリ中学生　竹原市　石原淑子

お茶の間がカープカープと活気づく　岡山県　池田半仙

孫達の入学祝い三つあり　大阪市　服部頼一

鉄骨の月来年はもう見えぬ

ウインドーの春着おしゃれの足を止め

アルバムに慰められる日の孤独　大阪市　平井露芳

十円で親の声聞く距離に住み

仕合せを運ぶ最初の梅一輪　千葉県　中村有人

此の橋を渡ると過去の人となる

余りにも素直な子供怖ろしい　橿原市　西本保夫

割り切れば何の事ないもう定年

不満先に捨てて来ましたもう定年　大阪市　野村八重

標的を射止めて今日の晴れ姿

此の坂を下った所と教えられ　和歌山県　中屋好夫

転た寝の老母へテレビの一人言

一言が引っ掛かっただけの反旗　大阪市　今西静子

矢車がカラカラここに男の子

広島の高層ビルが目をうばう　岡山県　藤瀬比沙子

茶目っけで家中湧かすいい嫁女

手話夫婦通じる秘密ユーモラス　大阪市　松本ただし

厳粛な式に私服の咳払い

紙障子の外はアルミサッシなり　八戸市　島田昭治

爪が延び老婦長に叱られる

演説はどれを聞いても頼母しい　島根県　大浦ふみ

今日もまた荒れる世相の事故多発

選挙カー鉢合わせするさくら土手　東大阪市　坂本乨洸

人生の坂道妻は杖となる

あの人は売名の為立候補　東大阪市　三宅旭

使い捨て時代で上昇離婚率

朝一番春夏秋冬にお味噌汁　藤井寺市　楠昭子

せっかちな夫は明日をもうめくり

ホームラン神風少し吹いたかも　豊中市　和田雄二郎

流星雨みんなの願いききましょう

好きな娘の好きなものはみんな好き

双眼鏡

西尾　栞

去る四月二十一日午後、中島生々庵名誉会長を西宮の香雪病院へお見舞に伺った。

病院は阪急夙川よりタクシーで約二十分余の所の山腹にあって、ちょうど山つつじがユニークな紫の色で夢のように咲きほこっていた。あとで小石夫人をお見舞をした時の話では、会長は双眼鏡を持ってこいと命じて、窓より、その色彩を楽しんでいられると話された。私はそれを聞いて、屋上まで上って、車椅子の上から東郷元帥よろしく、東に西に南に北にと車を廻して、晩春のひとときを楽しんでいられる姿を想像した。そして北東の山を眺めて、一つ越したその麓に、傍島静馬さんの宝塚のコーポラスを思い浮べて何かと独りごとを言っていられることも想像した。

さて、病状はお見受したところでは、全然入院患者という様子はなく、やや右の手足がご不自由で、保養とリハビリという程度で、医者という職業上大切をとっていられるのと、小石夫人が関西病院へご入院のため家へ帰っても看護してくれる者がないから、致し方なく入院しているという具合であった。

七階に立派な食堂があるらしく、会長は昼食と夕食は車椅子で行って、許されたビールを一本たのしんで、フォークとナイフを使って、手や腕のリハビリ兼おいしい食事をするのが、せめてもの慰めであると話された。

主治医は事務的に規則的に「如何ですか？」と訊ねて来られるだけで、そして、病院に勤めておられる医師の方々は皆、阪大の後輩だから、寧ろ先生から、ああだこうだと指導される御様子で、健康人と少しも変りなく、ただ老人の甘えがあるらしく、小石夫人が傍らに居られない淋しさがありありとわかった。

お見舞には駅より往復タクシーを使うより他に手はなく、時間と費用がかかるのが障害であるから、ハガキで面白い近況何いでもしてあげる（長い手紙は読む意欲がないらしい話）のが一番だと思うので、筆まめな方のハガキ見舞をお願いする。

「ご無沙汰していますが、皆さんにくれぐれもよろしく伝えて下さい」とのことでしたので、声を大きくしてお伝え致しますから、会長のお心をお汲みとり下さい。

帰る時、地下鉄で淀屋橋に出て、京阪で滝井で下車して、徒歩七分の関西病院の三階の小石夫人をお見舞した。大手術のあととは思えぬ顔艶で、ベッドに座っていられる夫人は六十歳前の容姿で、約一時間有余、手術の顛末を詳細に亘って話されて、お元気なところを確認した。そしてお見舞にもらわれた花の写生の色紙を見せてもらって、病人の描く絵は暗い感じであることを色々と講義された精神力には驚いた。

お二人とも非常にお元気なことを確認して一月以来の一つの宿題を果した安堵感で、今ペンをもっている。

今、お一人気になるのは、小松園さんである。つい近いからお見舞しやすいのだが、御無沙汰がちで申し訳ない。去る三月の或る日、岳人君と堺の労災病院の整形外科の病棟へお見舞に行った。現状維持の状態とお見受けしたが、非常に朗らかなのには救われた。気の毒にヘルペスをその上に患われて、一時は手袋をしておられたそうだが、今では手をぎらわす、初めて見る玩具が枕元に置いてあった。岳人君はそれをもてあそびながら、

「小松園先生！　寝ておられると、時間があるから作句されて雑誌へ発表して下さいよ。寝ておられるとよく出来るでしょうに」と話しかけると、暫く考えていた小松園さんはニッと笑って、

「寝ていて作られるのは、子供だけや」と言うたので、三人は大いに笑ったが、傍の奥さんは「又、そんな阿呆なことを言うて」とたしなめておられたが、ジョークの多い昔の小松園さんを思い出した。

あと、気になるのは、好郎さんと静馬さんのお二人だが、噂では大変よくなられたとのことをきいているので愁眉を開いているが、何時の日かお見舞をせねばと思っている。

どうぞ一日も早く、皆さんの御快癒の程を祈る次第である。

つくづくと先ず健康の四文字かな　栞

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自　昭和58年1月号
至　昭和58年4月号

路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

又つねり上戸が隣へ来て座る　柳楽　鶴丸
（原句　又ツネリ上戸が隣へ来て座る）
お母さんを舌い古いで片付ける　柳原　静香
一流でないから皆んな寄ってくる　妹尾　春江
思考ゼロ雪しんしんと降りつみぬ　高杉　鬼遊
フィーリングが合わないからしめんたいこ　谷垣　史好
コーヒーがふたつとても夫婦が若くなる　岩田　美代
或る日フト呼ばれて起きぬような死を　河原みのる
人くさい神が踊っている神話　香川　酔々
活けたなら絵になりそうな冬木立　松川　杜的
冷たさをこよなく愛す冬の天　錦織　文子
あぐらから正座に客の帰るらし　中西兼治郎
明日もまた同じ速さの置時計　清水　健司
髪切ってわけは何もないと言う　村上田鶴子
ひらいてる門は堂々と見える　那須　鎮彦
大物と小物うたた寝でもわかり　舟木与根一

黒川紫香

秒針はいじわる側にいたいのに　松原　寿子
蚊とんぼよお前もきっと病気がち　谷垣　史好
嫁ぐ娘に喧嘩の仕方教えとく　安藤寿美子
雑巾がかわいて妻は旅の中　杉浦婦美子
下駄の音からころ妻はいそがしい　堀江　正朗
いつとはなく目あてを決めたかたつむり　八木　千代
意地張ったぶんだけきつい風になる　津守　柳伸
こはぜにもあった女の嫉妬心　鍛原　千里
妻といて言うこともなし冬の天　白岩　文衛
真心を誰に上げよか寒椿　内芝登志代
風向きで変わるプランを持て余す　青戸　田鶴
追慕しきり紙人形の白い顔　西川　景子
髪切ってわけは何もないと言う　村上田鶴子
きれいな海返せと蟹のひとりごと　田中　亜弥
我が家の怪獣炬燵でフテ寝する　柳楽　鶴丸

若柳潮花

育ち良い貝は素直に砂を吐く　林　瑞枝
青春の夢を化石にして尼僧　飯田　悦郎
酒たばこやめて女にぶらさがり　天正　千楠
煮こごりに女ひとりの遅い昼　高杉　鬼遊
片づかぬわけの一つに長電話　中村ゆきを
野良犬へエリート意識持つ首輪　仲どんたく
秒針が余命を刻む円を描く　太田　亀甲
すこやかな眠りへ酒が脈を打つ　堀江　正朗

職人が鉋を研いだ雨の午後　清水　健司
広すぎる本屋に腹が立たないか　谷垣　史好
褒め言葉よりも眠りを下さいな　西出　楓楽
旅仕度小さな嘘を子に残す　八木　千代
土に還る命を深く深く埋め　遠山　可住
日めくりの一枚からは逃げられぬ　小出　智子
墨の香に一時心をとのえる　と　松川　杜的

野村　太茂津

仲間意識一人のユダが突き出せぬ　川口　弘生
貴方には過ぎた女房という女難　岩本雀踊子
嫁ぐ娘に喧嘩の仕方教えとく　安藤寿美子
嫁からのカイロは妙に温かい　若宮　武雄
貧しさを隠す笑顔がだるくなる　西山　幸
勝たせとく父で眠ってばかりいる　山本規不風
一度だけ妻にお礼は言うつもり　山根いつを
殿で先越すことを考える　河合　茂雄
吾とわが臍の形を見て飽かず　谷垣　史好
気くばりの温さ知ってるから帰る　冨山　光代
訃を聞いてからでは遅い褒め言葉　小西　雄々
答などいらぬ楽しく跳んでいる　天正　千梢
口惜しいが仕事の話題しかもてず　大野　武太
どたんばを冴えたジョークに救われる　浦野　和子
逃げて見るそんな演技の愛もある　川崎　秋女

橘高　薫風

定年へドッとお金にならぬ役　遠山　可住
欠伸して何を言いたいのか忘れ　山本規不風
患者さん待たせておいて句の話　原　さよ子
女教師は何時も腕ぐみして叱り　中村ゆきを
金持ちは喧嘩はせぬが告訴する　中川　幸一
隠し芸派手に左遷とは見せず　小林由多香
一度だけ妻にお礼は言うつもり　山根いつを
ボーナスは遠来の客の如し　橋元　美恵
お雛様すこし冒険しませんか　西山　幸
月光の青さを知った謀叛の夜　仁部　四郎
四十年ですねと妻が屠蘇を酌ぐ　樫谷　寿馬
エリートがコーヒーを飲む冷たい眼　飯田　悦郎
日曜を妻のお抱え運転手　植山　武助
日本のネギ畠ですゴッホさん　西森　花村
バレンタインチョコレートあげる御仏壇　宮尾あいき
ひらいてる門は堂々と見える　那須　鎮彦

川柳塔賞候補作品

香川　酔々

足裏に父が流転の一代記　福間　芳枝
幸せかしあわせかと聞く姫鏡　清水　康恵
華やかな舞台に戻る離婚印　赤木　和子
看板に右書きもある城下町　田中　晴子
罪なこと書いて女は返事待つ　春城　年代
口にする不幸が嘘のような指　片上　明水
消えそうな去来の墓の小さい秋　塩田新一郎
令夫人普通の女でございます　田中ヒデ子
散らかした部屋に置いていた素顔　日阪　秋子
目玉焼今朝は目玉が片寄って　葛　幸子
寺町に育ち鐘の音聞き分ける　高杉　千歩
さし向い答えをそらす箸の先　奥田みつ子
母と子の合せ鏡もすれてくる　高田てまり
年ですね薬出すには出しますが　山田　保蔵
ひとり旅女易者に手をあずけ　曽我部佳風

西田　柳宏子

謎がまだ解けずリンゴをむいている　奥山美智子
飽きのきた顔自画像で描きかえる　矢野　佳雲
春夏秋冬草の匂いの母でいる　寺田　裕美
善人の足へ裏から春がくる　松本はるみ
善人が真面目に旗を振る喜劇　八塚三五島
世の中をトンボ眼鏡で広く見る　春城　年化
吹だまり枯葉の私語が聞えそう　松川　芳子
傷口をなめて野良犬路地に消え　吐田　公一
このパズル作ったひとは出来るかな　赤木　奈々

逆境に白旗もたぬ車椅子　田中　隆二
会釈して通れば温い路地の風　奥野　テル
二ン月の鬼は防弾チョッキ着て走る　丹下　玉子
呱々の声聞いてお茶漬欲しくなる　森脇　和子
水割りの氷が嘘を聞いてくれ　佐藤　令子
よく見える眼鏡をかけて多忙なり　佐藤　藤子

〈お詫び〉前回の中間発表に九月号よりの選出句報告洩れ五句追記します。

どちらへも心がゆれるヤジロベー　小山　悠泉
母たちの絵の具にいくさの色はない　田中　晴子
七回忌父母を泣かせた顔ばかり　長谷川　司
夏の雲マリア像から龍になり　北川　民子
満々の自信助走を怠らず　寺田　裕美

谷垣史好

栄転をよろこぶ妻の肩がこる　井上　照子
渡し舟みんないい顔して渡る　沢田　千春
女ひとり小さな鍋をこげつかせ　野々口ゆう他
口にする不幸が嘘のような指　片上　明水
老母ひとり雨戸の多い家に住む　丸山よし津
生い立ちを静かに語る貝の紋　藤田　泰子
添い寝して子と同じだけ眠りこけ　上鈴木春枝
安全地帯の彼を少うし甘くみた　春城　年代
充電のようにちびちび父の酒　小山　悠泉
呼び捨てにされて女はついて行く　八木　芳水
ダブルベッドよ少し疲れていませんか　佐藤　藤子
人生の疲れた頃の夏蜜柑　有働　芳仙
再軍備今は宛名のないハガキ　田中　叶
いやな人が戸を閉めている背を見る　里本たかし
受験日に積る気のない雪が降る　津山　冬子

河内天笑

実り見て心置なく散る枯葉　浜本　ちよ
いざという時は善人招かれず　片上　明水
観光で戸締りのいる島となり　八塚三五島
食堂のすみでもぐもぐ老夫婦　葛　幸子
ロボットでいたい日もある悩み事　松尾柳右子
あきかんがひとつころがり町静か　山田　久子
春夏秋冬草の匂いの母でいる　寺田　裕美
寄り添うて家族の如く福寿草　北川　民子
狂わないタクト振ってるお人好し　森脇　和子
毛皮着た妻にいささかうろたえる　工藤　蕗子
二科展を出れば風にも色がある　西村かすみ
愚痴ひとつこぼさぬ妻に裁かれる　紀市　郁栄
自尊心鼻が一番知っている　奥山美智子
どちらかが満足してるシーソーよ　佐藤　令子
よそゆきと区別するからぼろを出し　日阪　秋子

高杉鬼遊

母のやさしさ父のきびしさ海が好き　伊藤　春子
通りゃんせ異母兄姉と御承知か　高杉　千歩
二十四孝父からもらう平手打ち　市川　鱗魚
はがき一葉人恋う胸に灯をともす　森脇　和子
影ぼうしお前はシャンとして歩け　浜本　ちよ
生まれるも死ぬるも一人かもめ呼ぶ　細木　歳栄
出塁の夫へ妻のバント策　矢野　佳雲
どう工面したのか会費持って来る　糸谷　春草
一年中食欲がありそして秋　藤田　泰子
年ですね薬出すには出しますが　山田　保蔵
職業の欄へ小さく主婦と書く　平松かすみ
フルムーン新宿御苑は広すぎる　越村　枯梢
十二月八日を知らぬ人ばかり　小野　風童
待っていたように辞表を受理される　宇野　昭代
骸なり葬儀無用と書き残す　林　荒介

秀句鑑賞

—水煙抄—

—前月号から—

傍島静馬

整然としすぎた部屋でうちとけず
角野かず子

少々散らかっているぐらいがくつろげる。

ライバルに右側あけてやるゆとり
紀市　郁栄

おおらかな態度がうれしい。

かな便りその行間に母がいる
西村かすみ

金釘流の手紙に老母が生きている。

冗談冗談軽くいなして本音かも
伊藤　春子

冗談めかして本心をいう如才なさ。

マスコミが作る美人で嫁きおくれ
竹内花代子

ミス○○必ずしも幸福だとは言いきれぬ。

ポケットに手を入れただけの威圧感
松本はるみ

実力者最後にウンというだけ。

他人事だから軽いなぐさめなど言える
本多　洋行

家族にはそんなに甘いこと言わぬ。

気負ったときすでに勝負はついていた
佐藤　藤子

気がついた時は手おくれだった。

降りるたび土産が増えるバス旅行
米沢　暁明

さながら近所の土産を買いに来たみたい。

コマーシャルほどではないが効くみたい
二宮　山久

うまいコマーシャルについつい買わされる。

見たような顔だと向うもこちら向く
武田　帆雀

高層マンションの住人かも。

店じまいそれでも損をせぬチラシ
津山　刀水

店じまいいったい何べんするつもり。

働いてない手にダイヤよく光り
麻野　幽玄

別宅住いの囲い者かも。

両隣り主人の顔をまだ知らぬ
山田　保蔵

そのうちに麻雀友達になるでしょう。

世のこわさまだ知らぬ娘で気が強い
岸野あやめ

ボーイフレンドでも出来れば気が変るでしょう。

べんちゃらの下手な大工で腕が冴え
脇田　米朝

へんくつで徹し人間文化財。

病室のテレビで除夜の鐘を聞く
稲本　凡子

こんなことが二度とないように。

欲のない方へ神様寄ってくる
八木　芳水

神様は至って公平だ。

しゃべりの娘年ごろとなる無口
朝山千世子

恋人が出来たのかも知れない。

淋しさが一輪挿しに活けてある
佐藤　令子

一輪挿しに乙女心が生きている。

見なれたる景色見直す雪の朝
浜本　ちよ

いつもの汚れた庭を見ちがえた。

合格通知から我が家の春となり
高野　不二

今年の春は殊の外うれしい気がする。

虚勢張る髭は童顔持て余し
福田あや子

ごつい髭をはやしたが、童顔はどうにもならぬ。

春や春踊りで京の幕はあく
山本　炉斉

京の春、都踊りで明けてくる。

老いの身のどうにかなるさの日を送る
円増　貞子

米寿をそこに悠々自適する。

シクラメン病夫に春を買いました
藤瀬比沙子

奥さんのしおらしい気持がうれしい。

自選百句

河村日満

姑娘のもう隠れない進軍譜
お祭りの子に賽銭の借りがあり
雨垂れにひとは上手な詩をつくり
空襲の町なり数えきれぬ星
兵隊はわが子皇国の子泥をゆく（ニュース写真を贈られた叔母に）
貧乏の子は貧乏の子と遊び
菓子一つ犬に芸などしいるまじ
子はみんな母親のもの母につく
その上によその子までが来て遊び
来い来いと云うてたほどにもてなさず
妊産婦罷り通るという姿
白粉の匂いも久し妻と佇つ
労働歌重役室の窓閉まる
無一文でも青年は家に居ず
十割の金利笑って子に払い
悪しざまに話せば妻も敵にして
神も仏もあるかと戦後から変り
眼に注射誰か医学を信ぜざる
皆花見ですと日直そっけなし
子へ便り書く妻老けて老けて見え
うたた寝の妻に涼しい風よ吹け
アメリカの風邪も土産のうちに入れ
恋なんかしなかったわとまだだまし
蚤取ってもとの寝息にはやい妻
低能の腰も女の線となり

友多き幸しみじみと選挙戦
よその課に昨日の花見うらやまれ
人事異動へくったくもなし碁を囲み
大陸に四季あり兵としての過去（回顧）
育児法どおりですこし軽い孫
夫婦だけの日の膳夫婦子を語り
ほめて話せばほめた言葉が返ってき
自選して出さぬ句に似た句が抜かれ
飲むときは呼んでもらえる顧問にて
飲めるなら飲めと母とはちがう父
仁義禮智信私も好きな道
栄枯盛衰のいまどの辺にいる幸ぞ
温泉の街の旅情もビルになり下がり
酒に飽き饒舌に飽き海広し（隠岐島にて）
紅葉へ詩人としての眼を問われ
半パンツわが影老いたなとおもう
大連の文字大連がよみがえり
ひさびさの砂丘素足で確かめる
ゆっくりと素足で踏めば鳴る砂丘
九条武子が立ってるような月見草
あなたあなたと信じきってる声も老け
女心がいまならわかるプレゼント
決め球のない定年の哀れとも
台所勤務五十の妻の味
電柱に金貸したがるビラが舞い

老夫婦妻にははやき言葉とも
反論をたたく構えで眼鏡拭く
厳として父の座がある金のこと
子のものを買うとき妻の瞳が和む
絢爛と地下街にある別天地
壁掛けに名画とやらでいる裸
くらしにくい世だと鳴いてる虫かとも
角いつかとれて思想が岐路にたつ
文明に溶けこみ父もガウン着る
雄雌の区別はいらぬ蠅叩き
初対面から善人の酌ぎこぼし
孫抱いて古い軍歌をなつかしむ
貧乏に強い育ちの夫婦仲
漁場のない船が絵になる秋の浜
怒鳴り癖なおらず褌好きの父
恍惚はやがての姿胸におく
シャッターをゆさぶる風も十二月
死火山でないをちょいちょいみせてやり
二十年満期価値なき金を手に
日の丸も君が代も好き日本人
公約のさわりを雨の中で聞き
栄えてる頃の社にある父の過去
明日がないように取り組む父の性
昼を呼ぶ声が尖ってペンを擱く
飲め飲めの猪口をこの頃逃げる老い

嫁にみな任せば嫁のいいリズム
平凡でよいと云いきるほどに老け
訛りまだこなせず戦後からの郷
食わず嫌いですパチンコと宝くじ
君が代が国歌で文句ない夫婦
間違いをとおす男の軽い咳
通り魔の気持ちがわかるおぼろ月
言い負けた位置をすこうし移動する
今日は寝ろだけで納めた父の愛
旅たのしちょんちょろちょんの宿ゆかた
上段へ突きの構えの妻となり
誰とでも交わす握手の細い指
晩酌を時のながれの椅子で酌む
参観日以来教育爺となり
妻がいて寝押し忘れぬ旅の床
どう値上げされてもやめられぬ酒よ
盛装をしても喪服にかなわない
嫁がきて老後天ぷら攻めにあい
言い訳を直線で衝く父の性
悠々自適いつ死んでもが言える幸
肩書きがとれて庶民の眼に戻る
満州国歌が歌える余技を秘めて老い
墓洗う残りすくない気で洗う
盃を伏せて飯とは限らない
責任を知る音で発つラッセル車

自選百句

高杉鬼遊

神様が栄えるほどに世が乱れ
怪獣の尻尾を踏んだ花名刺
男対女エレベーターは昇る
アベノからどやどや乗った河内弁
長電話寝ている猫の耳うごく
罪人の如く音痴がひき出され
紅一点誘うてほしいのは一人
出世した男に顔を忘れられ
妹にちんぽこがない不思議
面倒くさそうに場末のストリッパー
毒矢すでに撃ちつくして夫婦老い
白桃の重みひとつに満ちる皿
職人がネクタイをするめでたい日
役不足いわずに城の石ひとつ
ぎょうざ食う逢わねばならぬ人もなし
天ぷらの尻尾は確かにえびである
地下街の出口で虫の貌となる
行き先を聞きに自転車ひき返えす
追い駈ける方が追われる渦の中
神さまの正面へ出る願いごと
米を食いパンの思想がわからない
風のなか笛一管は風になり
スープ皿ななめに朝の疑いや
革命の旗はお子様ランチから
すこしいじめる男が好きで闇の中

浮き雲は今どの辺りわがいのち
矢傷背に女そしらぬ顔で生き
にんげんの肩の辺りにいる仏
人間の親子を猿に見てもらい
十二時を打つから今日も昼にする
蟹の足酒は汚れた手に持たず
葷酒山門を入るを許さる花の酔い
名は花子動物園に籍を置き
泣き虫に木登りうまい姉がいる
野次馬が正しいことを言っている
紫の雲凡人の視野になし
定年や河童の皿の傾けり
吊り革の男のどれも狂えまい
妻と社長にあやまりながら生きている
生きてゆく台詞を今日もまたとちり
とても丈夫な悪人の浮き袋
およそ非科学的で大根を煮る
海賊の末裔ちりめんじゃこを干す
復讐を忘れ南の陽を浴びる
縁遠い娘に金の馬車が消え
嘘をつく顔は横からよく見える
日の丸を振るトリックは古い手だ
一流になれる暗示をてのひらに
酢にされるらしいと蛸も知っている
めしを食うただそれだけの日を恐れ

水死体時計は防水自動捲き
尼さんになっても髪は伸びてくる
訃を聞けば痛むこころと安らぎと
人間の墓だ何やら書いてある
目の前にちらつく金の憎らしさ
恋文へ拝啓と書き詮もなし
テニオハのない友と飲むにごり酒
桃栗三年男は便りよこさない
税務署で冗談を言う出前持
天の水地の水祈るほかはなし
死ぬ時は順不同なり日向ぼこ
訃を聞いて他人はめしを食っている
歳だけは忘れるようにしているが
二階から隣りの猫が下りてこず
かたつむり恋にしあらば急ぐべし
菖蒲群生おとこよみんな強くなれ
花かるた一枚ずつに闇がある
病人の手に叩かれる蚊のいのち
死んだ子の帽子が一つかけてある
履歴書の中を何処まで歩くのか
ゴキブリのメンツ出直すことにする
死に水をとる優しさは持っている
美しくなる効用もあり恋をせん
母の火がまだ燃えている冬の雨
弁当をしっかり持ったまま別れ

ひつじ飼いの笛を愛とは思えない
色ごともそこそこ好きな意気地なし
税務署に階段があり何の罪
酒屋への使いは孝行だと思う
一碗の飯でご先祖仲がよい
サルトルが死に標的がゆれてくる
路郎忌を待つ一人なり師を識らず
連翹の黄につらなれる不孝者
妻とふたり今日あるいのち花の下
大地響かせ一匹の蚊が落ちる
お祭りの日も貧しさに変りなし
香奠を数える指が愉しそう
恋の字もうす汚なさの歳となり
歴史から消える小さなおとむらい
桔梗一輪おとこは強いものならず
くちびるを許し外堀うずめられ
百点の妻に疲れるキリギリス
盗っ人が頭を打った蹴り口
母の名は釈尼妙寂はるかなり
仲人に何のおちどもない苦情
生涯をひとりと決めた壺の傷
花言葉とっさに言えるものでない
追うことも追われることもない夫婦
叫んだらことばが星になりました
友だちのような友だちならいるが

愛染帖

橘高薫風選

七十路に今や占うこともなし　青森市　工藤甲吉
あきらめは早いと「鍵」を読まされる　笠岡市　木山遠二
竹馬会三人はまめ一人ぼけ　八十路吾にまた来年と桜散る　大阪市　小出智子
かりそめの一日があり京料理　雨の日が続いて人を疎んじる　島根県　小砂白汀
初恋が化石になったさくら貝　ハイジャックも乗せ颯爽と離陸せり　土佐市　海地大破
父の帽子は祈るかたちで水を汲む　湧き水の明るさと遇う遍路笠　富田林市　岩田美代
春だから靴が鳴るとは言えないぞ　鬱の目に花と女は美しい　町田市　竹内紫錆
中祈帽置き語り出す半世紀　デッドボール二つの群の案じ顔　岡山県　白岩文衛
計算器お前と零に戻りたし　格言を二つ三つ言い友が去に　八尾市　高橋夕花
薔薇活ける遠い手紙を傍らに　夕ざくら亡父の好んだ小磯展　指宿市　渡辺伊津志
自嘲にも似て鶏のあとにつき　星屑は咳の飛沫か空寒し　寝屋川市　堀江光子
入り日の道人旅人に見えてくる　桃の花遠い昔とおなじ色　大阪市　中西兼治郎
家族会議じいちゃんばあちゃん額の中　アメリカの桜もパッと咲きパッと散る　米子市　政岡日枝子
約束を男は大きな手で果たす　哀しいまでの謀反飼犬が尾をふらぬ　今治市　矢野佳雲
むせ返る花屋は花の仮の宿　夕焼けが今日の華麗な嘘をつく　岡山県　土居耕花
週刊誌まじめな記事が物足らず　何処にでも尿を放って無神論　鳥取県　鈴木村諷子
一億のオモチャの紙幣の真愚性　覚めてみりゃ今見た夢から四十年　大阪市　大塚節子
汚れた顔きれいな涙優勝旗　腰低い連呼の後の頭の高さ　笠岡市　松本忠三
じいちゃんと呼びばあちゃんと呼ばせない　じゃんけんで負けた拳の割り切れず　名古屋市　藤井高子
子盗ろ子盗ろやさしい嫁が盗ってゆく　また新らの筆で女は虹を描く　鳥取県　林露杖
さらさらと掌からこぼれる砂に似て　虚と実の狭間に揺れているいのち　唐津市　久保正敏
投票日までの絆の後援会　巣箱から出て行く春の行楽日　米子市　八木千代
少しずつ昨日とちがう壺の花　花いちもんめ明日も太郎と決めている　鳥取県　林荒介
灰にした新聞紙のこればっち　半生を壁に埋めて壁といる　岡山県　池田半仙
鯉幟ミニサイズにもある未来　栄転も退職もないおらが春　山口県　高崎雀声
老いた母うろたえてみる娘のめがね　赤い爪男の骨を抜く女　尼崎市　田中晴子
吹田市　西岡豊　鳥取市　河村日満
逆転のような訃をきくおぼろ月　独り言掬えば漏れる水のごと　藤井寺市　赤木和子
羽曳野市　吉川寿美

水仙の白を妬んで春の雪　今治市　月原宵明

花の夢見ている貝を掘り起し　八尾市　松下蕉露

人生の道草老後の役に立ち　唐津市　田口虹汀

雨音も蛙も遠い方がいい　吹田市　井上照子

八十の母の造花の若々し　豊中市　上田登志実

墓地の桜眠るはみんな日本人　鳥取県　清水一保

前哨戦なぞと選挙も楽しまれ　吹田市　栗谷春子

ビルを背に見事桜の構図あり　唐津市　浜本ちよ

太っ腹な男いびつな文字を書く　吹田市　横山青果

数珠を忘れた義理の弔い　岸和田市　古野ひで

幾度の修羅場くぐりし老母なるや　和歌山市　中尾まゆみ

新学期へ動きはじめる接続詞　高槻市　田崎素秋

野の菫都会の庭でひ弱なり　京都市　山本規不風

雨に散る花に女が行く祇園　大阪市　中野忠廣

退院のめどに桜が使われる　大阪市　藤森小雅子

風すこしあって己に安堵する　鳥取県　福田あや子

集団のエプロン恐い夢を見る　笠岡市　高木桃里

歓びをわがことにして酔うてくれ　羽咋市　三宅ろ亭

雨宿り平和な家庭見てしまい　富田林市　藤田泰子

本当の春を知らない桜草　大阪市　岡田ふみ

地下街で迷う都会の田舎者　大阪市　稲本凡子

眼鏡外せば現実に舞いもどり　高知県　赤川菊野

春愁は孤児の涙に眠られず　今治市　越智一水

二度目から恋おもしろいものとなり　兵庫県　脇田米朝

師の影は踏まずどころかなぐりつけ　貝塚市　行天千代

入園児母をはなれて列につく　米子市　菅井とも子

ナツメロのままで軍歌よ居てほしい　名古屋市　越村枯梢

入道雲のその一ときは亡父に似て　米子市　小西雄々

骨壺に入れば同じ頭蓋骨　兵庫県　遠山可住

なつかしい肩ネとふれて来る柳　豊中市　田中正坊

病む妻に蘭を見せればうなずきぬ　伊丹市　樫谷寿馬

黙々と不治の病へ薬飲む　米子市　寺沢みど里

宿命とやっと悟れた七回忌　羽曳野市　田中隆二

ランドセル受験畢竟よーいどん　大阪府　坂口公子

山桜群雄割拠の貌で咲き　和泉市　岡井やすお

姫の雛納め太郎の鯉のぼり　寝屋川市　平松かすみ

年金年金パン買う時も　高知県　松岡三吉

妻だます演技が君できますか　奈良県　村上春巳

すれ違う馬酔木の小路会釈して　松山市　谷真風

芽柳へ挨拶に来た初燕　大阪市　江城修史

主義もたぬ男やっぱり親しめず　倉吉市　奥谷弘朗

この俺を極楽トンボと妻がいう　米子市　田中亜弥

出来ぬ子へ糸ほぐしては教えこみ　島根県　木村はじめ

金婚式せめてぜいたくして見度し　島根県　堀江正朗

結局はお喋りだけでかきまわし　島根県　堀江芳子

ぼんぼりが灯くと妻伊川うたいだす　唐津市　中村稜子

夜桜の雪洞越しの歌を聞く

京都市　松川杜的
黒髪に始まり終る芸に生き

城市　高橋千万子
ひそと逢うお茶で満足そんなとし

宝塚市　吉田笑女
倖せをこつこつ溜めているポケッ

松原市　佐藤藤子
実をつけた梅けなげとも愛しとも

守口市　長谷川司
選挙前ねずみのように人が来る

岸和田市　福島せつ子
男の背中にもう一つの顔があり

岡山市　原田凡太郎
小走りに家鴨が戻る稲光

西宮市　松本一郎
年金の証書届いて出る吐息

大阪市　萩谷まさ
ビルを縫う遊歩道にも春の彩

大阪市　上江洌勝子
植木市とどのつまりが木瓜一つ

岸和田市　原さよ子
六十の意欲大きな夢を持つ

浜田市　佐々木裕
娘と並ぶ妻のうなじの細い事

唐津市　浜本義美
赤提灯みれば肝炎もう忘れ

唐津市　木塚素石
マージャンで雑魚寝も楽し連休日

西宮市　津山冬子
ロボットに教えられてる新社員

大阪市　川口弘生

飯が出るお茶が出て来る妻が居る

唐津市　仁部四郎
初孫の名前みんなにほめられる

岡山市　井上柳五郎
何事もなかったように花が咲き

今治市　新居田胡頹子
すんなりと従う孫がもの足りず

弘前市　真喜内實
散る時が見えてる花を愛してる

奈良市　森田カズエ
鉛筆を削り気分を落ちつかせ

尼崎市　春城年代
ベランダの花いっせいにぱっと春

東大阪市　市場没食子
新聞の老人向けの字もうれし

西宮市　朝山千世子
芭蕉西行恋えど花見は自家用車で

豊中市　満仲きく子
移り気な心を花に責められる

岡山市　川端柳子
憶測の果てはしたたる傘を提げ

西宮市　奥田みつ子
旅人の胸に消えない北極星

寝屋川市　柴田英壬子
コンピューターはっきり噂裏付ける

平田市　久家代仕男
銀山の哀史を語る石仏

米子市　林瑞恵
世を拗ねて影も一つの影を蹴る

島根県　松本文子
子守唄涙の縄をなうように

東大阪市　竹中綾珠
桜散り花の絨毯踏むお城

羽曳野市　麻野幽玄
お仕着せの旅はぞろぞろがやがやと

和歌山市　松原寿子
逢えてなおそのひと言を持ち帰り

堺市　大道美乙女
強がりの背に孤独の影を見る

尼崎市　伊藤春子
黒い昏梅地下で会う女の子

吹田市　西川景子
追憶の海へ寄り添う雛流る

京都市　都倉求芽
倒れるときは隣の独楽も倒す独楽

★

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「窓」　選者　**森中恵美子**

締切　**6月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局"老後をたのしく"係

発表　6月26日（日）ラジオ第一放送
午前10時から

虚実皮膜のしずく

橘　高　薫　風

前田芙巳代句集「しずく花」が去る四月十日、川柳一枚の会から発刊になった。定金冬二氏は、序文で「芙巳代が精神的にもっとも沈んでいる時期に、句集を出そうと思うとの言葉をきいて内心おどろいた。なぜだときいたら、今だから出せるのです。この痛み、悲しみが消えてしまったら、もう出すことはできないでしょう、と言った」意味の発刊のいきさつに触れている。このことは、作者のこまごまとした紹介以上に的確な言葉で、作者を知らぬ者にも、芙巳代作品の真摯な思いの籠もりようが推察出来るのである。実際、芙巳代作品は、血縁との絆や女の業と、真剣に向き合って呼吸を続け、うごめいている。

母の櫛どこに置いてもふしあわせ

魂がかえってこない夏の家

てのひらで豆腐を切ってゆく絆

咳のつづきにぼうぼうとある枯野

男を送り小さな雪崩もちかえる

罪を投げつけたところにいたおんな

みつめられてリンゴの腐蝕はなはだし

芙巳代さんは、羽曳野病院の「どんぐり川柳会」で川村好郎先生の指導を仰いでおられた和田痴亭氏の姪御さんだから、痴亭氏の影響で川柳に手を染められたのではないかと思う。川柳塔誌上や、故河相すゝむ氏の主宰しておられた明和川柳研究会に句を発表し、初心時代は、私の堂島の家での研鑽会にも例月出席されていた。故不二田一三夫氏にも目をかけられ、川柳塔の女流座談会にも新人ながら出席発言されたこともあった。後、せんば川柳社に移り、現在の一枚の会に至ってからの活躍ぶりは大方の知る所である。

気性は激しいように、作品からして推量出来るが、実際は優しく誠に義理固い。そして謙虚である。私は、かねがね短詩文芸の良さは、控えめな謙虚さ、言いおおせず余情にひたらしめるをよしと思っている者だが、（それが全てでないこと言うまでもない）その謙虚さが、人柄のみならず作品にもにじみ出ている。こけおどしではないのである。

死ぬときの花を選んでくれますか

飴売りの太鼓について旅に出る

水鉄砲に充塡のときがくる

屑かごの中の見事な情死行

指が短いので哀しいのでしょうか

ようかんに別れ話は似合わない

男はおんなを憶いおんなは死を憶う

近松門左衛門の演劇論に「虚実皮膜の論」なるものがある。その一節を書けば、

「芸の六義が義理につまりてあはれなれば、節も文句もきっとしたるほど、いよいよあはれなるものなり。このゆえにあはれをあはれなりといふ時は、含蓄の意なうして、結句その情うすし。あはれなりといはずして、ひとりあはれなるが肝要なり。（略）皮膜の間といふがここなり。虚にして虚にあらず、実にして実にあらず、この間に慰みあるものなり。（略）」前後の説明を略したので理解し難いだろうが、芸術は虚実の間に在ると言うのである。文芸に於ても虚実皮膜の間のあやを大切にする。少し褒め過ぎになるけれど「しずく花」という名、虚と実との間にしみ込み開花した花であろうか。多くの作品に深い感動を得た。

■随想

ひつじの雑唱〈2〉

竹内紫錆

詩と田のあいだ

前回、比喩や「かるた」はサラリーマン社会の潤滑油であり、川柳もそれに近いものだろう、と述べた。考えてみると、社内報などは詩を作る人と田を作る人がまじって感想や写真を載せる場所だが、大体は、田を作るための記事を職制内の指導者が書き、話を分かりやすくするため周知の格言をおりこんでいる。周知でない格言を入れて、新味を出す人もいる。しかし、そういった寸言を作る作法や技術は、そもそも詩作りの側から出ていたと思う。現代版「いろはがるた」の類も、大多数が五七五調になっているようだが、これは何の感化だろうか。

その中で、読者が目を通す記事は人の好みでまちまちだが、たまには社長も重役も、昔の自分の趣味を思い出すような句を眺めて頭を休めたり、高笑いする一ときが確かにある。

今年は「国際コミュニケーションの年」だが、「婦人年」「障害者年」を経たあとのスローガンとしては、ひとつピンと来ない。特に川柳作家はそうだろうが、ここで「国際」を「国内」に置き替えて、しばらく考えてみる意味はありそうだ。

田を作る側で、通信・連絡が大事なことはどの職場でも強調されてきた。電話の台数も急速に増えたし、産業の分業化も進んで、受注や作業の進行に当る大勢が電話器にとびつく時代になった。しかし、電話で科学の理論を論じたり、文芸の内容を語ったりはしないから、いわゆる専門家は別の席にいて沈思黙考の姿になる。詩人の方も個人活動の域を出ないまま年月がたってゆく。

しつけが良くて弁が達者なら営業外交むきの人になり、黙考が習慣になればいよいよ無口になる——という二つの人柄を、職場でもよく見受けるが、私は後者の方である。ただし黙考にも展開の糸口は欲しい。文芸でも、論文書きでも、そのための通信は必要であった。

幸い、私どもの技師仲間でも、手紙を書けば返事をくれる人はいた。そこでまず、手紙の話に入ろう。

ハガキの書ける人

年賀状をのぞいて、私にハガキをくれる人には俳句作家が多く、要領を得た短信を送ってくる。川柳作家も同様で、語句を選び、ていねいに書く人種、という感じがある。しかし、生活の断面を一行にスケッチする習慣のためか、長いストーリーを組立てる仕事には不慣れな方々かもしれない。

選者級の人でも本業が別にあると、鉛筆を握る時間の大半は、○や×をつけることに費やされ、評論を書くのは面倒なのであろう。だから、新書版程度の書物を作っても、ハガキの字数程度の句評と注解をくりかえすことになるのではあるまいか。

私自身の本業はといえば、終戦後の研究者であって、一篇三十枚ほどの文章を時折書かねばならなかった。この点は寺田寅彦のような環境に近かった。一般に研究者は、理科系の人の中では、書ける人種といってよい。そして、仕事の途中々々で必要な情報を求めて先輩や遠方の社員に照会をすることがあり、そのとき、往復ハガキよりも手軽な、会社内の郵便システムを利用した。

まず、便箋三枚（又は二枚）の間にカーボン紙を挟んで質問を書き、二枚を相手に送る。受信者の方では、来た紙の間に赤カーボン紙を入れて返事を記入する。そして一枚だけを発信者に戻すのである。時候の挨拶はぬきでという申し合わせもあり、メモの調子でよかった。

しかし、それでも返信率は年とともに下り返事をくれるのは上級者（明治、大正生れ）のことが多かった。若い人は戦後電話に頼り対話でも、相手の言葉に助けられて話が進むことが普通になった。

そんな習慣がついた勤労者に、切手の要る手紙を今日期待して、たまに書いてもらったとしても、どこかが文意不明になり、読み手が困ることになりがちである。結局、専門家が計算や実験のすえ出した結論的なデータを管理職や外交員が携えて、新幹線などで出張して説明する、といった分業体制に進んだようである。だから、川柳ほどの字数も書かない勤め人がふえ、文通能力は昔に比べ格段に落ちたらしい。

会えない人との通信

前述の往復便箋方式は、いわば伝票が原型である。ところで、多くの人は、文章を臨機に作るのが苦手である。だから、伝票にマルをつけ、数字を入れればすむ、という風習が浸透し、ついにはワープロのような「きまり文句はめこみ機」が登場する時代になった。読者各位は、そういうものに頼らぬ独創心をたぎらせて、心情を句に吐露する習慣をつけて来たのであろうが、しかし一度は、達人に句の添削を依頼したかったに違いあるまい。

しかし、近くにご隠居がいるのは落語の世界だけである。「……そうですか。そういう気持なら○○という熟語を入れなさい」と即座に言える人物は、今の世にそうざらにはいない。職場は催促をするところであり、寺田寅彦型の教師役は少なくなった。

話は療養時代に戻るが、病棟川柳会が出来たときも、互選にはあきたらなくて、すぐに一流作家の添削指導を得たいという希望がみんなから出た。そこで保健同人誌の文芸欄を担当していた川上三太郎氏に、患者一同のお願いとして、おそるおそる手紙を出した。すると、療養者大勢の作品に限り、一括で引受ける……もちろん無料、という返事があり、みんなは張り切った。ハガキ大の用紙に五句ずつ記入し発信すると、先生からは行間に一行ずつ評をつけて返信が来た。佳、65点、とか5点刻みの点がついていたのは良い句であった。「それまでの句」とか「題材古し」などが大多数で、そっけないくらいの走り書きだったが、その紙を大勢に回すと、それをあちこちで唱えるようになった。句評にも言い方がある、と知ったのはこの時である。（一流の大家のひとことが、同好者間の説得用語になることは、今のテレビ時代によく経験することである。）

一度、返信用封筒を入れず（切手だけ）郵便を出したら、やがて着いたのは、再利用された同一封筒であった。つまり、裏面の○○会の下に「御中」と書かれ、宛名に変っていた。省資源、省エネの見本みたいな郵送法であった。

こういう添削をして下さる方にめぐり合うことは滅多にない。添削は、斯道育成の情熱がなければできない、大変なサービスであろう。我々はもちろん柳誌を購読して作品の研究も始めたわけだが、川柳人口の希薄な都市に住むと、こんな文通法しかなかった。そして、「川柳研究」「番傘」そして「川柳塔」へと三十数年の私の作句歴……ひつじの歩みが始ったわけだ。私の記憶にある選者のお名前は十二、三。対面の機会はほとんどない。三太郎先生ともお会いしたことが一度もないままであった。ご存命中の短信の中で「あなた

はエンジニアらしいですね。そんな句がよいのです」とあって、その言葉が私には貴重な指針であった。

私は、後年「電波新聞」を毎日読む職場に移り、同紙の川柳欄に目を留めるめぐり合わせになった。電波新聞も大阪への投句であるから、関西への通信は三十年で千回を越す。宛先のゴム印を作ればよかったと思うくらいだ。

しかし、投句だけというのは、能率の悪い勉強法で、没句の理由が伝わって来ない。ある時、金泉萬楽さんの特別なお計らいで一年間、句評と指導を受けた。おかげで、自分のひとりよがりと、他人の理解する表現との差が分ってきた。また、未知の選者（三人ぐらい）に選んでもらうのもいい。社内報の原稿などは、編集部に顔を知られているから、人情がどうしても入る。柳誌の場合と違い、随筆の類で三分の二以上が没になるようなことは、まずかった。その代り「売れる本」を目ざすとなったら話は別である。科学者は、ただ記録のために書く、という人が大部分だ。この駄文にしても、没句率ほど削るとなったら、編集者が大変だろう。

添削する側になる

最近やっと私も、弟子の側でなく、人の原稿に筆を入れる仕事についた。といっても、句とか普通の文章ではない。技術系の翻訳文を、読んで解るくらいに直すわけだが、美辞は不要、ただ科学的な筋道を鮮明にするための添削なのである。

ところで、翻訳原稿を依頼者に届けるのと同時に、書き手に向って誤訳、誤字を通知する仕事がある。また、難しかった個所について質問が来るので、正解を示さなければならない。そこで、前に書いた「往信—赤ペン記入—返信」という手順を、通信教育のような形で進めては、今後の質の向上を図るわけである。六十代の人間には適職かもしれない。誤字、常用漢字、表現などの指摘を、教師より親切にやらねばならないが、私が句作三十年の間に身につけた国語、外来語の語彙はずいぶん役に立っている。

この仕事は、全国各地に住む翻訳者との通信なので、会うことはほとんどないが、原稿の字を見ていると、人柄が滲み出てくるものだ。苦しんだすえの感想もついてきて、その時は晦渋な外国文に私も取組むので、原訳者と苦しみを共にする。疑問点が解ればもちろん楽しいし、相手にも伝える。

しかし、どうしても解釈が出来ない難文にぶつかれば、同じビルの中の外遊経験者に訊いたりする。このときに、並んですわる席を作って研究し、解釈の手がかりを与えてくれる人は本当にありがたい。これがコミュニケーションの妙味だなと思う。教える人は何十年か前に、先輩から「施し」をしてもらったので、今度は新人に知識の施しをする番だ、と考えているらしい。同じような心境であろうか、二十年まえ、萬楽さんが新人の私に、「末永く愛読と精進を」と第一信に書いてよこされた一言——これが今も私の胸で消えない。

（続く）

このたびの入院に際しましては皆様にご心配をおかけ致しました。
二人ともそれぞれ退院して、自宅療養を続けております。ご安心下さい。

中島　生々庵
小　石

川柳批評の衰弱

板尾岳人

死化粧音符の中のイチゴ皿　岳人

直原七面山氏が右記の句がわからぬとの御批判「ごめんなさい」。貴方だけがわからぬ句をお見せして。でもね、徹底的に解体した上での御批判ならお受けしたいのですが、川柳家として長い道を歩まれているのですからもう少し基礎概念を揺さぶって頂きたい。ピエロ的批判は悲しむべきではないでしょうか。

最近文芸界の引き締めが強まっている中国で、現代詩の分野でも、若い人に人気のある象徴詩が「朦朧としてわからない」と批判を受け論争が繰り広げられた。しかし若い詩人の反撃で、このほど批判の急先峰だった有名な詩人・艾青（がいせい）が「朦朧詩はあってもよい」との論文を発表、「朦朧派」が一応の評価を得ている。

朦朧詩とは文革後若い人達が好んで作り始めた象徴詩で抽象的な表現で読者に「何か」を語りかける手法をとっている。

詩　集「遠きと近きと」より

あなた
私をみたり
雲をみたり
どうも
私を見るときは　はるかかなたを
雲を見るときは　ごく近いものを
見ているみたい

詩集「「夕映えの中に」より

夕映えの中に
君は唇をぎゅっとむすんで
「あと十五分しかない」
いま悲劇が演じられようとしている
「十年・百年別れていなければ」
「千里・万里離れていなければ」
突然君はいたずらっぽく笑ったので
本当の年が分かってしまった
「一言いうのを忘れた」
「そう、たしかに一言忘れた」
私たちは、とうとう思いつかなかったのだ
太陽はすでに静かに沈んでいた

こうした詩に対して「何をいいたいのか、わからない」「大衆が理解できない詩は人民に奉仕する文芸作品とはいえない」「紙のむだ遣いだ」と批判が出た。中国の文芸雑誌「作品と争鳴」もこの問題を取り上げ賛否両論を特集した。

「詩の多様性とさまざまな詩の共存共栄を認めるべきだ」と主張した。

「世界には多くの朦朧とした事物がある以上、うまく表現しさえすれば朦朧詩は存在してもよい」と認知している。以上を朝日新聞が某日記事として記載していた。

一流のコックはどんな材料でも一流の味に一流の盛付けをする。川柳批判も川柳鑑賞も一流でなくても、たとえ二流でも三流でもよい、あらゆる角度から分解してその人、その人なりに理解し正しい批判をせねばならぬ。

なぜならば作品のすぐそばに作者が明瞭に存在するのだから。

句の説明、そんなことはさして重要事ではない。自由な発想と言語空間の学びが大切である。

路郎は「句はその人のこころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」と。

川柳は五・七・五の十七音字形式であることを認識した上で、五・五型式の作品に挑戦されている貴方にはご理解頂けると思うのだが。

川柳塔社

いちご狩吟行

吉岡美房

五月一日、小雨が降って肌寒い朝ではあったが、近鉄奈良線「九条駅」下車。田んぼの中の道を小走りに午前十時、会場の「三松禅寺」にとび込む。二階大広間には和歌山から遠来の柳友をはじめ、今日の吟行を楽しみにしていた人達の笑顔が一ぱい……。

午前十時三十分、元気な栞先生のお顔も見え、雨もあがったところで、宮口笛生さんの案内で参加者五十八名がお寺からすぐ目の前にあるいちご畠に入って一斉にいちご摘みをはじめる。摘みたてのいちごを食べながら、皆んな齢を忘れて正に少年少女の遠足である。

再びお寺に戻ると、笛生さんが朝早く掘って来たという筍をつかって、笛生さんの奥さんが心をこめてつくって下さった「まぜごはん」にちしゃと筍の木の芽あえ、三つ葉の香りが一ぱいのお汁が大広間に運び込まれ、お酒をくみかわしながらいただいた。そのおいしさは何とも言えないものであった。午後一時三十分、笛生さんの御あいさつがあって、柳宏子さんの名司会で句の披講に入る。その前に先日の春の叙勲に勲六等瑞宝章を受けられた奈良の同人・森田カズエさんの披露があり皆んなの祝福の拍手が一段と大きくなる。あとは国会議員さん方に聞かせてあげたいような友情あふれる楽しい野次もまじる和やかな中での句会が進められた。天位には笛生さん手づくりの「いちごジャム」が贈られて午後三時終了。帰りはあいにく雨が本降りとなったが、今日の句会のたのしかった余韻を失わないように田んぼ道を会場から北東約一キロの薬師寺まで歩き、東塔西塔を仰ぎ、薬師三尊を拝した後、近鉄「西ノ京」駅から帰路についた。

こんな楽しい吟行を持つために笛生さんをはじめ奈良の同人の皆様が一生懸命御世話下さったこと、また、その陰で六十人分もの心のこもった食事をつくって下さった笛生さんの奥様の御苦労に対して、厚く御礼を申し上げる次第である。ただ予定では、三松禅寺の住職のおはなしを聞かせて頂くことになっていたのが、都合で聞けなかったのは残念であった。私達が出された題に対して融通無碍の心であらゆる角度から取り組み句をつくることは禅の心に通ずるのではないかと思ったのは私のひとりよがりかも知れないが、いつまでも、いつまでも心の中に残る吟行に参加出来たよろこびを込めて報告を終りたいと思う。

高度成長いちごも季節奪われる　楓楽
地の埴輪生まれかわって鳥になる　鬼遊
愛の火で煮詰めて渡す苺ジャム　悦郎
好物のいちごもそえる七回忌　幹子
春風と語る無口な埴輪たち　力

当選の喜びダルマの墨がたれ　与呂志
ざんげする心へ温いだるまの目　公子
眠られぬ夜はだるまとにらめっこ　花梢
粒よりのいちごと西の京に住み　酔々
転げてもだるま表情変えもせず　紫香
座禅堂ダルマに肚をみすかされ　柳宏子
気がつけば大きな墓穴掘っていた　春江
少年と少女になっていちご狩り　智子
河内弁忘れ埴輪は無口なり　岳人
旅の夜の娼婦の部屋で見ただるま　善房
だるま市強い顔から売れてゆく　千歩
失意の日旅で目なしのだるま買う　萬的
一度だけだるまの足を拝みたい　登志代
インテリのだるま眼鏡をかけている　薫風

森田カズエさんに
勲六等瑞宝章

去る四月二十九日に発表された春の叙勲で森田カズエさん（奈良県）が勲六等瑞宝章を贈られることになった。半世紀近い看護婦としての仕事を通じ医療に励んでこられた功績を認められたものである。おめでとう。

あくびするときはだるまも手が欲しい　紫香
女将にはとても色気のあるだるま　雀踊子
蛇いちご人見知りする子と歩く　水客
大東亜戦達磨がいてもあったろか　登志実
だるまの眼天をにらんだまころび　潮花
旬が来て苺本当の味がする　智慧子
赤い爪でつまむといちご魔物めき　あいき
だるまの目入れると薄くなるなさけ　重人
埴輪馬黄泉の曠野を駆けるらん　和子
赤くなるいちご残しておく情　茂雄
いちごジャム砂糖が効きすぎる平和　郁子
初デートいちごジュースの味でした　美緒
お隣りの話で苺の差し向い　栞
シェルターは未だ掘ってない楽天家　泰子
穴掘って正論いくつ閉じ込める　幸
哀しみも怨みも埴輪地に還し　史好
埴輪の胴つらい歴史が詰めこまれ　古都路
ライバルの死角に罠を掘っておく　寿馬
かくれんぼ一つつまんだ蛇苺　みつ子
壊れた埴輪無表情をとりもどし　冬葉
転変の雲の流れを追う埴輪　カズエ
苺ジャム素直な愛を隠さない　凡九郎
野仏にいちごがひとつほのぼのと　はつ絵
市場値へ疲れは言わぬ苺摘む　笛生
市に出すいちごのみんな器量よし　定子
ストロベリージュースに企み秘めてある　英壬子
とれとれのいちごにほんとの味を知る　勝美
日輪も二度目埴輪の目を覚ます　太茂津

お礼

去る四月七日の「西尾栞作品集」出版お祝いの会には遠路ご多用のところ多数ご出席下さり、お蔭様で盛会にしていただきまして本当にありがとうございました。誌上を籍り茲に厚く御礼申上げます。

川柳塔社

小西冨士子さん（兵庫県）より
句集出版記念として

金一封

拝受致しました。

川柳塔社

「夜市川柳」募集

初年度最終回　「主役」　西尾　栞選
締切　6月20日着便まで
投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―二
河内天笑方　堺川柳会

標的

遠山可住選

標的にミサイル向けて説く平和　正敏
標的を見事に射止めた春の顔　ひで
標的になろう踏み台にもなろう　赤木和子
標的にされた恨みの原爆忌　倫子
標的が小さく見える日の失意　勝美
標的へ直っ直ぐ飛ぶ矢胸に持ち　綾珠
標的に遠く迷いの矢が外れ　右近
一発で沈まぬ標的艦の意地　たかし
標的へ男の顔になっており　伊津志
年金にすがり標的見失う　利義
わたしの標的かくしたままにしておこう　美穂
決意してから標的は近く視え　テル
標的の直線距離にいる女　多賀子
標的を狂わす酔うて来た女　実男
標的の勲章が目にぶらさがる　悟郎
標的はもしや影武者かもしれず　代仕男
ふと見ればその標的に僕が居る　里風
標的へ善人の矢が届かない　宵明
標的をにらむダルマの目が一つ　文平
標的をぼかしじわじわせめてくる　文子
善人の仮面で標的かくしとく　与呂志
標的にされて真面目な顔になる　重人
放つ矢の標的に愛刻もうか　〆女
標的を父の一段上に置く　耕花
標的へ男最後の矢をつがえ　本蔭棒
昂ぶりの日の標的が定まらず　森脇和子
標的にされていそうで揺れてやれ　景子
試し撃ち少し標的外しとく　泰子
標的をしぼれば男の名が浮び　文子
標的を射止めてからの荷が重い　満津子
佳
仕度する間に標的が動きだし　佳雲
標的を持たない春のシャボン玉　英子
標的に向えば背筋ピンと伸び　素身郎
標的をわざとはずした母の弓　ちかし
七人の敵に標的定まらず　義美
標的にすると可愛くなる女　与呂志
標的をいつも外れる弓をひく　御前
人
美しい標的に矢が当らない　凡太郎
地
射撃場に哀しい標的ばかりある　刀水
天
標的となって孤独の風を知る　寿美
軸
標的の星よ戦は負けました

化粧

森田カズエ選

たくましく子らを育てるうす化粧　与呂志
奥様もペットも美容院へ行き　宵明
髪染めて挙式の席に若返り　軒太楼
年金へちょっぴり化粧したくなる　可住
ときめきの化粧は少し濃くする　冬子
春化粧土筆は肌をぬいでみせ　久仁於
低気圧けさの化粧は止めにする　枯楢
毎日のお祈り化粧かも知れぬ　道子
子を二人育てる為の厚化粧　兼治郎
もう少し女でいたいうす化粧　凡太郎
化粧して用もないのに町へ出る　ちよ
化粧した野菜は買わぬことに決め　正坊
南方の女の化粧ルージュだけ　義美
花道がも一度欲しい化粧する　虹汀
控え目な化粧も目立つ新入社　正敏
お白粉ののりが悪いも歳のせい　春日
ポスターのモデルが睨らむ化粧品　幸一
初化粧父も娘に目を見張り　ろ亭
化粧水残したままで妻が病む　明水
母さんは明治を生きたへちま水　有人
胎動に化粧も地味に成って来る　右近
再会へ炎を秘めた薄化粧　胡頽子
健康色どんな化粧もかなわない　景子
何時までも綺麗で居たい老いのパブ　ひで
清潔な化粧で並ぶ入社式　重人

止り木で化粧くずれの愚痴を聞く　たずる
和解して女は明日へ薄化粧　実男
淑やかに白衣の天使薄化粧　豊
七五三神も微笑むうす化粧　たかし
齢つつむ化粧のうしろ隙がみえ　ゆう也
お別れへ花に埋れた薄化粧　勝美
サービスの化粧結局高くつき　保夫
口紅は娘のお古で足りる妻　弘朗
湯上りの化粧に満足塗るおんな　洛酔
子を置いて化粧して出る夜の戦さ　佳雲
そのままの化粧で四度の色直し　素秋
佳
寡婦強く生きてく夜の化粧する　〆女

霊峰の墨絵に残す雪化粧　どんたく
化粧品男が買うている平和　悠泉
悲しみを化粧で隠しとおせるか　文平
名優の化粧は手と足念を入れ　規不風
人
五十には五十の化粧があると妻　素身郎
地
化粧する女の真剣さに見惚れ　綾珠
天
化粧せぬ母を一番好きと言う　美乙女
軸
絵心もみせて女のする化粧

坂

香川酔々選

長崎の坂で異国の風に会う　正敏
見栄一つ捨てて気楽な女坂　英子
出足だけ好調だった登り坂　赤木和子
肩書きが取れて男の下り坂　美乙女
母負うて坂の向うの海を見に　規不風
祝日に旗を絶やさぬ坂の家　登美也
ここからが真価問われる汗の坂　春日
心臓が歳を教えてくれる坂　宵明

馳けっこの孫が手を振る坂の上　本蔭棒
荷を引いて浪華の坂で今に見ろ　いつを
あらためて坂を振り向く老眼鏡　きみえ
南無大師杖をたよりに登る坂　天彦
あこがれの女が住んでた坂の上　ひで
すれちがうバスの挨拶できぬ坂　古都路
坂の名で民話の恋が語られる　文平
いいことがありそう坂は春霞　重人
九段坂母の涙はまだ涸れず　ふみ
木洩れ日の坂に思い出尽きぬまま　カズエ
坂道を顔すれすれに老いの杖　昭子
ユートピア目指して越えるめおと坂　浪速子
本堂から読経降り来る坂参道　素秋
坂道で情けを拾う試歩の杖　寿
子ら育ち男は孤独の坂下る　与呂志

日の当る坂道恋の花が咲き　幸泉
老いの坂歩幅合わせてくれる人　ゆう也
きついでしょ坂で肥満はねぎらわれ　兼治郎
妻連れてこれが限度と思う坂　虹汀
ハイキング蕨がこの坂登らせる　木魚
頂上でいい汗妻と笑い合い　里風
坂道をよく来たなあと羅漢像　博友
産土の神おわします坂の上　多賀子
故郷の見えるこの坂登らねば　弘朗
坂越すと鼻をくすぐる梅の里　かすみ
坂の下松ぼっくりを待っている　枯梢
佳
柾下駄の真心受けて老いの坂　キミ
坂道に来てそれまでの汗を拭き　素身郎
彼には彼僕には僕の坂があり　七面山
ケーブルを嗤う男の登山靴　優
また星がむこうに逃げた坂の上　四郎
人
ゆっくりと苦もなく遍路坂のぼる　三吉
地
尾道の坂に沈んだ鐘の音　佳雲
天
織田作を口縄坂の下で待ち　景子
軸
女坂姉の涙がひかってる

初歩教室

題 ― 磨く ―

本田恵二朗

台所磨きをかけるよい女房　照子
（台所ピカピカにして世話女房）
一日の苦労を思い靴磨く　同
（一日の苦労いたわり靴磨く）
近眼のレンズを磨き間をもたす　幸泉
（老眼鏡ゆっくり磨いて間を持たせ）
父と子と母と兄弟磨きあい　同
（親兄弟励し合うて磨き合い）
大都市で男が男に磨かれる　實
（男同士ビルの谷間で磨かれる）
花となる芽木の緑を風磨く　同
（花の芽をみどりの風が来て磨く）
（花の芽を優しく磨くみどり風）
磨かれた靴へ妻との和解知る　春枝
腕磨くためと故郷あとにする　同
（山里よ磨いてくるよこの腕を）
磨いても鏡はくもる失意の日　勝美
（磨けども失意の鏡涙ぐむ）
叩かれて磨いた腕に嘘はない　同
ピカピカに磨いて靴を黙らせる　刀水
寝る前も明日に向って歯を磨く　同
（安眠の向うに明日あり歯を磨く）
瓦とも知らず教育ママ磨き　一止
鼠取らぬ奴が畳で爪磨き　同
（鼠とれぬくせ畳で爪磨く）
ほれあえるライバルあって磨く技　久子
（褒め合えるライバルを持ち技磨く）
相手知る心を常に磨いとく　同
（相手知る心を磨く常日頃）
口笛で釣竿磨く夫たのし　幸子
磨いてもダイヤになれぬ石かなし　同
（ダイヤにはなれぬ石だが磨かねば）
磨かれた廊下そろりそうろりと　節子
（磨かれた廊下白足袋気が疲れ）
傘寿なり磨いた艶の舞い姿　同
（傘寿舞う磨いた艶が底光る）
磨ききし腕が泣いてる失業者　達一郎
（失業へ練磨の腕が泣き濡れる）
研磨機の音絶え破産の憂目見る　同
顔よりも心磨くに骨が折れ　昭治
（顔よりも心磨けと神の声）
磨いても心の光り仲々に　同
（磨いても光らぬ心如何せん）
離婚から磨きのかかる女です　柳右子
（離婚して磨き直して艶光り）
ライバルのくれた磨きへ日日感謝　同
（ライバルがくれた得難い磨き砂）
庖丁を磨いて女城守る　あや子
腕磨く他人の釜の飯を食い　同
（他人の釜の飯で腕磨き上げ）
七光りで磨かないのが座を温め　柳五郎
（磨かなくてもピカピカと七光り）
磨かれた艶に年輪もつ旧家　同
（風雪に磨かれ旧家底光る）
家具磨く一心に老母家具磨く　みつる
（家具磨く老母ひたすらにひたすらに）
一心に竹刀を磨く息子いる　同
（元気一杯竹刀を磨く息子持ち）
美しいから磨く磨くから美しい　軒太楼
（美しいから美しく磨くのよ）
極楽に行きたいから仏像を磨く　同
（極楽へ行きたし仏像磨きかけ）
磨いたらさっさとはげた金メッキ　露芳
靴磨きお客の皮の質も褒め　同
（皮の質褒めほめ客の靴磨き）
新築を磨きこんでる祖母達者　貞子
磨かれていつか角とれ丸うなり　同
（風雪に磨かれいつか角がとれ）
玄関は家庭の顔と磨きぬく　ふみ

（玄関は顔だ磨いて磨きぬき）
磨かれた廊下に母の自慢あり　同
（磨かれた老母の自慢の日向縁）
身についた詩が個性を磨き上げ　胡頽子
出直しへ心謙虚に磨く汗　同
（振り出しに戻って磨きをかけ直す）
ミス日本磨き育って玉のこし　キ　ミ
（すくすくと育ち磨かれ玉の輿）
磨きます私の余生美しく　同
（美しく磨こう余生あけくれを）
面接へバンドの金具も磨いとき　兼治郎
歯を磨く魂胆何か今日デート　同
（歯を磨いてるぞ今宵はデートかな）
立志伝必ず出てくる靴磨き　三　男
下積みで磨いた芸にある光　同
（下積みで磨いた芸は老い知らず）
ライバルに射る矢は何時も磨いとく　同
（ライバルを射落す弓矢磨き上げ）
磨いても光らね玉になりはてる　寿　美
写経百巻心を磨く筆の先　同
（写経の筆先で心に磨きかけ）
掌中の玉と磨いて白無垢で　同
（磨き上げた玉に白無垢を着せる）
磨かれた技を秘めてる顔の皺　忠　広
念入りに車磨いて妻の里　同
コツコツと人間国宝まだ磨く　保　夫
駄々っ子をつかまえたようにカー磨く　同
来客へ夫の手も借る銀磨き　英　子
庭掃きのついでに磨く夫の靴　同
磨くのはボデーばかりでまたエンコ　同
なにくわぬ顔で女は爪磨く　山　久
七人の敵へと妻は靴磨く　同
あれ以来私好みに妻磨く　同
磨かれた石に他人の手垢みる　武　水
ドラマふと心を磨く言葉聞く　同
磨砂になる哲学がある教壇　同
母去んだ後のお鍋はピッカピカ　紀久子
下向きに燃えて女磨かれる　同
光らずも生涯磨き続けねば　同
磨かれた鏡あまりに律義過ぎ　ち　よ
磨かれた靴は揃えて明日へ向け　同
石でさえ磨けば床に飾られる　同
磨かれたのどで政治家嘘を言う　凡太郎
（百戦練磨の舌で政治屋嘘八百）
磨かれてなお磨かれて丸く老い　同
（磨かれて磨き抜かれた老い平和）
磨かれているとも知らず腹を立て　同
ライバルへ一矢報いる語を磨く　芳　水
徒弟から磨いた腕にそつがない　同
嫁の愚痴磨くガラスに拭き込まれ　同
ふるさとに心を磨く湖がある　寿　子
売り言葉磨く必要ないだろう　同
磨き砂で心の錆はおとせない　同

（恵二朗短信）

あなたの肉眼と心眼とで見える限りのもろもろを句で描写して見る。たとえ失敗作となっても構わない。それはあなたの人格向上に屹度プラスするであろう。

題―**人気―6月20日締切**（8月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
㊥七一一　**本田恵二朗**

◇

川柳塔社常任理事会（5月2日）

出席者＝栞・薫風・形水・水客・紫香・潮花・太茂津・鬼遊・柳宏子・敏・重人・笛生・寿馬・史好

〈議事並びに報告事項〉

★いちご狩吟行、大盛会に無事終了。昨日のきょうで余韻未ださめずの雰囲気。何かとお世話して下さった笛生さん有難う。

★来年は川柳雑誌創刊から数えて六十周年に当る。寿馬氏より記念行事について有意義な提案があり、今後、常任理事より案を持ち寄り検討を進めることにする。（史）

■**6月**の常任理事会は**1日**（水）

田中淑子さんを偲ぶ

白岩文衛

4月15日、豊中市旭丘団地の第一集会所で同人田中淑子さんの葬儀がしめやかに行われた。昨年5月、吐血して救急車で長堀病院にご入院、胃の全摘手術をされてから、わずかに11ヵ月、亡くなられた日は、53回目の誕生日の翌日であった。

田中淑子さんといっても、塔の同人・誌友の中に、その名を知る人はほとんどいないであろう。彼女が川柳を友となされたのは、不治と宣告されてから亡くなられるまでの、一年にも満たぬ月日であり、しかもそのすべてが病床の上でであったからである。水煙抄、愛染帖に句が載ったのも、今年の2月号から4月号までの、たった三月であった。

老父母に吐血は言わず入院す
父母にうく肌傷つける五十二で

彼女の句は、心に感じたことを、そのまま詠う素朴な句である。そしてそれは、苦しい病中吟であるのに、少しの暗さもない。これは、くったくがなく、明るい、生来のご性格からのものであろうが、又、夫や家族を信頼しきって、心まですっかり預けていらっしゃる安心立命の爽やかさからでもあろう、と私は見させていただいていた。

夫の田中正三氏は、淑子さんの命があと数ヵ月のものと聞かされた時、きっぱり会社をおやめになり、彼女の最後の日まで一日もそのそばを離れられなかった。そして、ともども川柳に熱中された。「家内も、僕も、川柳いっしんで、そのことばかり話している」と言われた、そんな夫婦のあけくれであった。

回復期ロうるささもよみがえり
似顔絵が似すぎて唯今おかんむり
やめている筈のあなたに煙草の香
まぼろしの恋の相手と逢うテレビ
川柳を覚え病床また楽し

一度退院なさり、家で療養なさっておられたこの頃が一番楽しい頃だったのであろう。句が溢れ出てくるというふうで、ご家族や私と川柳談義の花が咲いたのもこの頃である。その頃、盛んに時事吟を詠まれていた。時事吟といっても川柳でなければならぬ、スローガンやプロパガンダに留っていてはならぬ、などと私が理屈を言ったり、時事吟は命短い文芸だ、などと言ったことも覚えている。

虫けらのように炭住見捨てられ
マル優で釣られて網をかけられる
政局を刑事被告に問うニュース
オイコラと怒られそうな内閣で

病状が悪化して、再度入院されてからの二月号愛染帖に、

川柳を理不尽を斬る剣とし

の句が載っている。文芸価値が低いと言われようとも、消える句とさげすまれようとも、世の理不尽に、私は、斬りつけずにはいられぬ、という、どこが病人かと思われる激しい気魄に私は仰天し、深く反省させられた。川柳は、身辺瑣事を巧みに表現して足れりとするレトリックではないのだ、心に燃えたものをまっ正直に告白する小さな詩なんだ、と柳歴一年にも満たぬ淑子さんに、私は川柳の原点を教えられた。

草の芽が出たぞ　おしっこさせながら
薫　風

一番尊敬していた薫風先生の、大好きだったこの句を抱いて遠くへ旅立たれた淑子さん。どうぞ安らかにお眠りください、と今も涙する私である。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

集録・香川酔々

■第15回東洋樹賞の贈呈式が5月8日神戸福祉センターで行われた。森中恵美子さんの栄誉をたたえたい。

■時の川柳社では第3回ときせん賞として、卜部晴美さんの「花の季へ言いたいことも溜めておく」準ときせん賞として、和田恭子さんの「闘いの刻はきざむな花時計」酒井正純氏の「ひとりにはひとりの幸よ雲だるま」を発表した。

■第13回紋太忌川柳大会が5月22日兵庫県福祉センターで盛大に開催された。

■名古屋川柳社では、57年度第七回年度賞一賞作品として内藤乱氏の「笑ってるうちに残高零となる」小島悦生氏の「てふてふと書きたい春の蝶といる」を発表した。

■うめだ番傘創立35年・川柳歳事記発刊記念川柳大会
日時・昭和58年6月12日10時開場
会場・大阪科学技術センター8F大ホール
地下鉄（四ツ橋線）本町駅下車27・28番出口から北へ徒歩3分（西梅田駅から乗車5分）
祝辞・礒野いさむ　藤原みてい
歳事記読後感・神谷娯舎亭
亀山恭太
宿題
続く　志水浩一郎選
操　田頭　良子選
暗示　中田たつお選
シーン　森　東馬選
たいくつ　庄司登美子選
流れ　久保田寿界選
ユーモア　鈴木丙午郎選
指　田向　秀史選
この町　室田　千尋選
恩　西尾　栞選
摑む　古下　俊作選
特別宿題・船出
奥田　白虎選
各題2句・締切り12時
席題なし。特別宿題は5月15日までに事前投句（欠席投句拝辞）
会費・四〇〇〇円

■訂正　五月号の水煙抄中44P下段草川堕駄とあるは草刈堕駄の誤りに付き訂正いたします。

▽同人・柳友消息△

▼森田カズエさん（奈良市）春の叙勲で勲六等瑞宝章を受章された。ご同慶のいたりである。

▼宮口笛生・村上春巳両氏は5月5日奈良番傘35周年記念川柳大会の席上、三十年余に亘る奈良県下の川柳活動の功績により表彰された。

▼青戸田鶴さん（米子市）の御令兄松本よう氏が、今回の地方選挙で、めでたく米子市長に当選された。

▼八木千代・林瑞枝さんほかの女性同人の御活躍で「義方川柳勉強会」がスタートした。会員数38名の由。今後の御発展を切望する。なお来年は、全日本川柳大会が米子市で行われる予定で、大張り切りの模様である。

▼両川洋々氏（鳥取市）合同句集「ふうもん」発刊記念川柳大会も大盛会のこと本社へ報告された。

▼林瑞枝さん（米子市）松本よう氏の選挙応援で、八木千代さん、雑賀美世さんはじめ、大忙しだったとのこと。松本氏の当選で、涙、涙のうれし泣きだったとのこと。編集部も共に万才。

▼鈴木節子さん（大阪市）の御母堂4月18日逝去なされた。行年86歳。合掌。

▽本社書信拝受△

▼山内静水・栂みどり・竹内寿美子・堀江正朗・芳子奥山美智子・石垣花子・竹中綾珠・尼緑之助・岩本雀踊子・藤井明朗・本間満津子のみなさん。

▽句会案内△

■菜の花句会
時・6月10日（金）夕6時
場所・八尾神社境内西郷会館（近鉄八尾駅下車）
兼題＝孔雀・肩書・船・乱れる・卵

■南海電鉄川柳部
時・6月23日（木）夕6時
場所・南海会館ビル本社地下食堂
兼題＝初辰・ラッキー・お守り

■南大阪川柳会
時・6月19日（日）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題＝雑用・地味・ずるいゼニ（銭）

■東大阪川柳同好会
時・6月25日（土）夕6時
場所・下記へ変更。東大阪市社会教育センター（近鉄布施駅下車北へ5分）
兼題＝アイディア・アンケート・エチケット・スクラム

■駒つなぎ川柳会
時・6月27日（月）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題＝魂胆（こんたん）
老練・効く・脚

小西無鬼遺句集

『わらじ酒』出版記念本社五月句会

58年5月7日・なにわ会館

丹波篠山の地に川柳を育て、美事な川柳の花を咲かせられて一昨年5月21日物故された小西無鬼氏の遺句集「わらじ酒」の出版記念句会は、篠山から奥様の小西冨士子さん、ご子息の康三氏夫妻はじめ遠山可住、北山越山、酒井ひか平、仲井素水、辻文平、川原みのる、脇田米朝、平野百合子の皆さんをお迎えして盛大に行われた。

婦人友の会を通じて篠山川柳会とは三十年近いおつき合いという潮花氏が無鬼氏の想い出を語られる。「朝からでも冷や酒をのんでおられたが、健康には気を使い、胃や肝臓にいいからと味噌汁と卵は欠かされなかった。しかし若い時は酒より甘いものが好きだったようだ」「51年入院、2ヵ月ほどで退院、静養につとめられ52年10月、兵庫県ともしび賞を受賞された。その後、病状が悪化、周囲の者が入院をすすめたが頑として断られた。入院したら川柳と縁が切れるからと。」

長い交友を通じてのエピソードの数々は、川柳を愛し、酒を愛した無鬼氏の面影を彷彿とさせるものであった。

栞主幹の祝辞、冨士子さんに花束が贈られムードは最高潮。最後に小西康三氏が謝辞を述べられた。「父は路郎先生の教えを受け、終始一貫、人間陶冶の川柳に打込み、〝俺に似よ俺に似るなと子をおもひ〟の句を額にして居間に飾って日夜川柳に励んでいました。終世、川柳を愛し酒を愛し、その合間に仕事をしていたのではないかと思う人生でした。きっとあの世でも路郎先生を囲み句作の毎日を送っているのではないでしょうか。或いは今、会場の片隅で涙を流しながら眺めているかもしれません。」

川雑の「おしどり訪問記」の取材に潮花、光輪の両氏が篠山に行かれた際、写真担当の光輪氏が無鬼氏から頂いた〝反省のここで謝ることにする〟の軸が飾られ、披講も予定時間をオーバーしがちになる。

今月の月間賞は岩本雀踊子氏が獲得。

初出席は河村日満（鳥取県）土居耕花（岡山県）牛尾緑良（海南市）磯野与志（西宮市）の皆さん。

（史好記）

（受付—与呂志・重人）

（進行—天笑、記録—鎮彦・健司）

出席者—与呂志・吐来・薫風・寿馬・鬼遊可住・冨士子・康三・亜矢子・古都路・重人勝・小路・岳人・太茂津・水客・紫香・潮花寿美・緑良・兼治郎・素水・越山・日満・みつ子・鎮彦・綾珠・滋雀・勝美・蕉露・右近栞・狸村・米朝・百合子・雅風・耕花・与志ひか平・文平・みのる・満津子・道子・春江三十四・はつ絵・泰子・トメ子・山久・酔々景子・凡子・柳伸・旋凰・千万子・喜風・春蘭・文秋・白水・射月芳・柳宏子・度・形水冬葉・白兎・萬的・史好・勝晴・規不風・天笑・浩一郎・悦郎・智子・凡九郎・風童・頂留子・光輪・雀踊子・健司・三男・英子・寿子・和友・月子・一二三・弘生・洋敏・楓楽

席題「遠回り」　土居耕花選

川柳が抜けない日には遠廻り　トメ子
相合傘たたみたくない遠まわり　楓楽
過去の罪ときどき疼く遠回り　勝
遠廻りいやで睡眠薬を飲み　蕉露
遠回りやさしい風に逢いそうで　月子
遠回りしたい日も磁石北を指す　水客
遠回りその下積みを認められ　道子
それなりの策を秘めてる遠回し　百合子

すばらしいバラに出逢った遠回り　道子
駅までの時間を稼ぐ遠回り　勝美
遠回り女ひとりへいい月夜　潮花
遠回り高鳴る鼓動整える　米朝
遠廻りしても女房がついてくる　洋敏
遠回りして来た訳は伏せておく　滋雀
辻褄を考えている遠回り　吐来
遠回りしても馴染みの店に行き　酔々度
あの女にあえそうなので遠回り　道子
遠回りして停滞も知らず着き　重人
遠回りしても会いたい人がいる　英子
サラ金の前避けて行く遠回り　天笑
したいことぜんぶしてきた遠まわり　三男
遠回りしただけ錬れたと思っとく　小路
指切りをしたばっかりに遠回り　寿子
遠回りおんなの地図をはみ出さず　白兎
花の咲く塀があるので遠回り　緑良
遠まわりそれも楽しいフルムーン　英子
ミヨみゃんと一緒に帰る遠回り　度
裏通りをぬけて工事場に突きあたり　山久
ほら月があんなにきれい遠回り　右近
遠回りですと三浪アルバイト　満津子
遠回りして送られるおぼろ月　狸村
泣き顔を見せたくないと遠回り　規不風
ゆっくりと遠回りして無事に老い　白水
いつまでも歩いていたい遠回り　浩一郎
遠回りして検問にひっかかる　度
遠回りとおまわりして恋実る　喜風
顔の効く酒屋へ友と遠回り　鬼遊
極楽と決まりぶらぶら遠回り　雀踊子
遠回り女の嘘をきいてやり　春江
遠まわりしてれんげ草摘んでいる　頂留子
遠まわりしても悔いない父の靴　百合子
遠回しに言うから焦るプロポーズ　滋雀
遠回りやっと仏の目に出会い　天笑
遠回り酒にまつわることばかり　鬼遊
花好きが遠回りするさつき展　智子
言い訳を考えている遠回り　泰子
たこやきのおいしい店へ遠回り　白兎
逆ろうてみる気になった遠回り　浩一郎
遠まわりしてアリバイを考える　寿馬
医学部を出て小説を志す　文平
酒瓶が空になってる遠回り　可住
遠回り確かに春を見とどける　耕花
人妻と少し遠いい道を選る　栞

席題「焦点」　北山越山選

焦点の合わぬ話も左派と右派　可住
焦点の椅子へ女の意地をかけ　浩一郎
焦点を絞ると花が開きだす　頂留子
押せば引く焦点ぼかす古狸　素水
点と線焦点絞ってホシを挙げ　雀踊子
焦点の死角で長い舌を出す　綾珠
焦点が決まった途端泣きだされ　吐来
孫を見る瞳に焦点などはなく　三十四
お祈りをすると焦点見えてくる　鎮彦
焦点をまっすぐ切った飛行雲　寿馬
焦点を心得ている時の人　酔々
焦点をぴたりと合わすエンマさま　蕉露
馬鹿チョンのカメラ焦点気にしない　米朝
焦点を合わせて丹波のわらし酒　右近
恥らいも無く焦点に立つ女帝　小路
焦点をはずしぼちぼちくる無心　日満
銃口のまん真ん中に的がない　三男
焦点が呆けているから美人です　耕花
焦点の金の話が煮詰まらず　規不風
焦点を変えてばかりの女運　重人
焦点をぼかし世間をまるく生き　白兎
意識して敵の焦点から逃げる　柳伸
焦点をあわせて虹を見失い　勝
見物のピント集めているピエロ　三十四
コンピューターなら焦点すぐ見つけ　水客
外堀を埋めて焦点ぼかしとく　吐来
肚覗く気か焦点を窒される　可住
焦点は一つ噂を聞き流す　楓楽
焦点をぼかして橋を渡りきる　百合子
焦点は寄付と決まって座がしらけ　可住
焦点を合わすに皺が多過ぎる　日満
焦点を非行にしぼる愛の鞭　潮花
焦点を逸らせば嘘が見えてくる　道子
マスコミの目は焦点を逃さない　和友
七人の敵焦点がみんな消え　ひか平
焦点は空ろ勝者の腕を見る　英子
焦点をしぼると笑う母の顔　与志
焦点の合わぬ羅漢にある温み　滋雀
焦点を合わせて文珠の知恵になる　勝
鑑識が焦点きめてきた指紋　滋雀
焦点は一つ主張は曲げられぬ　ひか平
セクシーなポーズ焦点目をつむり　悦郎
焦点の糸にもつれた夫婦風　満津子
焦点がピッタリ合うた一目惚れ　越山
焦点が合うまで心許さない

兼題「内助」　酒井 ひか平 選

背水の陣切り抜けた日の内助　寿子
夫が世に出ねば内助も表れず　文秋
栄光の陰に内助の母と妻　貞子
内助ちと行き過ぎました寺参り　みのる
内助の功言えば稼ぎが足りぬとか　赤木和子
黒枠の妻の内助を説く和尚　森脇和子
ふり向けば何時でも其処に妻が居る　笑女
一日も遅刻をさせぬ妻がおり　越山
喜んで男子厨房に入る内助　史好
ペンとれば何と素敵になる内助　文平
パチンコで稼ぐ内助の妻もいる　勝晴
黄門さん内助へアッハッハと笑い　萬的
神前へ貴方の内助頼んどき　冨士子
内助まだ思いいたらぬ幼な妻　洋敏
民話狐の内助が生きている故郷　度
この健康保つ内助のことにふれ　天笑
ボス猿の内助は蚤をとっている　規不風
節くれた指が内助を物語る　春江
馬買って下さるほどでないが妻　鬼遊
内助の功なんてワテ等は嫌だっせ　凡九郎
布施買収内助の枠を踏み外し　素水
ダルマの目内助の功を知りつくし　重人
ささやかな黒字内助のごほうびに　はつ絵
美しい内助で磨く朝の靴　浩一郎
お隣りがいつも頭に居る内助　柳伸
美人の嫁はんも内助の一つなり　栞
割烹着内助の晴着かも知れぬ　柳宏子
どん底で妻の笑顔にたすけられ　三十四
拝みたい気持ちで妻の金を受け　滋雀
ぼろくそに言わせて夫を立てている　道子
半分は妻の内助のこの栄誉　千万子
一豊に見せたい妻が僕に居る　潮花
泣きそうな顔で内助の賞を受け　可住
顔色がよいのも内助の功にされ　天笑
翔んでいる妻で夫の市場篭　寿美
陽の当る場所で内助がかしこまり　天笑
内助の功しばし位牌と対話する　凡子
陽の当ることを信じている内助　柳宏子
売れてきて内助が鼻についてくる　洋敏
ひっそりと一人泣きたくなる内助　潮花
年上の内助でかゆいとこがない　柳伸
凧あがる紐は内助の妻が持ち　可住
内助いま花を咲かせたわらじ酒　ひか平

兼題「髭」　遠山 可住 選

三代の養子の髭が皆ちがい　森脇和子
髭面の似合う名剌に画家とある　赤木和子
気にしてるあいだは髭も似合わない　文秋
髭のない易者が頼りなく見える　浩一郎
はやそうと思った髭でない乞食　兼治郎
髭さんと呼ばれ婦人に持てること　ひか平
弱虫の夫で無精髭が似合う　文平
無精髭のびて病人らしくなり　与志
言いわけがとても嫌いな父の髭　英子
平凡な顔立ちだから髭が生き　狸村
童顔を髭に隠して肩を張る　旋鳳
髭のある男に一目置いている　智子
聞き役にまわって髭に手を当てる　水客
子育ての寡婦にうす髭のびている　はつ絵
年金の暮しのくせに髭をたて　栞
生きている証拠に髭がよく伸びる　智子
太学で漫画を読んで髭が生え　射月芳
髭を剃り落として悪女から逃げる　浩一郎
元帥の髭は戦争しか知らぬ　百合子
猫の髭ぬずみ逃がした穴で悔い　越山
子が好きでこどもが居ない叔父の髭　紫光
偉いとは僕は思わぬ父の髭　耕花
その先を考えている猫のヒゲ　千万子
髭半分剃ってたとこで原が打ち　小路
片手錠髭のあるのが犯人で　蕉露
プライドと髭が邪魔して孤独で居　素水
いかめしい髭を生やした魚屋で　勝晴
岩風呂にはいると似合う無精髭　耕花
髭ピンと明治が生きている気骨　滋雀
のんびりと髭を剃りたくなるダルマ　重人
髭生やすだけを周りが騒ぎ立て　道子

小西無鬼遺句集
「わらじ酒」
□ 序文・題簽　西尾　栞
□ 函入　二百六十頁
□ 頒価　二千円（送料共）
〈申込先〉兵庫県多紀郡篠山町小川町一
小西冨士子
☆本社でもお取扱い致します。

他愛ない顔で寝ている昼の髭　寿馬
女にはとても優しい髭である　鬼遊
本当に剃るかとほめる散髪屋　越山
大好きな髭がちょいちょい浮気する　柳伸
部下出来た時から髭を蓄える　旋鳳
大将に髭が無かった負け戦さ　寿馬
髭おいてますます父に近くなる　日満
髭置いて妥協に遠い口を利く　水客
答もうはっきりと出た髭を撫で　吐来
頭禿げていよいよ髭を大事がり　可住

兼題「少年」　橘高薫風選

少年に軍靴はかせた傷深し　楓楽
少年よ進め地球は自転する　悦郎
鯉のぼりスーパーマンになる少年　泰子
少年と歩く少女の顔をして　赤木和子
少年に信号のない道標　花梢
少年の夢さざ舟に乗っていく　度
少年の目に原色が多すぎる　一二三
砂利っ児に鍵っ児末は何になる　素水
点取りの大志を抱くすべも無し　みのる
みな同じ卒業証書持つ少年　〆女
少年がすぐにお金のことを言う　史好
かばい合う少年の眼は叱られぬ　潮花
へのへのもへじ書く少年にある主張　水客
少年の父語るとき目が燃える　滋雀
少年のしあわせ父がまだ恐い　日満
紅顔の美少年とはつい会わず　春江
面とれば汗一ぱいの美少年　兼治郎
少年の笑顔こぼれているグラブ　山久
盲導犬少年の声凜として　みつ子

少年は少年らしく礼をのべ　光輪
新聞の少年母と明日の夢　喜風
少年の真心をかう羽を買う　日満栞
羊飼いの少年になりたいと思う夕陽　綾珠
少年の大志は逢う度変ってる　浩一郎
UFOを見たと少年譲らない　浩一郎
アフリカの地図を少年離さない　可住
冒険野郎まだ少年の瞳をしてる　史好
少年倶楽部は戻ってこないちぎれ雲　可住
少年のベッドは宇宙船になり　三男
裸婦像の前を少年素通りす　与志
灯台へ少年の瞳が蘇る　泰子
馬に乗る少年に会う軽井沢　鬼遊
裸婦を見し少年が野を疾走る　勝晴
大それた少年金を借りに来る　洋敏
少年の主張殿下がうなずかれ　小路
髪染めた少年戦争映画観る　勝
金を落として少年梅田まで歩く　緑良
少年のスタート一線だと信じ　史好
デラックスな机に少年負けるなよ　岳人
少年の腕細くとも沖に出る　薫風
ボーイスカウト団長さんのよい白髪

兼題「晩酌」　正本水客選

晩酌へやれやれという顔の父　貞子
晩酌に酒豪寂しく齢を知る　〆女
晩酌へ下地があったらしい唄　みのる
働いて熱い銚子が待っている　風童
晩酌へ今宵は妻もむつもり　天笑
カンピンで父の晩酌買った日々　寿馬
晩酌は長男の嫁いける口　冬葉

晩酌はなぜか相手のいらぬ酒　千万子
下戸が来て晩酌ぬける連休日　光輪
晩酌へなんでも話す妻が居て　紫光
パッと帰りパッと晩酌パッと寝る　与志
晩酌はそろそろビールに切りかえる　勝美
晩酌に友連れて来て慌てさせ　綾珠
晩酌の父を家族の灯が囲む　射月芳
晩酌で今日のストレス流し込み　白水
後一本欲しい肴を賞めておく　吐来
晩酌に妻の機嫌がすぐひびく　文秋
子らが寝て晩酌静かに止めにする　与呂志
晩酌の肴に明るい話題選る　楓楽
長男と晩酌をするゆめを描く　はつ絵
晩酌にカラオケがつく里帰り　洋敏
豆乳にしばらく晩酌かえましょう　景子
晩酌へ末っ子だけが相手する　与志
一合の晩酌で足るお人好し　浩一郎
晩酌をやめると妻がさみしそう　満津子
晩酌の機嫌に末の子が座る　紫光
晩酌のムードこわした電話ベル　兼治郎
晩酌もはじめのうちはついでくれ　度
働かぬ日の晩酌は酔うてこず　悦郎
晩酌もやせる薬もやめられず　柳伸
晩酌代だけ稼いでることになり　可住
晩酌がうまいまだまだ働ける　楓楽
晩酌へどっかと父の座り場所　滋雀
晩酌をせず寝た父の身を案じ　兼治郎
晩酌へ少し自惚れやすくなる　文平
晩酌へ外からの酔持ちかえり　三十四
晩酌の父に孝行したくなる　雀踊子
晩酌へ元の二人になる夫婦　水客

花地図壇

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。

（整理・香川酔々）

南大阪川柳会　中川　滋雀報

ふところの軽い女は騙しよい　千代三
三面記事軽いいのちを見せつける　智子
尻軽く動けば丸くなる世間　凡九郎
老いの愚痴又かと軽く受け流し　勝美
走馬灯くるくる軽い罪を追う　滋雀
お伽話のつづらは軽い方が良い　綾珠
軽口に五寸釘打つ耳がある　雅風
発車ベルだけが記憶に残ってた　酔々
懐しい記憶が住所録にある　浩一郎
尾をひく記憶が耳の底にある　雀踊子
忘れたい記憶ばかりが耳の底　頂留子
目撃者の記憶おぼろなモンタージュ　文秋
ぼんやりと記憶の中の亡父笑う　あいき
三歳の記憶に母が泣いていた　冬葉
都合よい時だけ記憶よみがえる　蘭
美しい母でありたい紅をひく　鎮彦
口紅をつけて少女も春になる　柳伸
口紅で変身少女からおんな　美房
愛冷えことさら口紅淡くする　節子
紫の口紅の出た昭和の世　春蘭
口紅へ遠い暮しの母子草　寿美
戦わねばならぬ口紅濃ゆく塗る　弘生
父帰るほほに口紅付けたまま　喜美子
相談をして決心を鈍らせる　柳宏子
決心を書く一行でよい余白　白兎
決心がつかず易者にみてもらい　凡子
決心がつかないままに敷またぐ　覚然坊
猫目石見てる決心変らない　度
人の価値ほんとに困った時見える　楓楽
困ったとそれは女のことばかり　慶三
そんな事困りますがと言う笑顔　儀一
先生を困らし責めをなすり合い　喜風
宿帳に困った妻と書いてやれ　善信

川柳翠洋会　山根いつを報

切札に妻が握っている手紙　いつを
角帽はフクちゃんだけに生きている　素秋
泥まみれ伝統守った甲子園　兼治郎
満天に胸をふくらせ星が降る　風童
どたん場を救ってくれた置手紙　綾子
入れものが無くて帽子に摘むよもぎ　泰子
文豪の手紙金の無心が書いてあり　美緒
損得を離れたところ友がいる　みつ子
水茎のなめらか過ぎる申訳　光子
遠隔の孫を思うて苺摘む　照子
伝統はこれからつくる床柱　宏子
損な目にばかり会う人だから好き　景子
火山灰西郷どんに降りかかり　酔々

米子きゃら木川柳会　石垣　花子報

乗換えの駅ここからの一人旅　なみ
一人来て終着駅の灯がにじむ　あい子
幸福駅のチャンスの切符が売り切れる　瑞枝
四季の花咲く急行の通過駅　花子
汐の香も連れて乗り込む浜の駅　美世
あたためた言葉をせかす発車ベル　日枝子
無人駅手まりが一つ誰を待つ　千春
終着駅へ途中下車しておくらせる　伊都
運のない同士おんなじ駅で逢い　千代

西宮北口川柳会　妹尾　春江報

ランドセル声が転がる朝の道　みつ子
氷雨降る朝を行かねばならぬ義理　日の出
山の朝　一味違う空気吸う　半歩
デジタルに追いかけられる朝の膳　圓歩
年寄りの早起き例外だってある　年代
雑踏へ今朝の意欲が流れ込む　〆女
春だよと庭の新芽もしゃべりだす　春江
おしゃべりの花を咲かせている平和　弘生
雛壇でおしゃべり出来ぬ位置に座し　きよ子
おしゃべりが自由にできる露地に住む　伊三郎
おしゃべりがやむと沈丁花が匂う　三笑子
肩書が重荷になって来た出世　紫香
出世街道　男に闇の道もある　宏子
年寄りも町へ出たがる春うらら　きよ子
おしゃれ気も妻にまかせるタイの色　隆子
ストレスが溜まりきれいな花を買う　笑女
春の歌　干す手が朝日に若返る　千子
彼岸来て阿弥陀如来も光ってる　静枝
それぞれに歴史を残し老いてゆく　いわる
雪おんな描くは岩田専太郎　伊升
離婚した友へ淋しい距離ができ　幽香
さくら前線余生に虹をかけにくる　千世子
あまり騒ぐと核が動くかも知れぬ　郁栄
会えずとも中国孤児に梅が咲き　水声

口紅を落せば唄う子守唄　文平
愛のチョコあげて一月経ったけど　薫風
ゴマスリのうまい奴だと平で居る　一郎
出世した仔猫リボンを結ばれる　恵
出世して花道歩く孤独感　キミ
出世せぬ似た者同士馬が合い　冬子
出世して戻る気で発つ無人駅　右近
出世街道吹くどの風も刺がある　はつ絵
上辺だけの出世と思うすき間風　文子
バイブルと疎遠になって出世する　堕駄

尼崎いくしま川柳会　黒川　紫香報

独り住む女の部屋が冷えている　美智子
姉さんのクリーム瓶がそそのかす　静夢
ときどきはいうこときかんラムネ瓶　かね子
美しい嘘で励ますくすり瓶　かすみ
古日記解いて当時を思い出す　すえ
日記帳涙のあとは閉じたまま　貞子
夜叉の面封じこめてる日記帳　晴子
恋人の名ばかり毎日書く日記　敏信
忙しいわりに書くことない日記　幸子
霜やけがブーツの中ではしり出す　君子
夜なべして昼寝をすれば世話はなし　千子
一本の傘から枯野が見えてくる　伊升
貢ぐだけみついで男頓死する　紫香
大根の太さの中のバラエティー　静江
針供養注射の針も鎮座する　美代子
公民館恋の仲人もたまにある　中石
頂上の坂はふりむくことばかり　年代
躓いた坂で女は強くなる　玉子
昼下りのノックは軽い方がよい　牧郎
冗談冗談強くいなして本音かも　春子
さんざんに世話をやかせた男運　伊三郎
若者のこだま返さぬ冬の山　かず子
梅が言う少し上手に齢とれと　薫風
炬燵から首だけ出してぼく留守番　保蔵
保釈金悪い奴には金がある　佳秋
子連れママ公民館でジャズダンス　美紀子
公民館で書展眺めていた出会い　郁栄
振り返る坂に両親いてくれる　定人

川柳塔からつ　浜本　義美報

伸べのべと今日も静かに慈雨が降る　虹汀
電卓を出して善意を疑われ　正敏
十日ぶりほどがほどよい他所の孫　四郎
つくせしも思うにならぬプロの道　捷治

南九州の旅　坂本　仙吉郎

ジャンボ機を降りてマイクロレンタカー
春雨に煙る城山涙あり
キビナゴに舌つづみうつ宿の膳
胸をつく薩摩は知覧鹿屋の基地
東支那海千貫平よりチラリ見え
薩摩路に地名ばかりの国分寺
高千穂の聖地は霧と鳥居だけ
青島で洗濯板のしぶき浴び
山越えてシャンシャン馬で鵜戸詣で
旅に出て心残りの句会あり

古雛に細き紅筆そっとさし　稜子
どこの子も心配かけて育ちおり　素石
百年祭みなと祭りの駕籠が来る　久仁於
漕いでいる方が金出す貸ボート　一竿
婦唱夫随呆けての後も名残りみせ　ちよ
一日を終えて明日へ灯り消す　紫泉
言うまいと思っていてもつい喋り　義美

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

免許証切りかえばかり乗りもせず　儀一
空手の免許もった嫁が来る　慶三
おそるおそる街にくり出す仮免許　文秋
能なしも免許のおかげ箔がつき　良京
金で買う免許に欺されてはならぬ　柳宏子
甘党というて左党にも顔を出し　三十四
甘党は敬遠される忘年会　白屯
甘党の父を見くびってはならぬ　雀踊子
甘党の使者なら遅い方がよい　度
甘党で女を口説くのが下手で　眉水
冬眠のリズムを乱すぬくい冬　美子
冬眠をさませと黄蝶飛びまわり　弥山人
冬眠の老いを揺さぶる二月の訃　滋啓
冬眠の土筆園児の歌に醒め　喜風
このままで冬眠したい羽根ぶとん　孤舟
冬眠を少し早める畦を焼く　鎮彦
冬眠のミミズを切った移植ゴテ　悦郎
民謡で故郷が知れた家出の娘　覚然坊
民謡にまんざらでない僕の声　恒明

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

胸算用する程票は集まらず　律子
集まってみれば花より団子族　独歩
鬼ばかり集めて桜七分咲き　観洋

一族を集め米寿の母すわる　松女
集会に女余裕のコンパクト　紫泉
当確に選挙区越えた人も来る　宗則
坂の上生きててよかった灯が見える　喜美子
日の昇る坂で男になる誓い　弘朗
エンストはおこせぬ冬の男坂　御前
気に入らぬ坂は登らず尾も振らず　みなと
坂道に点点点と椿散り　碧水
坂の上宇宙をたべてるテレビ塔　たけの
運勢ののぼり坂にも乗りおくれ　文子
とまらない若さ夕陽のなだら坂　車楽
大詰めの近い夫婦のドラマ坂　光枝
山門で仕切る世界が一つある　雄々
山門の草鞋仁王も持て余し　千秋
山門の仁王が邪心にらみつけ　しづえ
山門を素通りさせぬ糸桜　柳風
山門の禁制解けて酒色の香　寿朗
山門の縁の下から猫が鳴く　石花菜
夕鐘の山門いつかカラス鳴く　夕路
山門のもみじお経にそって舞い　笑王
山門をくぐればみんな仏の子　康子
山門に佇って古木の私語を聞く　寿満湖
山門の由緒テープで僧流し　おさむ
山門をくぐれば霊気が身にしみる　とめ子
短冊に実らぬ願い炎えている　あや子
短冊へ女の思いのありったけ　秋女
短冊にメニューをのせるラーメン屋　かつみ
沢庵の短冊も出る花見酒　民子
山門をお布施と酒がまたくぐり　布堂
山門も花も見頃と人溢れ　千枝子
坂を越すバトンタッチの子が居ない　菊枝
山門が浄土のオゾン吐いている　菩句

川柳わかやま　堀端三男報

花の寺一病持ちてすこやかに　信秋
自らを殺すと消える波ばかり　狂虎
波に乗る名誉の職が身に余り　豊太
子を呑んだ波の素顔は信じない　白光子
投石に動じぬ波を見せた池　彩魚
波除けの母へ甘えて打ち寄せる　光代
頑に生きて波にはのりきれず　桂子
老人で故郷守る過疎の波　文蔵
意気投合波長が合うて長話　栄美子
波にのるリズム知ってる母の箸　善太
荒波へ妥協赦さぬ舵をとる　登志代
にんげんを嘲う機械の音ばかり　幸
まさかから積木くずしの音がする　秀雄
指揮棒の先でひき出す夢の音　緑良
風の音散る花びらを憐れとも　正子
おぼろ月足音までも和ませる　信子
無駄のない音だ名人釘を打つ　太茂津
ライバルの足音やけに耳を衝く　照子
そうだったのか寝言から出た本音　きみ
ぶらぶらと煙たがられて古稀を生き　天彦
母に似た羅漢の一人に香を焚く　庄平
地球儀の何処かで聞こえる破裂音　和子
香煙を深い祈りが乱さない　武雄
事故係香煙の香に馴れて来る　千寿子
炭を焼く煙は謀反考えぬ　雀踊子
禁煙タイム鏡にもある裏表　凡九郎
出尽した思案煙草の煙追う　紀久子
野焼きする煙が春を呼びにゆく　三男
煙にはさせぬ主張をくり返す　寿子

ハワイ川柳ウイロー社　市岡暁舟報

片意地を張って世間を狭くする　嗣栄
角とれた人だが意地のある女　天心
意地張った後に虚しさだけ残り　歌子女
意地悪さいつも悶着引き起し　三十四
意地張って見たが妻にはかなわない　三石
底意地の悪さ死ぬまで直らない　梨花女
意地ずくで嫁と姑は黙秘権　雪女
老いたれど意地と度胸で世を渡り　公女
爺さんの意地は死ぬまで車椅子　拝山
意地張れば張る程四面楚歌の声　千代女
同情は受けぬと夫堅い意地　美子女
意地っ張り一人で相談まとまらず　万里歩
意地を張りついて行く旅日々楽し　蒼生
孫までも父に似ている意地っ張り　沙京
意地捨ててまるく流れて今日の幸　秀山
意地を出せもう一息だ白寿まで　紅渓
もう駄目よ意地では勝てぬ仲となり　玉泉
意地と意地男の世界無駄ばかり　高原子
良心はあれども意地でかぶり振る　狂山
意地捨てた彼女の心中涙あり　彩民
片意地で功成りとげて柔和なり　黄塵
前向きの姿勢で母は通す意地　健
意地捨てて真実一路に今日も生き　張賀
意地っ張り棺の中でもその顔付き　十吉
意地と意地火花散らした頃もあり　香夢女
眼鏡越し意地悪そうな眼がじろり　カロ女
意地強く世界に殖える反核派　虹宵
あの女意地は強いが恋にまけ　妙子女
喘ぎ行く意地の一生晴れ間なく　暁舟

川柳塔まつえ　恒松叮紅報

冬眠の蛙掘ったら春を跳ね　三和
新入の園児も跳ねる春うらら　愚童
跳ねる子にもて余し気味一年生　春梢
跳ね過ぎる女に迂闊な落し穴　多賀子
留守告げて忠実な犬は吠えつづけ　きみえ
留守襲う殺しのニュース独り聞く　正朗
鍵っ子へ一番星が話しかけ　鶴丸
良心の留守に巣作りした非行　芳枝
謙虚心包む誇りへ陽があたり　孝華
老いてなお昔の誇りは捨てられず　満江
誇るものなくても父の広い背　寿美子
誇り高き女で独身主義とおし　芳子
君と僕口約束でこと足りる　孤呂二
約束を果して肩を軽くする　舞吉
約束をさてしたものの気が重し　登美也
脇息が眠りを誘う爪楊枝　逓児
爪楊枝煮豆で財をなした人　壮樹
少しだけ女焦らした爪楊枝　叮紅

川柳しんぐう　川上　渓水報

手品師の鳩ポケットで拗ねている　大輪
運んでよい事早く伝書鳩　昌子
選挙前鳩派もタカ派も御国入り　正
鳩ポッポの石碑の周りに鳩が群れ　小四樹生
新宮で生まれて世界へ鳩ポッポ　民代
日本の良さしみじみと醤油味　渓水
醤油は父砂糖は母の甘い味　勇太
淡口の色が冴えてる京料理　金太
醤油で作る日本に四季の味　雀踊子
醤油と味噌に飢えてるパスポート　武雄
わんぱくの素足表まで追われ　まさ子
表から裏へ筒抜けして平和　テルミ

豪邸の表はいつも閉めてある　紫香
表から敷居が高い借りが有り　豊太
表から入るに義理が邪魔をする　白光子
先輩の足跡踏んで辿り着き　八千代
先輩の手加減しらず自惚れる　富子
先輩に信頼されている励み　登志代
実力のない先輩で忘れられ　博代
先輩が来て飲み妻をこき使い　十郎

川柳化粧櫓　植村客遊子報

予定表真白停年という余白　岳詩
もてるのが金とは寂しい酒を飲む　大鷹
大阪の灯みてから腹が減り　実男
俎板の音まで姑のリズムにて　白李
三面鏡女のぐちが今日も住み　葉香
うぐいすが手入れの悪い庭へ来る　紅月
叱られる僕へばあちゃん味方する　秋月
切り札のチャンス逃がした顔の色　礎石
酒のかん夫の加減が解ってき　さとる
古稀祝何がよいかと娘の電話　伊江坊
何もないけど優しさのある女がもてる　奮水
安らかな寝息へ母の手のぬくみ　秋信
どの児にもやさしい駄菓子を売る老婆　悲子
手の鳴る方へ行けば税金待っていた　越山
照れ臭いそんな気も消え寺詣で　永楽
チップではない仲居さん寄って来る　客遊子

駒つなぎ川柳会　小路報

新聞に出た一句から便りくる　花仔
朝刊の社説が僕に逆らう日　萬楽
待つ方がよいと律儀な靴をはく　頂留子
よく練った上の奇抜な策となる　天笑
盲点を働く切札をあたためる　柳宏子

愛されてからの女がよく眠り　信治
愛した日からポケットに涙つぼ　律子
盲点で朝のコーヒー飲む二人　史好
盲点を認めてくれる妻がいる　冬葉
入れ知恵をされ盲点をつく鸚鵡　育園
執拗に盲点をつく記者のペン　午代三
盲点をかばい合うてる春の宵　月子
盲点をつかんだ猿が背伸びする　柳伸
盲点をつつけば父に叱られる　信義
アイデアの奇抜を円くする　雅風
奇抜には脆い女の低い鼻　美幸
奇抜さも四月馬鹿だと流される　勝美
巧まざる嘘を奇抜な知恵にされ　蟻朗
人形が奇抜ではやるくいだおれ　一歩

佳句地10選（前月号から）

植山武助選

嫁ぐ日の心理を日記に刻んどく　道子
彼岸から絵具も明るい色となり　照路
桜咲く夢見疲れた北の海　盛桜
人事課のリストに首が載せてある　射月芳
評点をつけねば教師生きられず　文衛
ふと鬼がうつる或る日の三面鏡　右近
言い勝ってひとりの闇を深くする　楓楽
披露宴娘は遠い遠いとこに居る　求芽
七福神喧嘩する日もあるだろう　雀踊子
人生の裏を履歴書語らない　武雄

動物園選挙ポスター貼ってある　アキラ
影の構図へ真赤な色をぬる　白兎
原宿で誰も奇抜と見てくれぬ　酔々
四捨五入しても奇抜としか言えぬ　恒明
首出して猫と並んで読む朝刊　度
新聞の隅に小さな謝罪文　射月芳
しっかりしろ新聞で引っぱたく　翠公
東京へ翔ぶ一番で朝を読む　小路
ずるいずるい男を新聞紙で叩く　英比古
ビッグニュース隣の新聞目をうばい　春蘭
新聞を半分読んで乗る電車　健司
茶柱が立つ朝刊の良いニュース　浩一郎
求人欄じっくりと読む定年譜　重人
のぞき読みされてる新聞裏返えす　雀踊子
校長の願い無視した記事が出る　恭太
旅人に馴染めぬ土地の朝刊紙　覚然坊
古新聞懐しく読む大掃除　柳右子

川柳大阪　田中笑風報

ごますりを教えた奴に蹴落され　だるま
葦切りの行事も古し淀川原　二天坊
くちづけのあとの別れが惜しくなる　眉水
耳よりな話を聞いた散髪屋　重人
電話ベル鳴って散髪ほっとかれ　伸子
愛惜の渚でカラス恋語る　喜酔
早いもの雛壇飾る孫が出来　三千雄
お名残りの雪を降らせる二月堂　君枝
阪神の勝を信じてラッパ吹く　酔花
引越せば早速注文取りに来る　雅巣
適量を妻と楽しむ良いお酒　笑風
薄氷をうっかり踏んだ白い杖　希久志
まだ一寸早かったかな桜花　キミ
寝たきりの母が歩いた夢話す　和世
鉢巻で大売出しも活気づき　道子
ライバルの鉢巻敵もしめて居り　鉄心
必勝の鉢巻私も買って来る　景山
立退きに愛惜我が家振り返り　徳松
ボロボロの登山帽を捨て切れず　金太
亡き父の万年筆をまだ使う　敏
ロボットを部下に一人改札員　本蔭棒
やけ酒を叱ってくれた君の墓碑　洛酔
熟年の夫婦でぬくい日が続き　みつる
パチプロと釘師が火花散らしてる

菜の花句会　高杉鬼遊報

階段を登れば神に逢えそうな　糸葉
悪人の方が欠点詳し過ぎ　儀一
一本のさくら近所を春にする　美乙女
ポスターが招く秘境の赤字線　優
欠点が山ほどあって人間味　勝美
階段へミニ増えて来た春の色　みつる
薬になるお話やと聞かされる　凡九郎
ポスターに誘われ旅に出たくなり　綾珠
針持たぬ欠点ママの捨てる足袋　喜風
さくら見る風の噂はせぬように　柳伸
もろとけばしっぷくすりが役に立つ　古都路
酒値上げせぬ間に桜咲いておく　寿馬
元栓を忘れた姑のひとりごと　栞
階段を上ると賽銭箱がある　射月芳
いかなごがうまい桜が咲き初め　鬼遊
ガスタンクに石器時代の絵を描こう　雀踊子
二階から猫降りてくる客帰る　度
薬には詳しい人が病気する　悦郎
お白州で遠山桜ものを言い　蕉露
愛想ないポスターならば信じよう　幸生
ガス燈は港でけぶる方がよい　美幸
しいて言えばとのいすぎが短所かも　頂留子
ポスターは貼らすが支持はせぬ選挙　右近
血の巡りよくなるようにさくら咲く　酔々

川柳ささやま　河原みのる報

悔い一つひとつを消して遍路笠　文平
義理欠いた悔いがくもらす窓硝子　テル
悔んでも知らんと絵馬が風に揺れ　百合子
乳房が疼き水子に詫びる母　越山
出直しておいでと母は愛の鞭　和子
出直して負われてみたい母の背な　エキオ
老いらくの恋に出直す幸もある　房子
出直しを鉄の扉に告げて去り　とみ子
ポケットの石は誰にも覗かせぬ　久子
石頭撫でて世相についてゆく　ゆう也
故郷の石ころでよし農に生き　ひか平
禅寺の鐘のひびきを石と聞く　可住
代表者合鍵一つ渡される　千代子
真っ黒い代表もいる産油国　宗珠
代表をやってみたいが礼くれず　和人

勝山双葉川柳会　鈴木節子報

袋にも孫の笑顔が詰めてある　久子
春の彩車窓に映えて西下する　いくの
信頼仕合って迎えた金婚式　ハル子
一面の樹氷に冬の信頼が　芙佐女
信頼をされて背筋をしゃんとする　楓楽
信頼の目で捨て犬ついて来る　秋子
ダルマ落しのダルマは信頼しきってる　洋子
核兵器やがて地球を破滅する　喜美子
通りゃんせやがて私も地に還る　寿美

やがて嫁く娘に教えるかくし味　藤子
やがて来る男へ時計遅らせる　柳伸
流れ星やがては亡母にめぐりあう　田鶴子
遠い日の花の香りは忘れない　千里
遠い日のつづきがもえる茜雲　頂留子
地の果てに何か良い事ありそうで　いく子
遠い傷桜咲く度うずき出す　妙子
旧友と話すと遠くはない昔　智慧子
春の雲遠いところへ行きたくなる　智子
言いわけは聞いてくれない遠い海　節子

川柳後楽　井上柳五郎報

水割りのグラスに溶けた今日の汗　恒洋
水割りでちょいと女も仲間入り　隆
水割りのグラスに浮かぶ赤いうそ　哲郎
水割り浮かべて差し出す恋心　博友
酔い具合見てママ水割りを調合し　佐加恵
前歴のシミ人柄につきまとい　柳五郎
枯れて来た人柄纏め役につき　元一
お人柄言われて膝が崩されず　定平
一隅に光を当てたお人柄　和夫
電卓を信用しない五つ玉　草風
電卓を何回叩いても赤字　秋月
つつましく生きて電卓などいらぬ　玉水
愛される余生は呆ける薬持つ　胡風
胃薬も宴会場の供にされ　照路

山長川柳会　那須　鎮彦報

春間近母の出番で芽も揃い　朝雄
樹々の芽が春を彩どる支度する　桂
暖かい春陽を浴びて芽を伸ばす　忠
積雪の下で芽を出す福寿草　真由美
愛情で若芽を伸ばす親心　安弘
芽をつんで育てる鉢の苔厚く　轍守
春一番桜芽をふく通り抜け　彦一
小さな芽風波に耐えて花を付け　美昇
選抜にかける息子の芽を伸ばす　嘉道
愛らしいふたばがのぞくビルのカベ　恵子
逆光の中で新芽が光り出す　和子
心音と共に芽ばえるおもいやり　鎮彦
芽を伸ばす母の心は美しい

川柳高知　川竹　松風報

つきまとう蠅が心を尖らせる　竹萌
ウインドの盆栽初代の趣味と聞く　一二三
流水へ還らぬ島の風が哭く　広風
ベランダの洗だく物が踊る風　康子
妻という不沈空母に支えられ　三吉
一人旅静かすぎても寝つかれず　弘生
冒険の梯子静かに下ろされる　春江
人柄のまんまで老いる丸い背な　節子
笑われるから空想は秘めておく　青果
先生は神様だったその昔　佳風
初恋は先生でした古日記　菊野
表紙だけ変えて売り出す週刊誌　幸泉
甘いこと言われて後をついてゆく　岩男
うなずいて助言勝手に切り捨てる　春枝
素晴しい夕陽に嘘はよう言わず　松風

岸和田川柳会　植山　武助報

ふるさとの山が呼んでる挫折の日　ひで
旅に出て一寸派手目な化粧する　武助
母を呼ぶ声も空しく帰る孤児　甘平
呼ぶ声はただごとでない慌てよう　ゆづる
春が呼ぶ新聞が呼ぶ旅が呼ぶ　浪速子
呼び出しておいて役所は昼休み　射月芳
スムーズに呼べた二人のオイお前　操子
衣食住足りて化粧は派手になる　狸村
恥かしさ嬉しさちょっぴり初化粧　こう
つまらぬことみんな忘れる今日の空　さよ子
やりきれぬ心が影を蹴っている　冨志子
七十になっても無職と書き辛し　世界人
菜種梅雨もまたよし旅の湯に浸る　白光子

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

手造りの草履いまごろ美術品　敏明
ぶちまけて女の哀しさまた悲し　保子
幼な児に追われてスナックの灯が恋し　文子
るんるんを覚えて子等の仲間入り　恵美子
伸ばす手が星の寝床に届きそう　志保
あの人を待つ目に葉ざくら清清し　秀穂
子の成長待ったあの日は遠くなり　ふみ
過去の女に祝の席で向い合い　輝水
待つことのある倖せを抱いて寝る　英子
バーゲンを待って似合わぬ服を買い　ヒデ子
パスポート持たずに黄砂舞い降りる　歳栄
春が来て黄砂はじっとしておれず　鈴江
神様にもらった出会い逆らえず　清泉
出会いから骨まで濡れることもあり　民子
季節便空からゴビの砂をまく　美栄
父母の出合いを不思議とも思う　はるみ
黄砂降るあれは地球のもの思い　白汀

京都塔の会　松川　杜的報

指先が余った足袋でちと疲れ　紫香
妻が居て母が居て冬の灯あったかし　杜的
使われる身になり頭一つ下げ　花代子
菜の花の蝶へ浮気な蜂が来る　潮花
鏡また鏡ホテルに友さがす　和友

主婦の座へまだまだ正座しかできぬ　求芽
おだやかな流れへ投げる石さがす　明代
ばあちゃんの財布へ親も寄ってくる　春江
立ち読みの後ろゆっくり通り抜け　水客
卒業を祝い献立祖母がする　笛珠
飲み打つ買うみな卒業をした丸み　飛鳥
卒業へ帰郷が出来ぬ職が待ち　白渓子
卒業式我が子が大きく見えてくる　芳子
飾るものがない髭でも剃ってゆく　麗水
飾り棚旅の思い出一つ置く　孝江
十代の誇り原色で飾る　紅陽
霞か雲かさめやらぬ眼で雨戸くる　美穂

城北川柳会　神夏磯道子報

人生の標的時に見失う　三十四
雑音は聞えて来ない手話の愛　道子
植える場も無いと知りつつ花の苗　正之
議論には倦いて情がほしくなる　倫子
産声が生きる権利を主張する　ただし
なだらかな老いの坂にもうすい虹　テルミ
バラが咲く館は坂の上にある　美恵
金的を射止め池高凱旋す　午郎
土筆摘む時には母が居てくれる　晴子
坂道をころげて行きそな曽根崎署　重彦
標的をねらって一矢打ちはなつ　秀村
躓きつつ定年の坂登りつめ　頼一
細い竿神技なるや雀刺し　喜洸
人盛ん天の声等耳にせず　松太朗
病弱の妻の手白き花明り　新一郎
早起きの母の一日厨から　静子
子すずめが春の訪れ告げに来る　すみれ
2DK真直ぐ生きた証しです　利義
標的が大きく外れた我が人生　八重
古稀もなお琴習う手は夢を抱く　そとえ
猛犬注意やさしい犬が昼寝する　登志代
標的にされ騒がれてまだ嫁かず　右近
標的に向う老人武者のよう　茂樹
入社式もう標的を夢に見る　静歩
余生の標的川柳普及に打ち込んで　千世子
息切れを庇い合うのも老いの坂　星斗
もう愚痴はやめよう嵩む電話料　ふみ
上町のころんだ坂に青春譜　炉斉
封筒にもどしてからの物思い　婦美子
素晴らしい夜景は坂の上にある　笑風
落日に気だけがあせる老いの坂　悟郎
寄付金を済ませて寺の花ざかり　達一郎
標的を捨て左遷地になじむ日日　公一
打ち明けて見れば二人の思い過ぎ　満津子
ひさし振りですと選挙の話です　弘生

川柳大原　白岩文衛報

弔電を以下同文であしらわれ　巴子
娘を叱る亡母の口調になっている　みさえ
同じこと思っているか目が笑い　宮子
同じこと言うたら今日は叱られた　文衛
凡人でよかったまんざいおもしろく　万智子
花の宴みな凡人の顔となり　元江
陽の方へみんな傾く葱の列　やよい
指切りの瞳が旅へつきまとい　寿恵子
亡母の歳二倍も生きて母を恋い　寛平
カーテンを開いて春を招き入れ　いさむ
縁結び出雲の神も不公平　喜美子
年金でカラオケ買うてきた余生　みづえ
カラオケになって上座はほっとかれ　玉恵
カラオケに合せて亡父の灯がゆらぐ　朝代
新婚の時差ボケ今日もまだ覚めず　美佐子
ギリギリのくらしに耐える花を活け　はるみ
母さんのおんなじ顔で平和です　信恵
結納の日から重たい父の口　耕花

川柳たけはら　森井菁居報

おひなさまはるみもとなりにすわりたい　保育所はるみ
ともだちといっしょにうしろとびできた　保育所あきみ
ともだちが二つかおくれのプレゼント　幼稚園一美
じいちゃんのおはかでしゃしんとりました　小二華
とうさんがぼうずがいちばんいいという　小二方昭
ひなあられみんなと食べるからおいしい　小二純平
ヒナまつりメびなオびな笑ってる　小三美保
チョコレートじいちゃんにあげたがまだ食べず　小三紀子
お習字がすめばソロバン待っている　小五恵子
母さんがいきいきしてる台所　小五仁昭
高らかに校歌わたしがふるタクト　小五千恵子
期末テスト頼れるものは私だけ　中一紀
フィナーレの曲涙腺をもろくする　高一愛
荷を作る男結びに祈るのみ　静水
日めくりも駈け足となり昨日今日　房子
燃えつきた灰を明日の糧にする　鈍舟
マニキュアが私の指で嘘をつく　令子
いい日旅立ち嵐はいつかきっと来る　蘭幸
恋を恋うう紫の春の野辺　淑子
川は流れて過去を美しいものにする　笑子
わらべ唄春が垣根の外で待ち　節夫
父の背の温みを思う子を背負う　白狐
セーターの編み目編み目に妻が棲む　菁居
節一つない天井が佇びしい日　一路
子の顔をのぞいて夫婦和解する　比呂子

冠婚葬祭だけのふるさととはさみし　貞子

うみなり川柳会　**小林由多香報**

裏口で入学卒業まだねばり　静生
師弟愛枯れて卒業式が荒れ　洋々
娘も妻によく似て長い電話口　天人
電話では言え寸聞かれず恋はずむ　由多香
叱られる電話に椅子で反り返り　盛桜
まとまった話に電話笑い出す　熊生
敗戦が教科書までも痛めつけ　笑王
本当の痛さ葬式済んで知り　舟宏
五分五分の痛さあじわい仲直り　芳泉
闘病の痛みは言わず微笑まれ　豊生
誘うのは友だと少年Aの母　おさむ
誘惑の宴に陥ちた黒い記事　帆雀
春の日の誘いに乗ったつくしの芽　富美湖
出不精の女一人を花誘う　雅女
プライドを捨て職安の前に立ち　華子
質問に父のプライドせきばらい　豊一郎
蟻なりのプライド歩武の列でゆく　一止
プライドを捨てて人生軽く生き　希満子
プライドを捨てた花びらかも知れぬ　昌三
人生に卒業はなし今日を生き　正
学士証生かす職場にありつけず　雄人

尾浜川柳会　**黒川**　**紫香報**

公園も桜もお庭団地の子　土岐
花の下美人のような顔になる　江美
風のまま気のむくままの山頭火　昌子
カナリアも団地で肩身せまく住み　光重
人世は矢印通りに歩けない　佳秋
矢印を頼りつ抜けた知らぬ土地　夢之助
矢印の方向定まらぬ風見鶏　寧一
矢印を素直に信じ落し穴　すみ
告別式あの世の人へ矢印で　新吉
矢印のよこに三味線教えます　牧郎
新年度悲喜こもごもの顔になり　貞吉
うず潮を新しい橋一跨ぎ　いわを
見えそうでよかった昔のストリップ　清太
捨猫に慕われ辻を曲り兼ね　紫香

南海電鉄川流部　**広井すえお報**

新幹線出来ても渋滞まだ続く　綾珠
好き嫌い父の路線に気が合わず　東雲
マイカーを強敵にする路線バス　圭次
わたり鳥かえる路線に海の詩　しづ子
路線から兎飛び出す無人駅　儀一
主義主張いやな路線に矢を向ける　春蘭
路線からはみだしそうな子の育ち　山久
路線どおり行ったのに道を間違えて　圭水
春闘も安定路線で幕になる　さよ
我が路線宿命という枠の中　覚然坊
よっぽどの腹立ち路線変えている　花仔
日本を路線で結ぶ北南　勝美
傾いていてよ女は伊達好み　悦郎
伊達姿だから上手に欺される　雅風
短大卒求人欄はさけてあり　すえお

尼崎いくしま川柳会　**黒川**　**紫香報**

やり手でも少し荒いが玉に傷　すえ
雑兵に謀叛が少しずつ溜まる　郁栄
言い過ぎぬように言葉を少し溜め　かず子
俥屋が惚れた女に殺される　伊升
パトカーがバックミラーの中にいる　定人
花嫁の目録にある乗用車　晴子
残月へ何見やはった話しかけ　貞吉
火遊びの女が思う見きりどき　かすみ
なぞの微笑私には意地悪に見え　美代子
天文館薩摩隼人と酌み交す　佳秋
湯豆腐を手抜きと思うな世の男性　幸子
信仰かそれもよかろと医者笑う　かね子
卒業式烏ルックの母の群れ　美紀子
自惚れを飾る男のネクタイピン　君子
好きだった花を飾って母の墓　玉子
着飾ってほんねの吐かぬ場所にいる　年代
夢二絵のとなりの美人が咳をする　伊三郎
さわやかな咳が満座を威圧する　牧郎
咳払いに軽く自信をのぞかせる　春子
山茶花の新芽が運ぶ風も春　静江
補聴器で福祉後退聞いている　保蔵
救急車喪服着たまま連れられる　貞子

西宮北口川柳会　**妹尾**　**春江報**

ポスターを見てふと決めた入学式　冬子
入学式済めば普通の甘えっ子　きよ子
蟹すきの旅ほんのり酔うた夜の酒　隆子
白日の下で影なし夜の王　弘生
花散る夜はけだものと幕を引く　伊升
夜の辻をニヒルな男すっと折れ　紫香
万葉の乙女となって若菜つむ　みつ子
もう一度父母に逢い度い茜雲　笑女
驀進の箍定年で緩みだし　宏子
老いらくの恋ではないが好きな人　キミ
新社員いつもネクタイ曲ってる　美かど
時の風シルクロードに舞う砂塵　杜的
釜ヶ崎まだ人生は終わらない　半歩
地動説では手形など落ちませぬ　堕駄
晴着また出かける用をつくってる　求芽

定年の来る日来る日が日曜日　美津子
義足はずし畳へ転ぶ夜の深さ　三笑子
根負けをして新聞を二つ取る　水声
結論を出さずに散ってゆく桜　恵
入学に挿絵のような桜散り　年代
思秋期の女離婚の夢も持ち　一郎
影法師背中丸めて従いてくる　静枝
老妻の小言が多い春炬燵　保蔵
血圧の話コーヒーが冷めている　春江
入学も人事となり桜咲く　婦美子
退職をしてから妻にさからわず　光子
湯上がりへ夜の鏡にポーズとる　いわゑ
根気負け無口へ折れる朝の靴　春子
根気よくリハビリつづけて花の日も　文子
四十年夫と妻で居る根気　幽香
凡人の根気才女を脅かす　園歩
根気よく髭を抜いてる身分です　伊三郎
病院の窓口根気をためされる　郁栄

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

　雅洋
寂しくなると無縁仏の前に佇つ　亜成
一枚のカーテンで我が城保たれる　てまり
ポスターの折り目でスター顔ゆがみ　雄峰
うす暗いところの好きな仏たち　度
子の城を聖域にする過保護　のぼる
観光資源として新しくなる仏　有一
御仏の心マイクで流れ出す　博泉
仏さんの艶話も出る一周忌　千夢
勘当をされて王子は城を出る　聖地
目の黒いうちは渡さぬ俺の城　形水
水かけられて生粋な願いを聞く仏　入仙

川柳ねやがわ　高田　博泉報

結納なしでもらった妻に敷かれとく　あいき
持っているから色々と考える　亜成
カタカナをひらがなにする春の唄　度
値ぶみなど出来ないものをくれた人　あやめ
心配の数だけ剝いたキャベツの葉　かすみ
寒見舞い椿の主張しかと見る　冬葉
タダ酒は飲むまい卑しくなるばかり　眉水
耳垢となって溜った他人の愚痴　晴風
思い出は大きいザルのふかし藷　しま子
人魚ある日腰から下を悲しがり　三千子
うますぎるとは思った無料で恥を買い　琴音
かたつむり一戸建庭付移動式　一笑
腰曲げた遍路にきつい奥の院　覚然坊
他人の飯食べたと見える低い腰　柳宏子
買いそうな客へ手を揉む低い腰　一途
極楽も地獄も無料では行けず　静歩
洗剤が溝の蚯蚓を移転させ　亜鈍
厄払い食べてもらって礼を言う　てまり
腰なでる仕草へ子供も意識する　博泉
嫁姑背中に何か耐えている　司
レコードの溝一本を繰り返す　鉱平
ままごとのおやつ菫の花にする　右近
折鶴の色鮮やかな願いごと　礫
順番を間違えず出る春の草　麗水
凩は腰のあたりを駆けぬける　鼓城
転勤の椅子の固さにいる無言　秀果
限りない愛に無料を強いられる　弘生
柏手はいくつ打っても無料です　英壬子
フラダンス腰に電気を通わせる　吉甫
夕桜地震来そうな花の彩　酔々

富田林富柳会　藤田　泰子報

たくらみの女半日思案する　美佐子
初めてのデートの後は以下余白　森子
夜遊びの付けが溜った法善寺　喜酔
夫から遊びを取れば蔵が建ち　美緒
アルバムに夢二好みの遠い母　優
よもぎ摘む母は少女の頃でいる　与呂志
以下余白男一匹黙秘権　岳人
良心を少し騙してする遊び　泰子
人生の余白に生きて鶴を折り　きぬ
少年の遊びの中にある夕陽　ヌイエ
太陽が沈むと余白埋めるなり　美津子
亡母の年齢越えて鏡の前に立つ　ケイ子
さようなら言う度遊び上手くなる　美代

米子きゃら木川柳会　石垣　花子報

妻が笛吹いて定年後も踊り　とも子
森中が小人と踊る月のよい　千春
踊る夢捨てず人形色あせる　あい子
踊り疲れたあやつり人形は捨てられる　日枝子
自閉児の笑う踊りが見付からぬ　瑞枝
踊る輪へすんなり溶けた旅ごころ　みど里
ネジ切れてラストダンスの足止まる　美世
踊りながらもアイヌ行末知りつくし　花子
踊り子の背から峠の風が鳴る　千代

観桜川柳大会　藤井　明朗報

島に橋かかり流行押し寄せる　紫香
片思い女綺麗に歳をとり　潮花
結び目に古い女として生きる　雀踊子
結ばれるムードとなった流れ星　〆女
流行がどっと溢れる春の街　春江
慕う炎が胸を渦まくうしろ髪　はつ絵

流行を追って翔びたくなる女　貞子
次に出る言葉を知ってる父の酒　美代子
流行にうとく善人無口なり　与呂志
霧晴れてふと子を思う山桜　緑之助
年代の味噛みしめて夫婦老い　独仙
湯の里のさくら他国の言葉聞く　代仕男
片思いだったと互いに思いこみ　夢酔
ダルマに目入れて苦労した日を語る　きみえ
散る桜猪口に浮べば詩になる　多賀子
叱られた先生囲む同窓会　房子
結ぶ目も固く同志の意気が合い　軒太楼
初当選酒樽大きな音でぬく　正江
当選をしてからうつなループタイ　梟人
幸せに結ぶ苦労は惜しまない　光枝
流行を追えば個性が消えてゆく　松女
結ばれた縁　不満を乗りきる気　節枝
桜散るひとつの愛をたしかめて　衆園
流行を気にしながらの参観日　ゆき子
結んで開いて夫婦の遊戯です　鶴丸
さくら咲く女は旅をこころざす　孤呂二
結び目の固さを母の愛と見る　快哉
手を結ぶどちらも仮面つけたまま　舞吉
紅椿ポトリと落ちた片思い　登美也
合格でやっと朗らか受験生　幹伸
先生が裁かれているPTA　はじめ
先生の人権秤にかけてみる　正朗
ふる里の情けにひたる桜土手　芳子
桜土手飲む盃に花が散る　峰雪
先生を教える先生ほしくなり　蚊声
朗らかに暮そう余命ないいのち　清祥
祝盃を交し目出たく結ばれる　よし美

病む母へ手折るさくらを許されよ　秀子
バーゲンで会う先生はママの顔　文子
朗かな人で世間はほっとかず　孝華
先生の歴史へきざむ子等の顔　みどり
当選の実感しみじみ二人酒　とみ子
慕われる心つないだ手の温み　百代
当選が決まり静かな町になり　富子
先生のひよこも巣立つ花の春　はる代
初恋の日記だけ知る片思い　喜代美
消しゴムがとんだ嘘つく片思い　太伸
遠い空かなわぬ恋のひとが住む　初子
縁あって色の変ったのと結ぶ　巡歩
口ぐせの多忙を忘れ花の下　よし子
先生と生徒にすき間あるこわさ　ヤス子
当選のダルマ喜びわきかえり　マサコ
さくら餅女盛りを過ぎし手に　千里
風に散る桜人の背押して行く　竹乃
片思いだけで過した青春期　九歩
教師いま渦まく世論に立往生　吉野
不況風桜並木も詫びている　嘉寿子
春風のリズムで咲いて散るさくら　栄
下宿しておふくろの味なつかしみ　克子
これっきり逢えぬ別れへ散る桜　竹雪
先生の神聖犯す労働語　寿朗
結ぶ実は土のぬくみを疑わず　弘朗
こんなにも美味しい術後の水の味　花子
智に走る教師　人間置き忘れ　車楽
母親を慕ってさがす貰い猫　三喜子
ルンルンと流行の服街を行く　満江
慕いても別れる運命胸に秘め　きよ子
春の味なくてはならぬ蕗のとう　林蔵

風誘う桜そろそろ季を移す　紫吻
流行をさらり着ながす粋な女　ふさえ
生きている授業生徒もついてくる　信夫
流行を着て大胆に若返り　明朗

堺川柳会　河内天笑報

夜の蝶昼は素顔の母となる　山久
返品に少し心を見抜かれる　美幸
円陣は作戦を練る尻と尻　東雲
バラに降る雨を見ている胸さわぎ　冬二
ときめきは此処にもあったくしんぼ　柳伸
石女の涙を知っている花粉　浩一郎
人工受精で花粉の愛は伝わらず　月子
てらいなく花粉を待っているめしべ　天笑
鮮やかな色で男を待つ花粉　佐久良
通り魔の素顔が憎い夜の街　てるよ
スタートのときめきを知る青い空　夢遊
落された穴で苦肉の策を練る　千万子
お喋りな花粉どこまでとぶのやら　花仔
雨の夜別れ話を練る女　健司
見栄捨てた素顔心も軽くなり　美乙女
強烈に匂う花粉の落し穴　紀美女
ときめきの音とは知らぬ聴診器　喜酔
自らはとべぬ花粉にあるあせり　金太
玄関で仮面はずして父となる　夢成
反骨のときめきノックなどしない　与呂志
玉三郎男に戻す楽屋風呂　笑痴
自転車は素顔のままで乗るがよい　酔々
練りようかんの薄切りが気に入らず　冬葉
返品をしてからだるい風ばかり　元紀
末席で無謀の策を練る男　甘平
ときめきを抑え切れない老いの恋　幸太郎

本社六月句会

日時 六月七日（火） 午後六時

会場 なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19—12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題
おはなし　宮口笛生
「だんご」　板尾岳人選
「見込み」　高杉鬼遊選
「鈍い」　阿萬萬的選
「嘘」　黒川紫香選

席題 二題 当日発表

会費 五百円

各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

7月の兼題 「いけにえ」「ボタン」「貫く」「転向」

7月の本社句会は7日（木）

暑中広告受付！

★一口五百円（タテ3.3cm×ヨコ2.5cm大）本誌5段組の一段（柳界展望の一段）分が二千五百円です。

★**原稿〆切は6月25日**

申込みは
〒581八尾市中田二—三〇二高杉鬼遊方
川柳塔社会計室へ

●募　集●

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「コース」　柳楽鶴丸選
「夢」　岩田美代選
「竹」　古谷節夫選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「率直」　江城修史選
「稼ぐ」　小砂白汀選
「見る」　柴田英壬子選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

6月の常任理事会は1日（水）

定価 五百円（送料50円）
半年分 三千二百円（送料共）
一年分 六千三百円（送料共）
昭和五十八年五月二十五日印刷
昭和五十八年六月一日発行
編集兼発行人 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
〒545
大阪市阿倍野区三明町二—一〇—一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話（〇六）六三五—六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

＝編集後記＝

☆麻生路郎先生は「いのちある句を創れ」を標榜して門下の指導に当られ、本社句会の終了時には「いのちある句を創れ！創れ！創れ！」と三唱して散会した。☆いのちある句のいのちとは、と思いをめぐらせる。人麿の和歌、芭蕉の俳句のように後世まで語り継がれる名作の持つ偉大な要素を言うか。その人その人の生きざまをそのまま詠い上げれば、一瞬の火花であろうと、いのちある句と言えるのではなかろうか。☆同人の田中淑子さんは、昨年の三月に発刊になった白岩文衛氏の句集「出会い」の校正を手伝って川柳の良さを認識され、一年足らずの短い期間ながらいのちの軌跡を作品に残された。☆「点滴中ごめんねテレビ足で消し」「伊予柑の皮傷つけて香を賞でる」☆近日、そのいのちの跡が未完成のような句まで含めて、全句集になって世に出る。（薫）

☆近頃は、元号論争もすこし下火になっている。年表をみると、正式に元号が定まったのは、六四五年六月十九日孝徳天皇が「大化」元年と定めたのがその最初である。その後中断した時期もあったが、七〇一年の文武天皇の大宝元年から今日まで、ずっと元号は続いている。六四五年は律令政治がはじまるいわゆる大化の改新の年である。

中大兄皇子、中臣鎌足らが蘇我蝦夷・入鹿父子に対する軍事クーデターをはかりこれを滅ぼした有名な事件である。これによって皇族の中での長老軽皇子が即位して、孝徳天皇となった。孝徳帝のあと、皇極帝が重祚して斉明となるが、すぐ中大兄皇子にゆずり、天智帝となる。天智帝は、都を近江の大津に移し、近江令の制定、最古の戸籍「庚午年籍」の作製など、内政整備につとめた。また時刻を測定したことも有名。十日は時の記念日。

☆六月にちなんだ話。（酔）

▼五月一日から否応なしに煙草が値上げになった。国鉄と違って煙草も郵便料も赤字の理合わせ値上げではない。増税である。それだけ国が豊かになるのであるから国民は大いに協力しなくてはならない。が、戦争ごっこをする大人の玩具を買ってもらっては困るのである。会計宰では領収証に替えて官制はがきを使っているが、倍々ゲームのように二十円が四十円になっている。国民が余りおとなしいので気がさすのか広告付はがきなるものを考え、五円安く売ってくれる。しかし何時でもあるわけでなくスーパーの特価の様に数に限りがある。地方版と全国版があり、前者は後者より少なく並んでも買えない時がある。広告はがきを蒐集している郵便局の奥さんも買えず、他の局で買った私の一枚を定価で売ってあげた。その広告には「日本ダービー」とあった。公社は商売がお上手である。（き）

☆浅丘ルリ子は自動ドアーの前に立つとピョンピョン飛び上るそうな。そうしないと体重が軽すぎて開かないから、と何かの対談で云っていた。37キロ前後の彼女の話だから真実味はあるが、まさかと思う気持も半分はあった。

☆ところが最近、僕自身、同じような体験をしたのである。その時、飛び上りはしなかったが、一瞬爪先にグッと力を入れると、やっとドアーが開いた。

☆アメリカではエリートの資格に「WASP」というのがある。白人（W）でアングロサクソン系（AS）でプロテスタント（P）でなければというわけ。最近これにもうひとつSが加わった。「スリム」つまり痩せていることがエリートの新しい条件になったのである。スリム万歳！と云いたいところだが、スリム過ぎると何かと不都合なことが起こるものである。

☆薫風・酔々・鬼遊・史好の四人の体重を合わせても高見山関に及ばない。（史）

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十八年五月二十五日印刷
昭和五十八年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六七三号 川柳塔 六月号
定価 五百円（送料五十円）

洗練された嗜好遍歴は、
リザーブへ向かわせる。

ひと口、含んだだけで、揺ぎのない味に触れることができる。豊潤にして毅然たる味。リザーブを飲んだ方は、大人の洗練、都会のエレガンスを感じとることだろう。

サントリーリザーブ
標準的な小売価格3,200円／製造・販売 サントリー株式会社

この夏、おいしさひとりじめ……

アイスキャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋　そごう　松坂屋　阪神　ドージカ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店）
サン・ストア（中之島・淀屋橋各店）
京阪モール　新川売店　虹のまち店
泉北高島屋　南海難波駅構店
国鉄大阪駅店

551 HORAI

大阪・なんば
蓬莱
TEL (641) 0551

雑誌 05703－6